宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２２５集

延岡市所在

坂ノ下遺跡
中畑遺跡

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

２０１３

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２２５集

延岡市所在

坂ノ下遺跡
中畑遺跡

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

２０１３

宮崎県埋蔵文化財センター

坂ノ下遺跡遠景　（調査区北東より五ヶ瀬川を望む）

中畑遺跡遠景　調査区より五ヶ瀬川を望む（上が西）

序

宮崎県教育委員会では、一般国道 218 号北方延岡道路建設に伴い、平成 23 年度宮崎県延岡市北方町に所在する坂ノ下遺跡・中畑遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその報告書です。

坂ノ下遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が狭い調査区の中に 19 基検出されました。また、姫島産の黒曜石製の石鏃等も出土しており、他地域との交流があったことがうかがえます。縄文時代の当該地域に生きた人々の生活の様子の一端を明らかにすることができたことは、本調査の成果の 1 つです。

中畑遺跡では、縄文時代の遺物や古墳時代の遺構・遺物が検出され、特に打製石斧や石鏃が数多く出土しました。これは、土地に適応しながら生産、採取、狩猟等を生業として生きる人々の生活の営みを物語るものであり、今後の研究につながる貴重な資料となりました。また、古墳時代のやせ尾根に築かれた竪穴建物跡の在り方は、周辺遺跡の住居の様相と同じ傾向が見られ、山間部に生きる人々の生活の解明を進めていく上で、大きな意味をもつ成果と言えます。

これらの調査成果は、延岡市の歴史、ひいては東九州の歴史を知るには大変貴重な情報を提供するものです。この成果を学術資料として研究者のみの活用にとどまらず、地元はもとより、より多くの方々に御活用いただき、延岡の歴史さらには宮崎県の埋蔵文化財の未来についての認識と理解を深め、そして関心を高めていただく一助となれば幸いです。

我々の努めは地下に眠る歴史を顕彰することです。近い将来、当該周辺地域における歴史構造の具体像を解明するためにも、たゆまぬ調査・研究に邁進してその歴史的意義を明らかにしていく必要があります。そして、それらの成果をいち早く地域に還元していくことを、我々に課せられた責務とする所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力を賜りました関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

2013 年 2 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 北 郷 泰 道

例　言

1　本書は平成23年度一般国道218号北方延岡道路建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県延岡市北方町蔵田に所在する坂ノ下遺跡及び中畑遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会を主体に宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、坂ノ下遺跡は2011（平成23）年12月26日から2012（平成24）年3月2日まで、中畑遺跡は2011（平成23）年5月25日から2011（平成23）年11月14日まで行った。

3　発掘調査は、坂ノ下遺跡を吉永登志孝、太田真理子が、中畑遺跡を津曲健、吉永登志孝が行った。

4　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務について坂ノ下遺跡を吉永が、中畑遺跡を津曲が、それぞれ整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については当センター普及資料課松田清孝主査、調査第一課調査第二担当松本茂主査の協力を得た。

5　坂ノ下遺跡の空中写真撮影業務は、有限会社ふじたに、基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、株式会社東九州コンサルタントに委託した。中畑遺跡の空中写真撮影は、株式会社九州航空に、基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、太陽技術コンサルタント株式会社に委託した。

6　本書の執筆は、第Ⅰ章第1節を文化財課堀田孝博が、第Ⅰ章第2節・第Ⅲ章を吉永が、第Ⅱ章・第Ⅳ章を津曲が行い、全体の編集については、両者が協議のうえ行った。

7　石器実測は両遺跡ともに株式会社イビソクに委託し、年代測定分析はともに株式会社古環境研究所に委託した。

8　本書で使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1図（延岡）（諸塚）、国土地理院の承認助言を得て旧北方町役場が作成した2千5百分の1図をもとに作成した。

9　本書で使用した方位は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については海抜絶対高を示す。

10　本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編2007『新版　標準土色帖』29版に準じた。

11　本書における遺構名の表記は、土坑をＳＣ、竪穴建物をＳＡ、集石遺構をＳＩ、配石遺構をＳＷで示し、遺構番号については、遺構毎に整数の通し番号を付した。

12　挿図のうち、遺物の縮小率は原図の67％、33％であり、図中に2／3、1／3と表記している。

13　発掘調査途中から報告書作成の過程で、多くの方々から有益な助言を得た。特に、延岡市教育委員会文化課小野信彦氏には調査方法や遺物等について多くの御教示を得ることができた。

14　発掘調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

序

例言

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第２節　既往の調査と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第Ⅲ章　坂ノ下遺跡の調査

第１節　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第２節　整理作業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第３節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第４節　縄文時代早期の遺溝と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第５節　その他の時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

第６節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

第Ⅳ章　中畑遺跡の調査

第１節　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

第２節　整理作業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第３節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

第４節　旧石器時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

第５節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

第６節　古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

第７節　その他の時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

第８節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

挿 図 目 次

第 1 図　北方延岡道路整備計画図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 2 図　周辺の遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

坂ノ下遺跡

第 3 図　坂ノ下遺跡周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 4 図　グリッド配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 5 図　トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 6 図　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 7 図　集石遺溝分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 8 図　集石遺溝タイプ別分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 9 図　集石遺溝タイプ別分類図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 10 図　集石遺溝Ａタイプ実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 11 図　集石遺溝Ｂタイプ実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第 12 図　集石遺溝Ｃ１タイプ実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第 13 図　集石遺溝Ｃ２タイプ実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第 14 図　集石遺溝Ｃ２タイプ実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第 15 図　縄文時代早期、その他の時代の遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第 16 図　遺物分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

中畑遺跡

第 17 図　周辺の遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第 18 図　中畑遺跡調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第 19 図　Ａ区土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第 20 図　Ｂ区土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 21 図　旧石器時代の石刃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 22 図　Ａ区検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 23 図　Ｂ区の遺構分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第 24 図　SC1 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第 25 図　SC1 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第 26 図　SC2 実測図及び出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 27 図　SC3 実測図及び出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第 28 図　SC9 出土の縄文土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第 29 図　縄文時代土坑実測図（SC4 ～ SC7,SC9,SC10）・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 30 図　縄文時代出土遺物分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第 31 図　B2 区配石遺構実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第 32 図　縄文土器実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第 33 図　縄文土器実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

第 34 図　縄文土器実測図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 35 図　縄文土器実測図（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第 36 図　縄文時代晩期石器実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第 37 図　縄文時代晩期石器実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第 38 図　縄文時代晩期石器実測図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第 39 図　縄文時代晩期石器実測図（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第 40 図　縄文時代晩期石器実測図（5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第 41 図　縄文時代晩期石器実測図（6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第 42 図　縄文時代晩期石器実測図（7）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第 43 図　SA1 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第 44 図　SA1 竪穴建物跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第 45 図　集石遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第 46 図　配石遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第 47 図　集石遺構、配石遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第 48 図　時期不明のその他の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

表　目　次

第 1 表　坂ノ下遺跡集石遺構計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 2 表　坂ノ下遺跡遺物計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 3 表　中畑遺跡土坑計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第 4 表　中畑遺跡遺物観察表（土器）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第 5 表　中畑遺跡出土石器計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

図　版　目　次

巻頭図版 1　坂ノ下遺跡遠景（調査区北東より五ヶ瀬川を望む）
巻頭図版 2　中畑遺跡遠景（調査区より五ヶ瀬川を望む）

坂ノ下遺跡

図版 1　散礫・集石遺構分布状況
図版 2　散礫検出状況　SI1・SI3 検出状況
SI2 検出状況　SI3 検出状況
SI5 検出状況　SI10 検出状況
SI12 検出状況　SI13 検出状況
図版 3　SI15・SI19 検出状況　SI12・SI15・SI19 完掘
SI16 検出状況　SI17 検出状況
SI4 検出状況　SI4 完掘
SI6 検出状況　SI6 配石
図版 4　SI7 検出状況　SI7 配石

SI8 検出状況　SI8 配石
SI8 完掘　SI9 検出状況
SI9 配石
図版 5　SI11 検出状況　SI11 配石
SI14 検出状況　SI14 配石
SI18 検出状況　SI18 配石
SI18 完掘　調査区完掘状況
図版 6　縄文時代早期土器　縄文時代早期石器（石鏃・剥片）
縄文時代早期石器（磨石・剥片）　その他の時代の遺物

中畑遺跡

図版 7　中畑遺跡全景　中畑遺跡全景 B 区
図版 8　A 区谷完掘状況　A 区谷内部遺物出土状況
SC1 遺物出土状況　SC2 遺物出土状況
SC3 検出状況
図版 9　SC4 半裁状況　SC5 完掘状況　SC6 完掘状況
SC7 完掘状況　SC9 半裁状況　SC10 検出状況
SW2 検出状況　B2 区北西壁阿蘇溶結凝灰岩露出状況
図版 10　SA1 床面検出状況　SA1 土層堆積状況 1
SA1 土層堆積状況 2　SA1 立地状況
図版 11　SA1 遺物出土状況 1　SA1 遺物出土状況 2　SI1 検出状況
SI1 配石状況　SW1 検出状況　SW1 完掘状況
SI2 検出状況　十字形石器出土状況
図版 12　旧石器時代の遺物　SC1・2・3・9 出土縄文土器
SC1・2・3 出土石器　SC1・2 出土石器
縄文時代早期土器
図版 13　縄文時代晩期土器 1　口縁部Ⅰ①類　縄文時代晩期土器 2　口縁部Ⅰ②a 類
図版 14　縄文時代晩期土器 3　口縁部Ⅰ②b 類　縄文時代晩期土器 4　口縁部Ⅰ②b 類、Ⅰ③類
図版 15　縄文時代晩期土器 5　Ⅰ④類　縄文時代晩期土器 6　胴部
図版 16　縄文時代晩期土器 7　底部　縄文時代晩期土器 8　精製土器
図版 17　打製石鏃 1　打製石鏃 2　半月形刃器・異形石器・石匙・石錘・二次加工剥片
剥片・石鑿・磨製石製品・掻器
図版 18　打製石斧 1　打製石斧 2
打製石斧 3　磨製石斧
図版 19　横刃形石器・十字形石器・円盤状石器　打欠石錘・切目石錘
敲石　石核・礫器
図版 20　SA1 出土遺物　磨石・砥石・須恵器　SI1・SW1 出土遺物
その他の遺物　参考資料　流紋岩　参考資料　土師器

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯（坂ノ下遺跡・中畑遺跡）

一般国道 218 号北方延岡道路は、現一般国道 218 号に並行して、延岡市北方町蔵田から延岡市天下町までを結ぶ延長 13.1km の高規格幹線道路であり、建設省九州地方整備局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所、以下「延岡河川国道事務所」と表記）が 1996（平成８）年度に事業化し、2001（平成 13）年度より工事着手している。

同事業は１～３工区に分割して延岡側から順次実施されているが、路線内における埋蔵文化財に関する協議を継続中であり、必要に応じて発掘調査等を実施してきた。このうち３工区（舞野～延岡、延長 2.1km）が 2006（平成 18）年２月 18 日に、２工区（北方～舞野、延長 6.4km）が 2008（平成 20）年４月 26 日に供用開始となり、残る１工区（蔵田～北方、延長 4.6km）については同年３月に実施した分布調査の結果に基づき、路線内の 15 箇所を対象として協議を重ねている。

坂ノ下遺跡は当初 1,000㎡を対象としていたが、再度現地踏査を行った結果、北西側に隣接する緩斜面も含めた形での確認調査が必要であることを延岡河川国道事務所に説明し、調査についての了承を得た。確認調査は 2009（平成 21）年６月２日、10 月 27 日、10 月 29 日に実施し、300㎡について埋蔵文化財が影響を受けると判断した。

中畑遺跡は 4,200㎡を対象として 2009（平成 21）年 11 月 13 日、2010（平成 22）年５月 20 日、５月 21 日に確認調査を実施したところ、うち 2,500㎡（北側の栗林部分 1,500㎡、南側の水田部分 1,000㎡）について埋蔵文化財が影響を受けると判断した。

中畑遺跡の発掘調査委託契約は 2011（平成 23）年４月４日付けで締結したが、遺跡が国道からは、やや入り込んだ場所に位置しており、発掘調査に伴う諸器材の搬入や関係車両の進入が困難であった。そこで延岡河川国道事務所と協議を重ね、進入路の整備や通行時の安全確保等について多大な協力を受

九州中央自動車道建設促進協議会発行　九州中央自動車道（九州横断自動車道延岡線）を改編

第１図　北方延岡道路整備計画図

けた。またトンネル坑口付近に位置するため、発掘調査期間の確保にあたっては工事スケジュールとの調整が必要であったが、この点についても延岡河川国道事務所との協議を継続的に行いつつ、調査の円滑化を図った。

坂ノ下遺跡も中畑遺跡とほぼ同様の条件にあったが、トンネル工事が先行していたため工事完了後に発掘調査を実施する方向で検討してきた。その後、トンネル工事も完了し、遺跡周辺の盛土工を急ぎたいとの打診があったため、事務所設置箇所・駐車場の確保、遺跡までの進入路の整備等について協議し、同年12月5日付けの変更契約により発掘調査を追加することとなった。

発掘調査は宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、中畑遺跡については平成23（2011）年5月25日から11月14日まで、坂ノ下遺跡については同年12月26日から平成24（2012）年3月2日まで実施した。

第2節　調査の組織

坂ノ下遺跡、中畑遺跡発掘調査および整理作業・報告書作成は以下の組織で実施した。

調査主体　宮崎県埋蔵文化財センター

所　長	森　　隆　茂	（平成２３年度）
	北　郷　泰　道	（平成２４年度）
副所長	北　郷　泰　道	（平成２３年度）
	佐々木　真司	（平成２４年度）
総務課長	坂　上　恒　俊	（平成２３・２４年度）
総務担当リーダー	長友　由美子	（平成２３年度）
	高　園　寿　恵	（平成２４年度）
調査第二課長	永　友　良　典	（平成２３・２４年度）
調査第二課調査第四担当リーダー	大　村　公美恵	（平成２３年度）
	松　林　豊　樹	（平成２４年度）

調査担当

坂ノ下遺跡

調査第四担当	主　査　吉永　登志孝
	主　事　太田　真理子

中畑遺跡

調査第四担当	主　査　津曲　　健
	主　査　吉永　登志孝
	主　事　太田　真理子

整理作業担当

坂ノ下遺跡

調査第四担当	主　査　吉永　登志孝

中畑遺跡

調査第四担当	主　査　津曲　　健

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

延岡市は、宮崎県の北部日向灘に面し、大崩・祖母・傾山系や九州山地に源を発する五ヶ瀬川、北川、祝子川の下流域に広がる沖積平野を中心に周辺山地や丘陵地より構成されている。縄文海進時には五ヶ瀬川の分岐点近くの天下町あたりが海岸線だったと思われるが、その後、五ヶ瀬川・大瀬川・祝子川・北川の各河川の浸食運搬作用で流下した堆積物が日向灘の沿岸流による海岸砂州でくいとめられて沖積平野を形成した。各河川の河口部では三角州が、上流部では氾濫原性低地が見られる。また、それらの間には海岸平野性低地、埋積谷低地が分布している。沖積平野には市街地や住宅地、工業地域が集まり県北部の中心都市となっている。平野の北方には行縢山（むかばきやま）（829.9 m）、可愛岳（えのたけ）（727.7 m）といった火成岩からなる急峻な山体が高平山（こうびらやま）（406.6 m）や岡富山（おかとみやま）（198 m）などの堆積岩からなる低地を貫いて分布し、南方には愛宕山（あたごやま）（251.2 m）から南西方向に連続する堆積岩からなる山地が分布している。五ヶ瀬川流域およびその支流には、河成段丘や阿蘇火砕流堆積物からなる段丘が見られる。その阿蘇火砕流堆積物は約 12 万年前の阿蘇 3 と約 9 万年前の阿蘇 4 が五ヶ瀬川流域に分布し、阿蘇 3 は谷沿いの低い部分に見られるのみで、段丘は大部分が溶結した阿蘇 4 からなる。火砕流堆積物からなる段丘は、五ヶ瀬川やその支流により深く浸食され、その高所は比較的緩やかな傾斜の台地や丘陵となっているが、川に面した端部は急崖をなし起伏に富んだ地形を形成している。

本書で報告する坂ノ下遺跡、中畑遺跡は延岡市北方町蔵田に所在する。旧北方町は、平成 18 年 2 月 20 日に延岡市と合併している。（以下、北方町と記する。）北方町は、市の西部に位置し、町の南部を東西 15㎞、南北 23㎞あまりの町域を占めて五ヶ瀬川が流れている。水量が豊富で水質清澄な河川で、幹川流路延長 106㎞、流域面積 1,820㎢の一級河川である。そして、町域面積のほぼ 89％が山林で占められ、北には 1,000 m級の大崩山・鬼の目山などの山々が、東は 400 ～ 800 m級の行縢山・霧子山などが、南西は速日峰（二子山）が、西は比叡山などの山々が連なり、平地はわずかに南部の五ヶ瀬川流域やその支流である曽木川流域にみられるほどである。北方町の遺跡は、前述した五ヶ瀬川流域及び曽木川流域に発達した阿蘇火砕流堆積物からなる段丘上に集中している。

今回報告する 2 つの遺跡の立地条件は以下のとおりである。

坂ノ下遺跡は、延岡市北方町蔵田辰 166-3 に所在している。周知の埋蔵文化財包蔵地である蔵田遺跡と駄小屋遺跡の中間に位置し、北方町内でよく見られる他の遺跡と同じように、阿蘇 4 火砕流堆積物からなる丘陵地に立地している。五ヶ瀬川中流域左岸の標高 98 m～ 102 mの丘陵部の先端に位置し、丘陵部は南西方向に緩やかに傾斜している。五ヶ瀬川河床では上流域の地質を反映した豊富な石材が採取可能である。水晶やホルンフェルス、流紋岩等の剥片石器の加工に適した石材の原産地からの距離も比較的近い（直線距離 30㎞圏内）位置にある。

中畑遺跡は、延岡市北方町蔵田辰 399 他に所在する。遺跡は、阿蘇 4 火砕流堆積物のつくる段丘が開析されて残った標高約 130 mの狭小な丘陵尾根筋上に位置し、五ヶ瀬川との比高差は約 100 mある。調査区の大部分は、東向きの斜面地にあり、上部には杉林から続く平坦地がわずかにある。調査区両側

の谷筋には、五ヶ瀬川に注ぐ水の流れがあり、水田に利用されている。周辺には、国道 218 号椎畑バイパス建設に伴って平成元年～５年にかけて発掘調査された打扇遺跡、早日渡遺跡、矢野原遺跡、蔵田遺跡がある。

第２節　既往の調査と歴史的環境

北方延岡道路事業関連の発掘調査は２工区、３工区の区間について平成 14 年度から実施しており、山田遺跡、山口遺跡第２地点、黒仁田遺跡、赤木遺跡第８地点の４遺跡の発掘調査を行っている（図１参照）。山田遺跡は主に旧石器時代や縄文時代早期の遺構や遺物が、山口遺跡第２地点は弥生時代後期から古墳時代中後期にかけての集落跡が、黒仁田遺跡は主に旧石器時代や弥生時代・古墳時代の遺構や遺物が、赤木遺跡第８地点（第二次・三次調査）は姶良Ｔｎ火山灰層（以下 AT）を挟む上下位において、旧石器時代の遺構・遺物が検出された。１工区については 2009（平成 21）年度の南久保山小堀町遺跡が最初の発掘調査で、引き続いて北側丘陵の十郎ヶ尾遺跡の調査を行った。十郎ヶ尾遺跡では、集石遺構、竪穴建物跡がそれぞれ１基検出されるとともに、遺物では旧石器時代の角錐状石器、縄文時代早期の押型文土器、石鏃、剥片、弥生時代・古墳時代の土器、石器などが出土し、長期にわたる丘陵地での生活の痕跡が確認された。

また、北方延岡道路と接続する国道 10 号延岡道路（北川町～延岡市）の全長 20.6km は平成６年度から事業に着手したが、埋蔵文化財の発掘調査は平成９年度から 15 年度までの７年間にわたって行われた。延岡道路関連の遺跡については林遺跡、吉野第２遺跡、今井野第２遺跡、天下城山遺跡、野門遺跡の発掘調査を行っている。林遺跡は、平成９年～ 12 年度の４カ年調査を行い、吉野第２遺跡は、平成 12・13・15 年度に調査を行った。ともに旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出されている。

延岡市北方町の考古学的調査は、1966（昭和 41）年の菅原洞穴、1968（昭和 43）年の岩土原遺跡の発掘調査に端を発する。それ以降途絶えていたが、昭和 63 年よりゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財調査員を配置してから、町内各地の各種開発事業と埋蔵文化財の保護との調整を図るための発掘調査が行われてきている。最近では、延岡河川国道事務所が実施している一般国道 218 号北方延岡道路建設に伴う発掘調査が行われ、当地域における歴史の一端が明らかになりつつある。ここでは既往の調査や歴史的事項を概観することで、この地で活動した人々の動きを追っていきたい。

旧北方町における人類の生活痕跡は旧石器時代までさかのぼることができる。それは、五ヶ瀬川沿いに阿蘇溶結凝灰岩上の台地や河岸段丘が発達していたことなど、人々の生活にとって様々な立地条件を備えていたからと思われる。

北方町の旧石器時代の遺跡として、岩土原遺跡、矢野原遺跡等がある。矢野原遺跡では、1992（平成４）年に調査が行われ、ＡＴ層上下において旧石器時代に帰属する２つの文化層が確認された。ＡＴ層下の第Ⅰ文化層からは削器・石核・剥片類が、ＡＴ層上の第Ⅱ文化層からは遺構として礫群、遺物としてナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・掻器・削器・石錘・石核・剥片類など約 3,000 点にも及ぶ遺物が出土している。蔵田遺跡では、1993（平成５）年に調査が行われ、ＡＴ層上の第Ⅵ層からナイフ形石器・剥片尖頭器・削器・石鏃・石核・剥片類が出土した。北方延岡道路関連の遺跡として平成 18 年度に調査された黒仁田遺跡では、ＡＴ層上位から狸谷型のナイフ型石器や剥片尖頭器を

含む 70 数点からなる石器群、更にその上層から細石刃石器群が確認された。特に細石刃石器文化層では複数の石器ブロックが確認されており石器製作作業場としての可能性が報告されている。

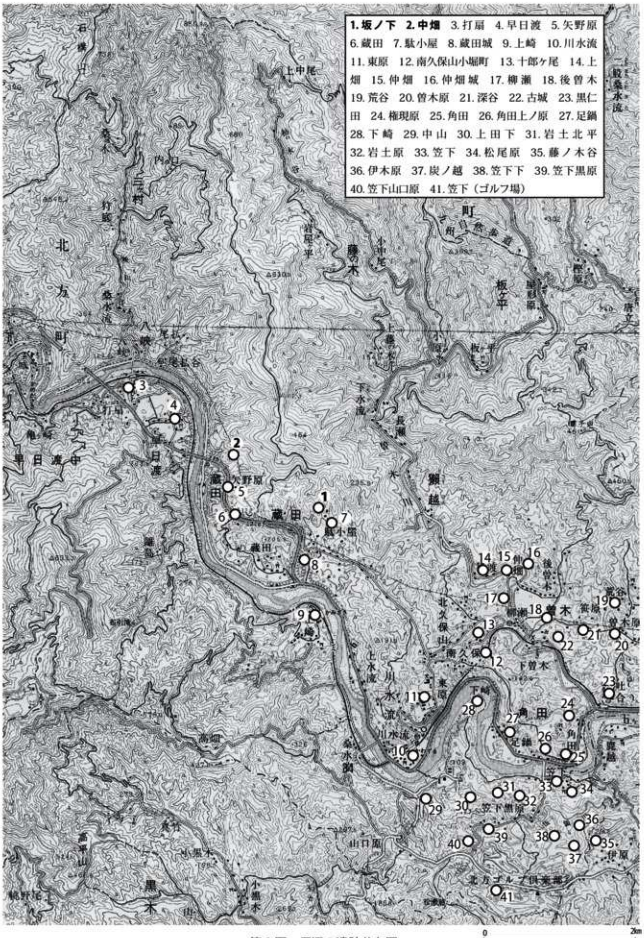
縄文時代早期では、矢野原遺跡、上崎地区遺跡、笠下遺跡、早日渡遺跡、曽木原遺跡等がある。矢野原遺跡では、押型文土器・集石遺構 15 基が、上崎地区遺跡では早期の集石遺構 13 基・土坑 2 基が、曽木原遺跡で連結土坑が検出されている。笠下遺跡では、アカホヤ層下位より 150 基を超える集石遺構を検出している。また、集石遺構からは、押型文土器・貝殻文円筒土器・吉田式土器・撚糸文土器などが出土している。前期では笠下下原遺跡で轟 B 式土器・曽畑式土器が、中期では笠下遺跡で船元式土器が出土している。後期では菅原洞穴で鐘ヶ崎土器等が出土した。晩期では、南久保山小堀町遺跡において、晩期の打製石斧や突帯文土器等が出土している。特に粗製深鉢片と砂岩製の剥片及び打製石斧(扁平打製石斧等) の出土数の多さが際立っている。

弥生時代の遺跡は、昭和 28 年に北方町から板付Ⅱ式と思われる土器片が採集され、宮崎大学に保管されている。後期初頭になると表採品ではあるが、瀬戸内系の土器の流入が見られる。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物跡が、笠下遺跡、蔵田遺跡、打扇遺跡、早日渡遺跡等で検出されている。遺物には、甕・壺・高坏・ミニチュア土器・石包丁等がある。坂ノ下遺跡と中畑遺跡のほぼ中間に位置する蔵田遺跡では、竪穴建物跡 1 軒が傾斜地で検出され、床面が平行になるよう築かれていた。また、その住居跡の一角から磨製石鏃の未製品が 45 個ほど確認され、石器製作の工房の可能性が指摘されている。近年、五ヶ瀬川流域特に山間部における弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡の調査例が増加しているが、その中には急傾斜地や狭小な尾根の端部などから検出された調査例もあり、山間部における集落形態を考える上で注目される。

古墳時代では、後期の箱式石棺が矢野原・駄小屋・後曽木等で発見されている。昭和 12 年に県指定史跡となった「北方村古墳」も後期箱式石棺群の一つである。延岡市教育委員会が新最終処分場建設に伴って平成 21 年度に調査した上田下遺跡では、古墳時代前期と想定される竪穴建物跡が 10 軒検出され、壺・甕・高坏・打製石包丁・管玉・鉄族・須恵器等が出土している。

古代・中世では、南久保山小掘町遺跡で須恵器・土師器・陶磁器等が出土している。中世になると北方地区各地で六地蔵や五輪塔等が散見される。中世山城跡として、蔵田城や仲畑城がある。笠下遺跡では祭祀遺構が検出され、備前焼のすり鉢や明銭等が出土している。

近世は、延岡藩の支配下に入り、内藤氏時代に木炭生産や鉱山開発が盛んに行われ、明治新政府へと引き継がれた。北方地区では江戸時代から明治時代にかけて、日平鉱山をはじめ猿渡鉱山、槇峰鉱山等の鉱山開発が盛んに行われた。特に、三菱に経営権が移ってからの槇峰鉱山は 1900（明治 33）年以降に発電所建設や技術革新が積極的に行われ、格段の活況を呈した。鉱山の賑わいは北方地区の生産基盤になるなど、経済的効果はもちろん文化面での影響も多大なものがあった。(延岡市教育委員会 2008) 平成 18 年の延岡市との合併に伴う市域の拡大ともに交通網も着々と整備されつつあり、今後さらなる発展が期待される。



第２図　周辺の遺跡分布図

【参考文献・引用文献】

北方町史編纂委員会 1972「北方町史」北方町

北方町教育委員会 1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第 1 集』

北方町教育委員会 1991「速日峰地区遺跡」『北方町文化財報告書第 2 集』

北方町教育委員会 1992「速日峰地区遺跡Ⅱ」『北方町文化財報告書第 3 集』

北方町教育委員会 1992「笠下下原遺跡」『北方町文化財報告書第 4 集』

北方町教育委員会 1992「南久保山小堀町遺跡」『北方町文化財報告書第 5 集』

北方町教育委員会 1993「速日峰地区遺跡Ⅲ」『北方町文化財報告書第 6 集』

北方町教育委員会 1995「速日峰地区遺跡Ⅳ」『北方町文化財報告書第 7 集』

北方町教育委員会 1999「速日峰地区遺跡Ⅶ」『北方町文化財報告書第 13 集』

北方町教育委員会 2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第 23 集』

北方町教育委員会 2005「打扇上ノ原遺跡」『北方町文化財報告書第 24 集』

北方町教育委員会 2005「上崎地区遺跡 5」『北方町文化財報告書第 25 集』

北方町教育委員会 2006「北方町内遺跡 6」『北方町文化財報告書第 27 集』

北方町教育委員会 2006「上崎地区遺跡 6」『北方町文化財報告書第 28 集』

鈴木重治 1973「宮崎県岩土原遺跡の調査―土器伴出石器文化の一例―」『石器時代」第 10 号 石器時代文化研究会

田中茂 1962『東臼杵郡　北方村の古墳』北方村教育委員会

延岡市教育委員会 1996「市内遺跡詳細分布調査報告書」『延岡市文化財調査報告書第 16 集』

延岡市教育委員会 2001「吉野遺跡（第 4 次）　吉野遺跡（第 6 次）　延岡古墳群第 16 号墳　多々良第 1 遺跡　新宮遺跡　吉野遺跡（第 7 次）」『延岡市文化財調査報告書第 24 集』

延岡市教育委員会 2008「上崎地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書第 36 集』

延岡市教育委員会 2010「東原遺跡（第 7 次）北久保山遺跡（第 2 次）」『延岡市文化財調査報告書第 41 集』

宮崎県 1989「宮崎県史」 資料編　考古 1

宮崎県教育委員会 1995「打扇遺跡 早日渡遺跡 矢野原遺跡 蔵田遺跡」『一般国道 218 号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

宮崎県教育委員会 1990「林遺跡」『一般国道 10 号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』

宮崎県埋蔵文化財センター 2005「山口遺跡第 2 地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 99 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2006「今井野第 2 遺跡　天下城山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 135 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2006「野門遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 136 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「赤木遺跡第 8 地点（第二次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 145 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 146 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「吉野第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 155 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「赤木遺跡第 8 地点（第三次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 166 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2008「林遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 174 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 181 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「赤木遺跡第 8 地点（第一次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 182 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「南久保山小掘町遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 206 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「十郎ヶ尾遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 218 集』

第Ⅲ章　坂ノ下遺跡の調査

第１節　発掘調査の概要

確認調査の結果から、焼礫や縄文土器が確認されたTr9、Tr10付近を本発掘調査の対象として約300㎡が設定された。調査区の地形と作業中の安全面を考えて調査範囲を設定し、発掘調査面積を86㎡とした。

平成23年12月26日に重機による掘削を行い、表土もしくは現在の耕作土（Ⅰ層）を除去した。その後３本のトレンチを設定し、土層を確認しながら人力によって掘削を進めることとした。Ⅱ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面で規則的に並ぶ同じ形状の土坑を５基確認したが、そのうち１つからビニル袋片が出土したことから、全て現代に帰属する遺構であると判断した。

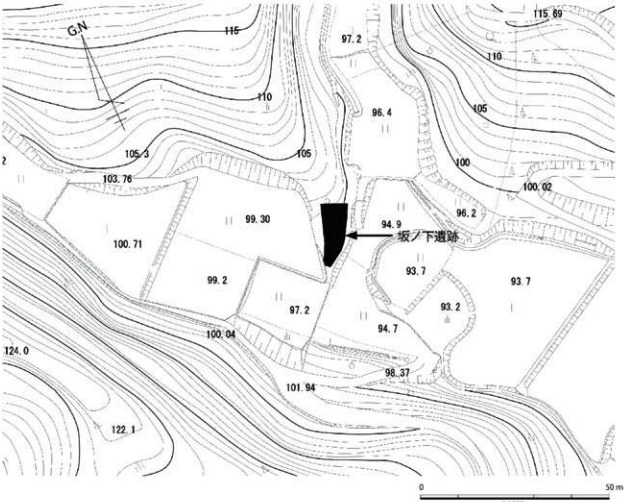
Ⅱ層を除去すると、その下層中（Ⅲａ層）に拳大の礫が多量に確認され、調査区の南半にかけて一面に拡がっていた。礫は、赤変しており、熱を受けたものと思われ、特にB3Grに集中していた。礫を除去しながら、更にⅢａ層の掘削を進めると、縄文時代早期のものと思われる石鏃や少量の土器片が確認された。散礫の除去後、Ⅲａ層下面で、１９基の集石遺構を検出した。掘り込みのある集石遺構はⅢａ層から掘り込まれており、Ⅲａ層が遺構構築面だと考えられる。平面的な調査は同一面でのみ行い、Ⅲａ層より下層については、３箇所のトレンチ（１×１㎡）を調査区の北端・中間・南端に設定し、堆積状況を確認した。

調査区では、国土座標に基づいて、５ｍ間隔のグリッドを設定した。西から東へＡ、Ｂ、Ｃを北から南へ１、２、３と割り、図面作成や遺物の取り上げなどの記録作業に供した。実測や写真撮影は調査員が行い、写真については、６×６判モノクロ・リバーサル写真、35㎜モノクロ・リバーサル写真を併用した。遺跡の空中写真については平成24年１月30日に撮影を実施した。３月２日に事務所等を撤去し、環境整備を行い、現地作業を完了した。総調査日数は39日であった。

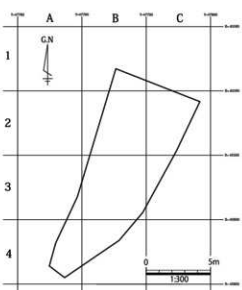
第２節　整理作業の概要

現地調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センターに持ち帰り、記録物の整理を行った。平成24年５月１日より整理作業を開始し、出土品の洗浄・注記作業が終了した後、実測作業に入った。出土品については、15点を図化して写真撮影を行った。また、打製石鏃などの剥離の細かい石器については、実測を委託した。作業の効率化と報告書内容の充実化を図るために、DTPを用いた。使用したソフトウェアは遺物・遺構実測図のデジタルトレースについてはAdobe社製のIllustrator(CS6)である。遺物写真はAdobe社製のPhotoshop(CS6)で加工した。原稿はAdobe社製InDesign(CS6)で編集を行った。また、遺構出土の炭化物について放射性炭素14年代測定を委託して実施した。

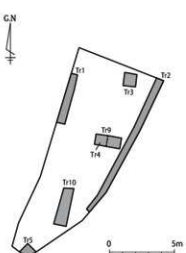
そして、報告書刊行に係る製図及び執筆の全てを11月までに完成させ、11月から平成25年２月にかけて印刷・製本作業を行った。３月には出土品及び図面・写真などの記録物の登録作業を行った。坂ノ下遺跡の教育普及活動は以下の通りである。発掘調査最前線2012遺跡発掘速報会を平成24年８月19日（日）に宮崎県立図書館にて実施し、「古の斜面地の生活」と題し報告を行った。



第３図　坂ノ下遺跡周辺地形図



第４図　グリッド配置図



第５図　トレンチ配置図

第３節　基本層序

坂ノ下遺跡は、五ヶ瀬川の左岸に位置し、標高 98 m～ 102 mの丘陵部の先端に位置している。丘陵部は南西方向に緩やかに傾斜している。遺跡の所在する丘陵地の基盤は主として阿蘇４火砕流堆積物である。この火砕流は約９万年前に活動した大火砕流であり、約 13 万年前に活動した阿蘇４火砕流堆積物を浸食して形成された古五ヶ瀬川水系を埋め尽くして太平洋に到達している。本遺跡周辺の調査開始前の状況は、周囲に入り組んだ谷地形を利用した棚田が形成されており、棚田形成に伴って、調査区の両端は削平されていた。調査対象地である丘陵上では、栗が栽培されていた。過去にはスイカの栽培をするために穴を掘っていたという旧地権者の話もあり、鬼界アカホヤ火山灰層の上面には耕作に伴うものと思われる土坑が確認できた。Ⅰ層は、現代の耕作土である。Ⅱ層以下は降下火山堆積物の土壌を主体に構成されている。

坂ノ下遺跡の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層は黒褐色（Hue7.5YR3/2）土で表土層、現代の耕作土である。粘性ややあり、しまりなし。アカホヤ粒子 5㎜～３㎜を３％含む。層厚は約 20cm である。

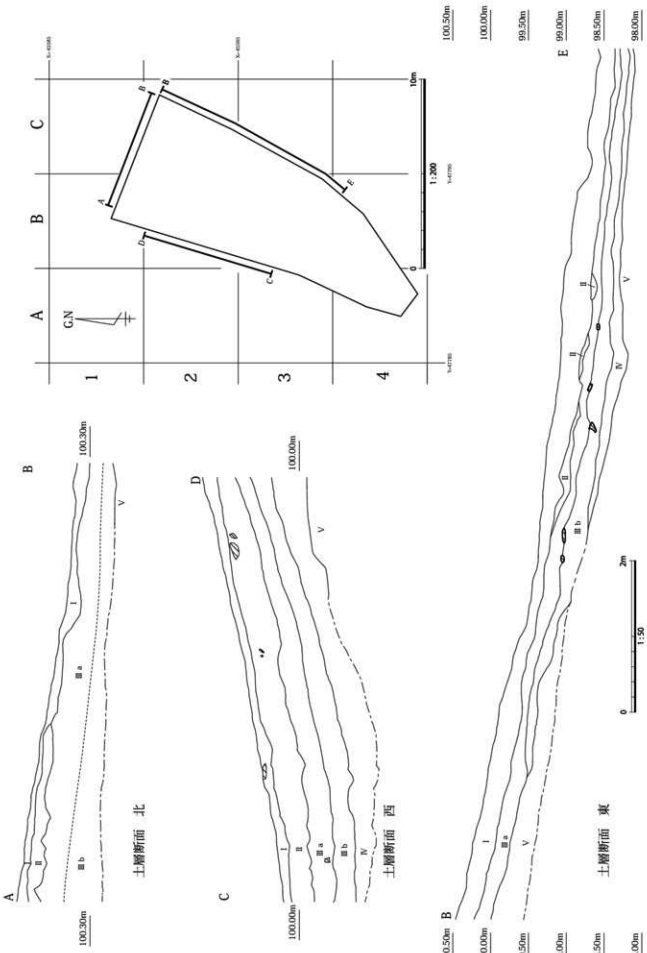
Ⅱ層は鬼界アカホヤ火山灰層（Hue7.5YR5/6）である。ややしまる。東側の堆積は薄く、堆積が見られない部分もあるが、それ以外は良好に保存されている。層厚は 10cm ～ 40cm である。

Ⅲ層は褐色（Hue10YR4/4）土である。粘性の違いによりⅢａ層とⅢｂ層に分層した。粘性がややあるものがⅢａ層であり、赤化した拳大の礫を大量に含み、縄文時代早期の遺物包含層である。粘性がⅢａ層よりも強いものがⅢｂ層である。層厚は、Ⅲａ層は 5cm ～ 20cm、Ⅲｂ層は 10cm ～ 30cm である。

Ⅳ層は暗褐色（Hue10YR3/4）土である。粘性あり、ややしまる。層厚は 20cm ～ 40cm である。

Ⅴ層は黄褐色（Hue10YR5/6）土である。しまりなし、粘性あり。1cm から５cm の灰褐色の礫を 40％含む。層厚は 40cm 以上である。

西壁土層断面写真


A
B
C
1
2
3
4
G.N
1:200
10m
土層断面 北
土層断面 西
土層断面 東
100.30m
100.00m
100.50m
99.50m
99.00m
98.50m
98.00m
1:50
2m

第６図　土層断面図

第４節　縄文時代早期の遺構と遺物

１　遺構・遺物の分布

鬼界アカホヤ火山灰層直下で散礫を確認した。散礫は、北側の一部を除き、ほぼ一面に広がっていた。集石遺構の分布については、規則性は見られないが、遺跡の上部（北側）で検出されたものについては簡便な構造のものが多く、遺構の中央部から下部に施設構造の発達したものが多いことが確認できた。調査区北西部には、遺構は確認できなかった。遺物は B3Gr に集中して出土した。

２　検出遺構と出土遺物

（１）遺構

散礫

前述の通り、集石遺構上面に散礫を確認した。散礫は赤化礫を含む拳大ほどの粗質な砂岩や千枚岩質の頁岩で構成されていた。下部から検出された集石遺構の構成礫も同様の礫で構成されており、集石遺構に伴う廃棄礫や準備礫などが堆積した散礫であると判断した。

集石遺構

集石遺構は、19 基検出された。19 基は、構成礫が平面上に集積しているだけのもの、掘り込みのみがあるもの、掘り込みと配石があるものと種々のタイプがみられた。これらを分類するにあたって、集石遺構の埋土とその周囲の土が同質のものが多く掘り込みのラインが明確でないものがあったり、構成礫についてもどの集石遺構もほぼ同じ石材が使用されていたことから、「掘り込みの有無」と「配石」の設置状況を重視することとした。本調査では、構成礫とは異なる形状と大きさ、人為的に配置した礫と認識できるものを配石と定義した。

19 基の集石遺構を上記の「掘り込みの有無」、「配石の有無」の２つの観点から、以下のように４つのタイプに分類した。

A 類　礫が周辺部よりも密に集まっており、掘り込みを持たない。また、下部の配石も見られない。(SI1,SI2,SI3,SI5,SI12)

B 類　礫が周辺部よりも密に集まっており、掘り込みを持つが下部の配石を持たない。
(SI10,SI13,SI15,SI16,SI17,SI19)

C 類　礫が周辺部よりも密に集まっており、掘り込みを持ち、下部に配石を持つ。

C1 類　配石の置き方が疎らなもの (SI11,SI14,SI18)

C2 類　配石が掘り込みに沿って配置されたもの (SI4,SI6,SI7,SI8,SI9)

A 類は５基、B 類は６基、C 類は８基（C1：３基、C2：５基）であり、C 類は 19 基中８基で全体の 42％を示した。何らかの施設構造を持つもの（B 類及び C 類）は 14 基で 19 基全体の 74％にのぼった。配石のあるものは円形、もしくは楕円形の掘り込みを有する。掘り込みの深さは、残存する配石の最上部から底部までとした。配石のないものについては、上端と下端の距離を深さとした。

以下に、各類別の特徴を述べる。

A 類は、掘り込みを持たず、平坦面に集積するものである。いずれも礫の集積状態が B 類、C 類に比べ疎らである。

B 類の掘り込みは、平均 25cm である。配石があるものの平均は 34cm であり、相対的に浅いことが分かる。

C1 類は配石が確認できるが、中央部のみに置かれているなど掘り込みに沿って配置されているとは言えない状態であった。C2 類は、施設構造の極めて発達した構造のものである。配石の配置状況は、SI4、SI6、SI7、SI8、SI9 は掘り込みに沿って設置されている。 SI7 は花弁状に配石を配置し、SI9 は底面に大きめの礫を敷き、壁面に垂直に設置するなど特徴的な設置状況であった。

構成礫の石材については、粗質な砂岩や千枚岩、千枚岩質の頁岩、溶結凝灰岩が用いられていた。配石については、千枚岩、千枚岩質の頁岩がほとんどであり、鱗片状の剥離が発達していた。

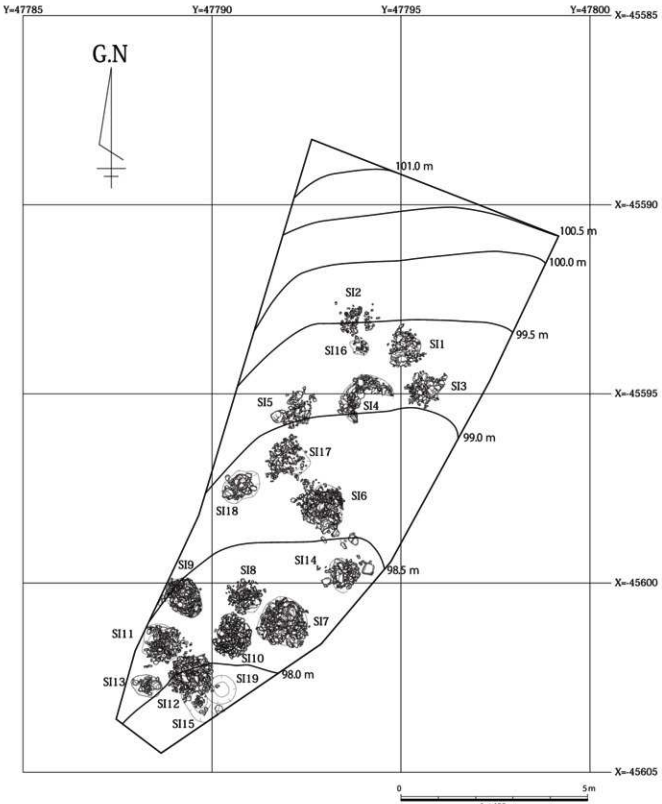
検出された集石遺構を前述の類型に基づいて分類し、下記の定義のとおり計測し、一覧として集石遺構計測表（第 1 表）に示した。

集石遺構の大きさについては礫の広がりを示すために、その直径は構成礫の両端間とした。また、掘り込みの直径については配石のあるものは配石の両端間、配石のないもの又は掘り込みに沿って配石が設置されていないものは掘り込みの上端の両端間とした。掘り込みの深さについては、前述のとおりである。

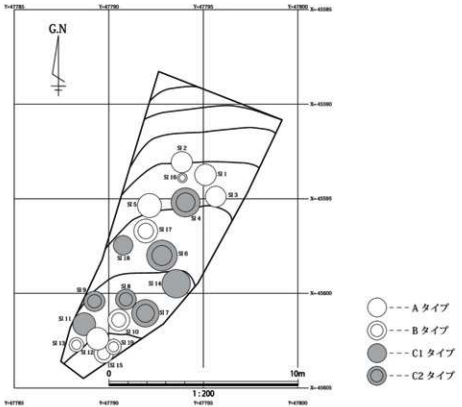
以上の定義により、19 基の遺構を計測すると集石遺構の大きさは最大長 1.93 ～ 0.43（平均 1.2）m、最大幅 1.5 ～ 0.43（平均 1.02）m である。掘り込みの大きさは最大長 1.4 ～ 0.52（平均 0.96）m、最大幅 1.4 ～ 0.38（平均 0.83）m である。深さは 0.12 ～ 0.45（平均 0.27）m である。SI7 について、重量を計測したところ構成礫は 118kg、配石は 130kg であった。

第 1 表　坂ノ下遺跡集石遺構計測表

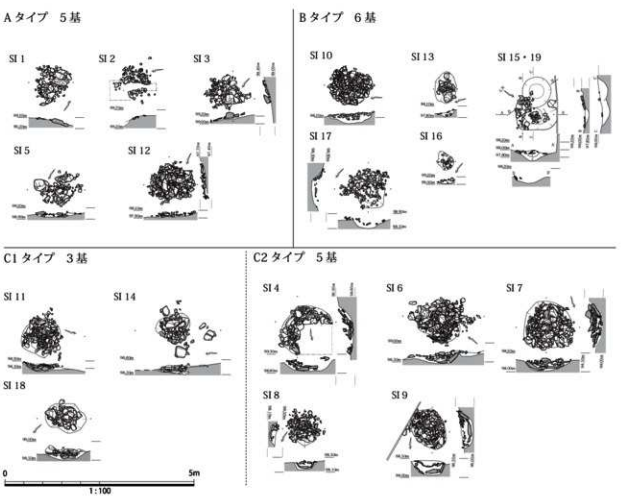
遺構 No.	礫の範囲 (m) 最大長×最大幅	掘り込み (m) 最大長×最大幅×深さ	掘り込み有無	掘り込み形状	配石	炭化物	タイプ	備考
1	1.07 × 0.97	—	—	—	—	—	A	構成礫は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、一部に溶結凝灰岩
2	1.25 × 1.1	—	—	—	—	—	A	構成礫は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、一部に溶結凝灰岩
3	1.25 × 0.95	—	—	—	—	—	A	構成礫は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、一部に溶結凝灰岩、中心部に大きめの礫
4	1.4 × 1.4	1.4 × 1.4 × 0.3	○	お椀	○	○	C2	配石は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩
5	1.29 × 0.96	—	—	—	—	—	A	構成礫は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、一部に溶結凝灰岩、花崗岩
6	1.93 × 1.28	1.1 × 1.1 × 0.3	○	お椀	—	—	C2	大きめの千枚岩を配石の一部に用いる、埋土中央部黒褐色
7	1.35 × 1.3	1.28 × 1.2 × 0.38	○	お椀	○	—	C2	構成礫 118kg、配石 130kg。配石は平らな千枚岩・千枚岩質の頁岩を花弁状に配置
8	1.06 × 0.89	0.65 × 0.6 × 0.3	○	お椀	○	○	C2	配石は千枚岩・千枚岩質の頁岩を掘り込みに沿って配置
9	1.0 × 0.9	1.13 × 0.85 × 0.45	○	お椀	○	○	C2	配石は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、外周部は縁に配置、埋土は黒褐色
10	1.25 × 1.05	0.6 × 0.6 × 0.32	○	皿	○	—	B	配石は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、埋土中央部は黒褐色
11	1.4 × 1.05	1.05 × 1.02 × 0.25	○	皿	○	—	C1	配石は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、比較的小さめのものを中央に配置
12	1.3 × 1.18	—	—	—	—	△（微少）	A	下部に大きめの千枚岩を用いる、15 号・19 号と切り合い関係にある
13	0.78 × 0.55	0.84 × 0.55 × 0.18	○	皿	—	—	B	構成礫は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、砂岩
14	1.5 × 1.5	0.93 × 0.75 × 0.23	○	皿	○	—	C1	配石は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩、扁平な板状の礫を用いる
15	0.93 × 0.93	1.1 × 0.85 × 0.24	○	皿	—	○	B	中央部に黒色土、焼石、境界部分に炭化物を含む。
16	0.43 × 0.43	0.52 × 0.38 × 0.12	○	皿	—	△（微少）	B	千枚岩、砂岩、溶結凝灰岩を用いる、中央部に黒色土
17	1.35 × 1.05	1.0 × 0.8 × 0.28	○	お椀	—	—	B	構成礫に千枚岩・千枚岩質の頁岩の扁平な板状の礫を用いる
18	0.97 × 0.83	1.08 × 0.78 × 0.25	○	皿	○	—	C1	配石は主に千枚岩・千枚岩質の頁岩
19	—	0.8 × 0.75 × 0.23	○	皿	—	—	B	15 号と切り合い関係にあり、15 号より新しい。


Y=47785
Y=47790
Y=47795
Y=47800
X=-45585
X=-45590
X=-45595
X=-45600
X=-45605
G.N
101.0 m
100.5 m
100.0 m
99.5 m
99.0 m
98.5 m
98.0 m
SI1
SI2
SI3
SI4
SI5
SI6
SI7
SI8
SI9
SI10
SI11
SI12
SI13
SI14
SI15
SI16
SI17
SI18
SI19
0
5m
1 : 100

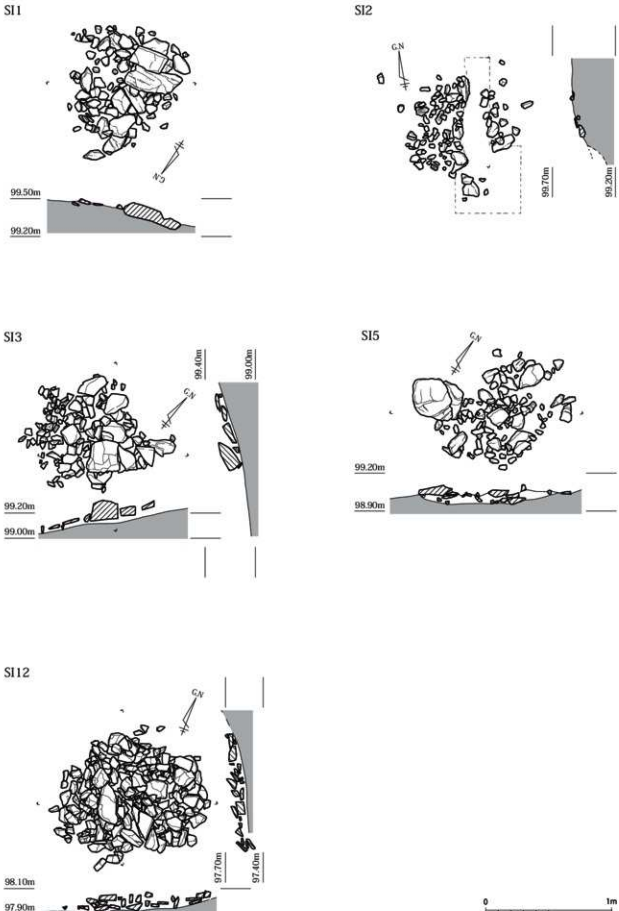
第７図　集石遺構分布図



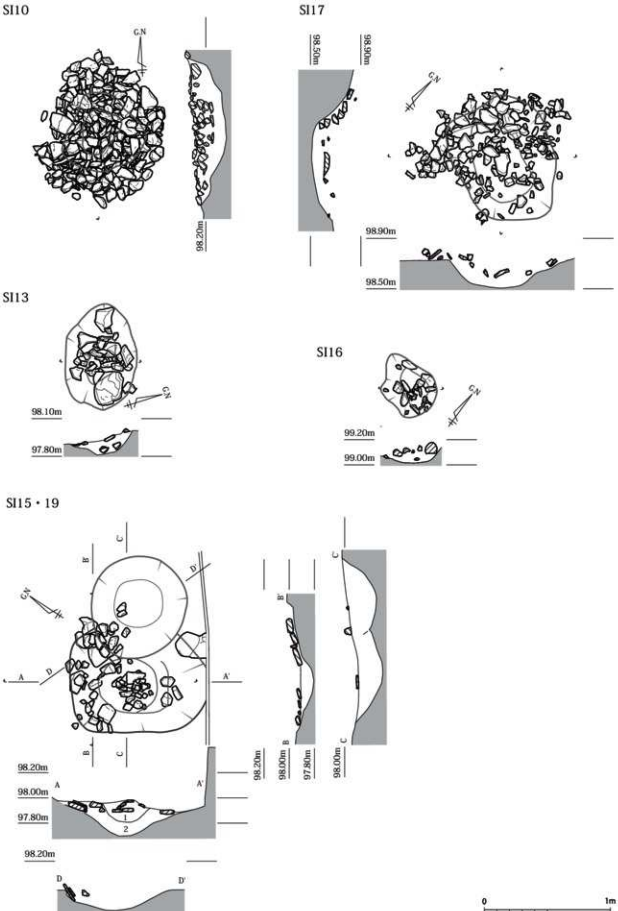
第８図　集石遺構タイプ別分布図



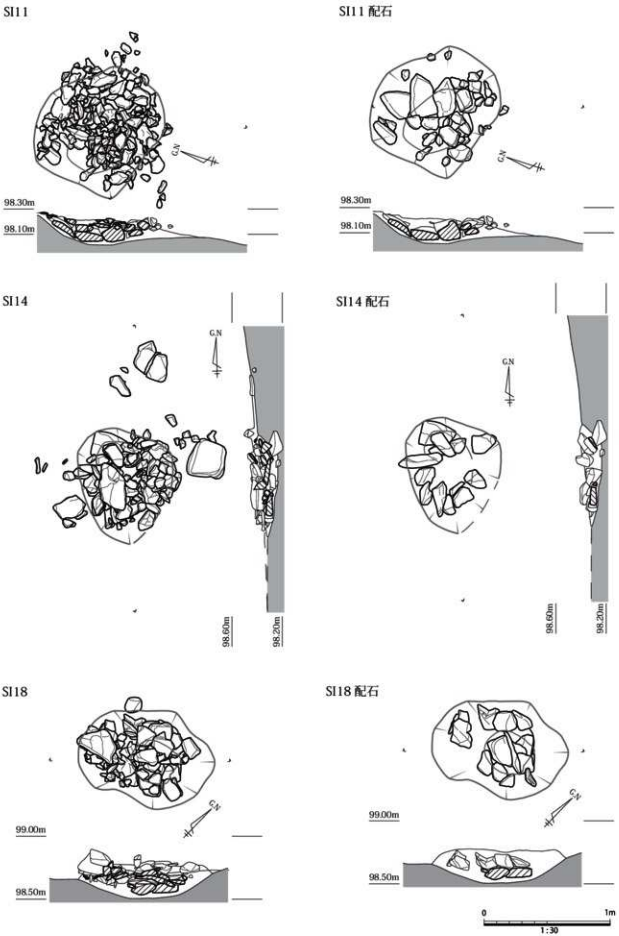
第９図　集石遺構タイプ別分類図



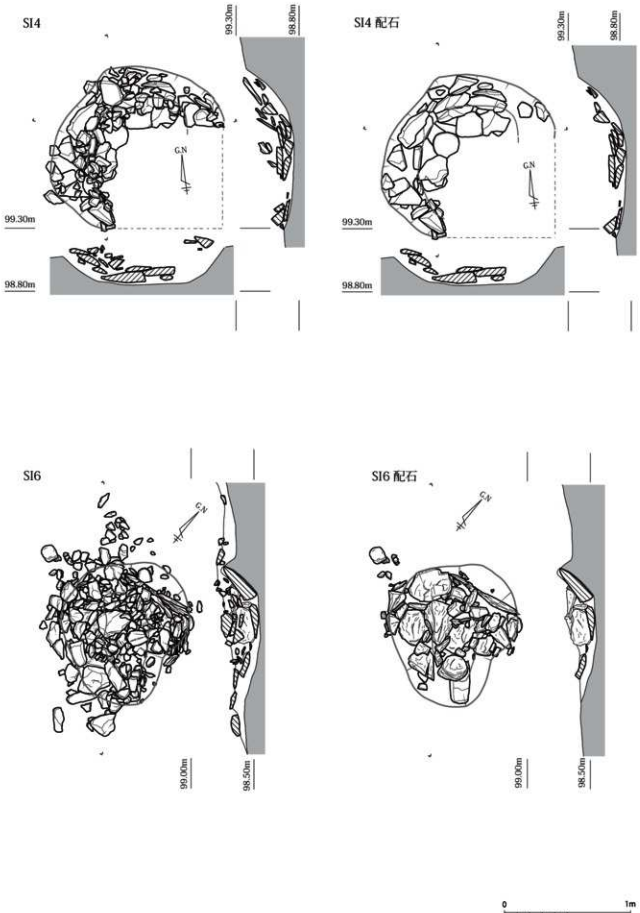
第 10 図　集石遺構 A タイプ実測図



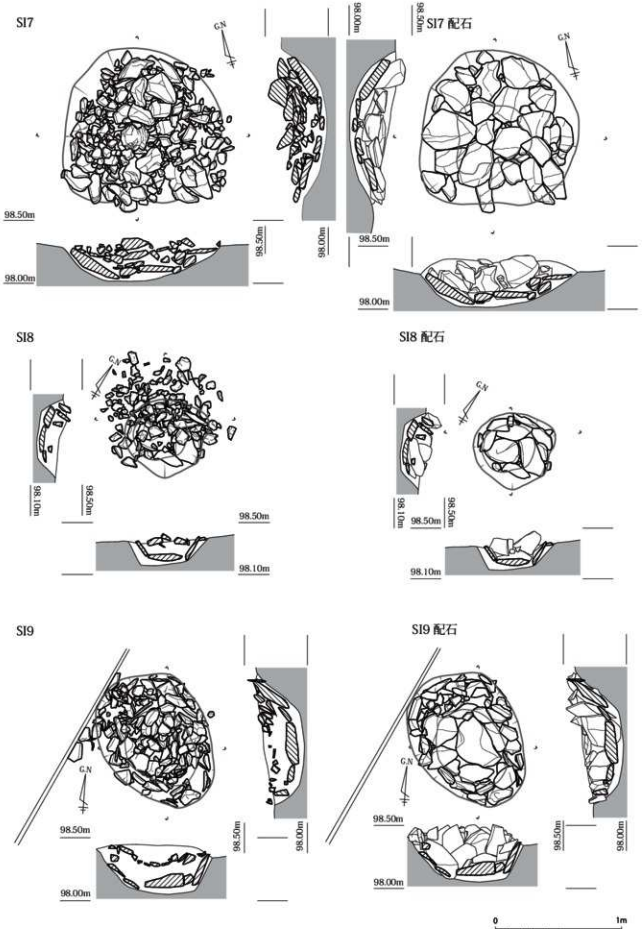
第 11 図　集石遺構 B タイプ実測図



第 12 図　集石遺構 C1 タイプ実測図



第 13 図　集石遺構 C2 タイプ実測図 1



第 14 図　集石遺構 C2 タイプ実測図 2

（2）遺物

本遺跡での遺物は縄文時代早期に位置付けられる。全てⅢａ層から出土した。特にB3Grから集中して出土している。土器については10点、石器については26点出土しており、そのうち14点について図化を行った。大きめのもの、加工痕、使用痕のあるものを抜き出して図化した。他地域との交易あるいは人々の移動について考察するのに役立つと考えて、黒曜石の剥片は図化できるものは図化した。また、図化していない出土遺物について一部を写真にて報告することとした。

土器

1は、深鉢型土器の口縁部である。やや風化はしているが、外面に横方向、斜方向の貝殻条痕文を施し、内面にはナデ調整を施している。色調は内面外面共に、にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。胎土の特徴は2.5㎜以下の黒色光沢粒を多く含み、2㎜以下の透明光沢粒、5㎜以下の灰色の粒、3㎜以下の白色の粒を少量含む。器形的な特徴や表面の調整から縄文時代早期の貝殻条痕文円筒形土器であると考えられる。

石器

2～4は打製石鏃である。石材は2点がチャート製、1点が姫島産黒曜石製である。3点とも抉りを持ち、2、4は脚部の一方が欠損している。2、4ともに二等辺三角形状である。3は基部の深い抉りが特徴である。押型文土器と同時期に出土するいわゆる鍬形鏃である。

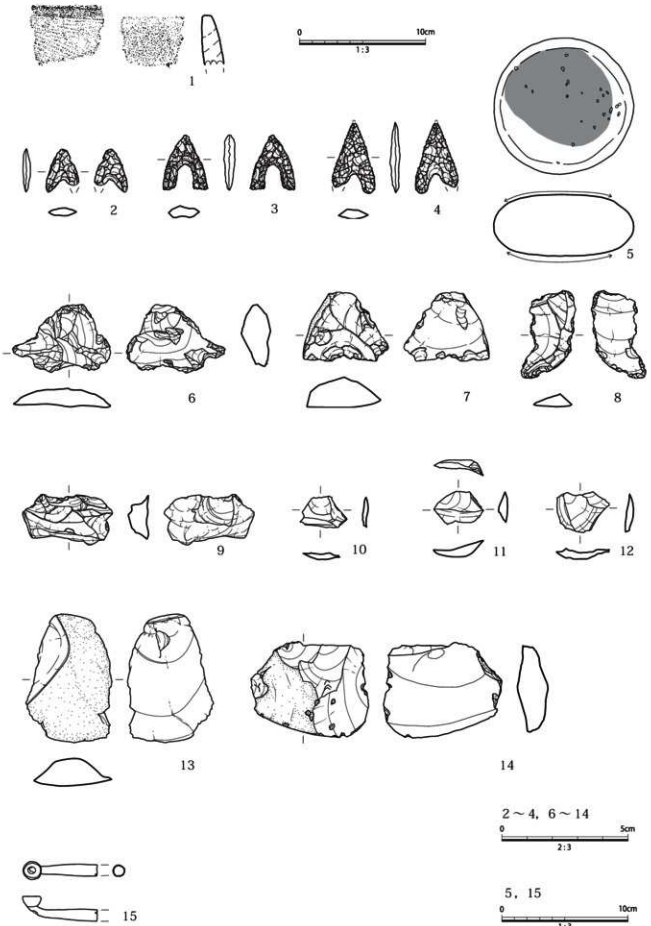
5は扁平な円形の磨石である。表面に摩耗面がある。

6～9は二次加工剥片である。6～9の石材は全てチャートである。端部に粗い二次加工が入る。

10～14は剥片で、10～12の石材は姫島産黒曜石である。10～12は、近接した場所から出土している。13～14は流紋岩である。

第2表　坂ノ下遺跡遺物計測表

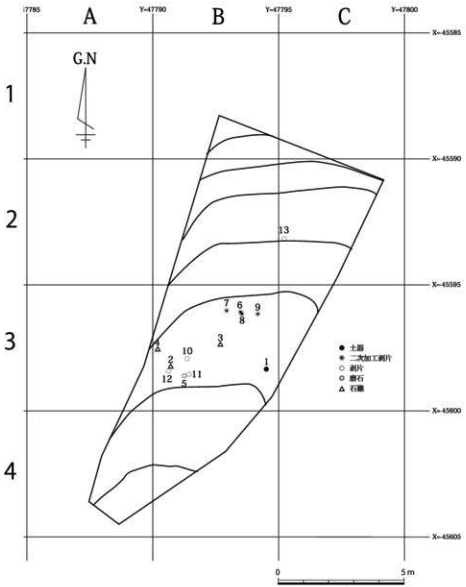
遺物番号	器　種	石　材	出土地点 遺構・Gr	層　位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ cm）	重さ（g）
2	石鏃	姫島産黒曜石	B3	Ⅲ a	1.7	1.3	0.3	0.4
3	石鏃	チャート	B3	Ⅲ a	2.18	1.78	0.45	1.2
4	石鏃	チャート	B3	Ⅲ a	2.75	1.7	0.4	1.1
5	磨石	花崗斑岩	B3	Ⅲ a	10.8	11.1	4.9	870.7
6	二次加工剥片	チャート	B3	Ⅲ a	2.7	3.9	1.15	7.8
7	二次加工剥片	チャート	B3	Ⅲ a	2.7	3.4	1.1	11.3
8	二次加工剥片	チャート	B3	Ⅲ a	3.45	2.15	0.5	3.4
9	剥片	チャート	B3	Ⅲ a	2.0	3.55	0.8	6.3
10	剥片	姫島産黒曜石	B3	Ⅲ a	1.85	1.25	0.2	0.4
11	剥片	姫島産黒曜石	B3	Ⅲ a	1.3	2.0	0.5	0.7
12	剥片	姫島産黒曜石	B3	Ⅲ a	1.65	2.05	0.3	1.0
13	剥片	流紋岩	C2	Ⅲ a	5.11	3.4	1.1	18.5
14	剥片	流紋岩	トレンチ	―	4.7	3.8	1.2	22.1



第 15 図　縄文時代早期、その他の時代の遺物実測図

第５節　その他の時代の遺構と遺物

本調査では前節の遺構以外は検出されていない。遺物については、壁面より雁首部のみであるが、江戸時代の煙管が出土している。首部は湾曲が弱く、火皿の口径は小さい。この煙管は、形態の変遷から考察すると、雁首部の形状から西暦 1750 ～ 1800 年頃に製造されたものであると考えられる。また、実測は行っていないが、瓦片や陶磁器片等も出土している。



第 16 図　　遺物分布図

第6節　まとめ

坂ノ下遺跡では、縄文時代早期のものと考え得る石器や土器片が出土し、実調査面積 86㎡に 19 基の集石遺構を検出した。壁面から、江戸時代のものと思われる煙管も出土しているが、その他の時代の遺構・遺物については確認できなかった。ここでは、本遺跡で営まれたであろう縄文時代早期の生活について考察し、本章のまとめとしたい。

散礫

集石遺構検出前に確認された散礫についてである。散礫と同じレベルから、遺物の出土はなく、その上面を生活面としては考えにくい。この礫は、近接または下層中に含まれる集石遺構の廃棄礫や準備礫であると考えられる。

集石遺構

調査区近隣の笠下遺跡では 164 基、矢野原遺跡では 15 基、南久保山小堀町遺跡では 6 基、早日渡遺跡では 5 基、上崎地区遺跡では 13 基の集石遺構が検出されている。また、北方延岡道路の路線上の赤木遺跡第 8 地点（一次調査）では 58 基、山田遺跡では 44 基の集石遺構が検出されている。これらは、どれも縄文時代早期の遺溝であり、配石と掘り込みがあるものが多数見られ、花弁状に配置した配石も確認されており、本遺跡との関連もうかがえる。当該期の同じ文化圏であったことも想像される。本遺跡とは若干離れており（直線距離 28km）、沿岸部に位置するなど立地条件は異なるが、延岡市北浦町の森ノ上遺跡では 168 基の縄文時代早期の集石遺構が検出されている。検出された集石遺構全基に掘り込みと配石があり、花弁状に配置した千枚岩の配石を持つものが中心となるなど形態上、本遺跡との共通点も見出せる。

本遺跡で検出された集石遺溝の位置関係や検出状況などから、次の 2 点が考えられる。

1　比較的、大きめの礫が用いられており、掘り込みと配石を共に持たない SI12 は、礫を予め集積して準備されたような状態を示すいわゆる準備礫の可能性がある。

2　SI7 と近接する SI10 は掘り込みは持つものの配石を持たず、構成礫が SI7 に比べて小さい角礫が多く、使用された礫を集積した廃棄礫の可能性がある。

集石遺構から検出された炭化物の放射線炭素年代測定を行ったところ、SI4 の炭化物では 9185 ± 30 年 BP（2 σの暦年代で BC8540 ～ BC8510、BC8480 ～ BC8290）、SI8 の炭化物では 8995 ± 30 年 BP（2 σの暦年代で BC8290 ～ BC8200、BC8040 ～ BC8010）、SI9 の炭化物では 9070 ± 30 年 BP（2 σの暦年代で BC8305 ～ BC8245）、SI15 の炭化物では 9335 ± 30 年 BP（2 σの暦年代で BC8710 ～ BC8530、BC8510 ～ BC8480）の年代値が得られた。SI4、SI8、SI15 の 3 点が複数の暦年代が示されているのは、該当時期の較正曲線が不安定なためである。 4 基から検出された炭化物の年代差（最新～最古）は 700 年であり、これらの遺構は比較的近接した時期に利用されたと考えられる。19 基の集石遺溝を縄文時代早期の 2000 年という長期間において何基が同時期の所産のものであるのか判断するにあたり、集石遺構を構成する礫間の接合作業を実施していないために、判断する材料が十分とは言えない状況であったことも申し添えておきたい。

検出された集石遺構の形態上の分類から、高密度（4.5㎡に 1 基）で多数の集石遺構を検出した本遺跡が、どのような性格をもった遺跡なのか以下を参考に考えてみることにする。

八木澤は南九州の縄文時代草創期から縄文早期における集石遺構の構造の違いについて、住居跡の有無も考慮した場合、次の様な４つのタイプに分類されるとしている。

タイプ１　住居跡に伴って集石遺構が検出されている場合

タイプ２　住居跡は検出されておらず、集石３類（密集型で、掘り込みは有るが、配石は無い形態）・集石４類（密集型で、掘り込みと配石とが共に有る形態）を含む集石遺構群が微高地を広場状の空間として、それを取り囲む形で検出されている場合

タイプ３　住居跡は検出されておらず、集石遺構群にタイプ２のような空間構成は見られないが、施設構造の発達した集石３類や集石４類が検出されている場合

タイプ４　住居跡が検出されず、施設構造の簡便な集石１類（分散型で、掘り込みと配石とが共に無い形態）や集石２類（密集型で、掘り込みと配石とが共に無い形態）だけしか検出されていない場合

これら４つのタイプの類型の背景にはセトルメントの差があるとし、タイプ１は集落の居住地区、タイプ２は居住地区を取り囲む調理地区、タイプ３は居住地区から独立した場所にある恒常的な調理地区であり、定住生活を前提とする拠点的集落や恒常的な調理地区と位置付けられるとしている。タイプ４は季節的利用といった一過性の性格の強いキャンプ地的な位置付けが可能であるとしている。（八木澤 1994）この分類に従えば、当遺跡の集石遺構の大部分は施設構造の発達したものであり（掘り込みと配石を共に持つものが８基、掘り込みだけを持つものが６基・・・全体の 74％）、当遺跡は上記の分類によるとタイプ３にあたると言える。出土遺物が検出された遺溝に比べ極端に少ないことも当地が生活の中心地ではなかったことを示す裏付けとなるものであると考えられる。

当遺跡では、施設構造の発達した集石遺溝が中心となるものの、簡便な構造の集石遺構（前述の準備礫・廃棄礫の可能性のあるものを除いて）も検出されている。本調査では、この形態上の相違は時期差によるものなのか使用方法によるものであるのか集団の差によるものであるのか、何に起因するものか明らかにすることはできなかった。

本遺跡において同時期にどの程度の人数で生活が営まれたのか考えてみると、出土遺物の少なさから多人数の人が同時期にこの場所で生活していたとは考えづらい。本遺跡が、恒久的な調理施設であると仮定すると、遺跡の近隣にいくつかの集団が居住して共同で集石遺構を利用し、必要があれば集まり共同作業を行うといった生活を営んでいた可能性も考えられる。そのようにすることによって乱獲などを防ぎ、自然の資源を有効に利用していたことも想像される。遺構の周辺から少量出土した土器や石鏃などの生活用具、施設構造の発達した集石遺構を構築するための労力を考えると本調査区は当時の人々にとって集石遺構を設置し、営むのに適切な土地であったととらえることができる。

次に、当時の人々が集石遺構をどのように使用していたのか考えてみたい。火を用いて食物を調理する方法には、直火で焼く、土器を用いて煮るなど当時の人々にとっても様々な方法があったと思われる。集石遺構を用いた調理は先達の研究からも考察されている通り、蒸し焼きに使われたものであろう。上述の調理法は、それぞれが異なる加熱調理機能をもっており、相互補完的に使用されたとみなすことができる。必要があればこそ、直火や土器を用いた調理と異なった調理法が存在したのだと考えられる。当遺跡では、石鏃が出土していることから、狩猟を行いながら、動物類を食糧としていたことがうかがえる。また、植物を加工するのに使用したと思われる磨石も出土している。動物と植物をどの程度の割

合で調理していたのかは分からないが、これらの材料を組み合わせて集石遺構を適宜使用していたと考えられる。

石材

最後に、遺跡内で出土した石器や集石遺構で用いられた石材について考えてみたい。本遺跡で使用された主な石材は、チャート、姫島産黒曜石、溶結凝灰岩、千枚岩、千枚岩質の頁岩等である。

姫島産黒曜石製の石器（石鏃）が出土していることから、現在の大分方面の人々と何らかの交流交易があったことがうかがえる。姫島産黒曜石製の石鏃の他、同素材の剥片やチップも近辺で出土していることから遺跡内で剥片剥離が行われ、石器等を加工していたと推察される。

遺跡の所在する場所の火砕流堆積物を除いた基盤には、主に剪断泥質岩からなる四万十累層群日向層群神門層が分布し、地質図上ではすぐ北に四万十累層群諸塚層群蒲江亜層群槇峰層が近接しており、集石遺構に多く使用されている千枚岩～千枚岩質頁岩に加え、阿蘇溶結凝灰岩の調達には事欠かなかったことが想像しうる。青山は、五ヶ瀬川の中流、川水流地区で、川原石の測定を行っている。その結果、砂岩が最も多く全体の４分の１、緑色玄武岩質火山岩と千枚岩を入れて全体の２分の１、チャート、珪質岩、花崗斑岩、阿蘇溶結凝灰岩までで全体の４分の３、あとは花崗岩、礫岩、頁岩、石灰岩、ホルンフェルス、縞状流紋岩、無斑晶流紋岩、大理石、結晶質石灰岩、珪岩が見られるとのことである。（青山 2010）当地で採取できない石材などは、五ヶ瀬川まで取りに行った可能性がある。そのようにして、必要な石材を確保し、生活を営んでいたのであろう。

本調査区からは住居跡は検出されていない。遺構の数に比べて遺物の数が非常に少ないことから、居住地は別の場所にあったと考えられる。前述の通り、本遺跡が恒常的に用いられた調理施設であるとするならば、本遺跡の使用場面は主に調理時のみであり、調査区の近隣に居住施設があったと想像される。煙管や瓦片や陶磁器片なども出土しており、居住を示す痕跡は検出されていないが、江戸時代から現在にかけてもこの地において何らかの生活が営まれていた可能性を示唆するものである。

森林資源は、食糧資源になるとともにエネルギー資源にもなり、動物類が生息する環境を作るものでもある。また、様々な資材としても利用可能である。当時の人々の生活にとって、この地は、狭隘ではあるが、豊かな森林資源と水資源、鉱物資源が豊富であるという立地条件が何にも代え難い好条件であったといえよう。

時間的な制約もあり、調査成果を十分深化できなかった面も多い。しかし、延岡市北方町における縄文時代早期の人々の暮らしを集石遺構を切り口にして考察することができたのは、一つの成果である。現在、当遺跡の近隣の南東方向に所在する駄小屋遺跡の調査中である。この地域における集石遺構と居住地の関係について今後の調査結果を待ち、その解明に期待したい。

【参考文献・引用文献】

北方町教育委員会 1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第 1 集』

北方町教育委員会 2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第 23 集』

北方町役場 1997「北方町史第二巻」

延岡市教育委員会 2008「上崎地区遺跡」『延岡市文化財報告書第 36 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 146 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「赤木遺跡第 8 地点（第一次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 182 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「野地久保畠遺跡森ノ上遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 196 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「南久保山小堀町遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 206 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「十郎ヶ尾遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 218 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 1995「打扇遺跡、早日渡遺跡、矢野原遺跡、蔵田遺跡」『一般国道 218 号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財センター発掘調査報告書』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012「稲荷迫遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）』

宮崎県 1989「宮崎県史」資料編　考古 1

石川恒太郎　1968「宮崎県の考古学」吉川弘文館

坂上康俊、長津宗重、福島金治、大賀郁夫、西川誠　1999「宮崎県の歴史」山川出版社

青山尚友　2010「ここまでわかった宮崎の大地」鉱脈社

新東晃一　2006「南九州に栄えた縄文文化　上野原遺跡」新泉社

今村啓爾　2002「縄文の豊かさと限界」山川出版

八木澤一郎　1994「南九州の集石遺構」南九州縄文通信 No.8 南九州縄文研究会

八木澤一郎　2003「鹿児島県上野原遺跡第 10 地点の集石遺構」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会・宮崎考古学会

八木澤一郎　2007「集石遺構とその機能―九州島の現況から―」『縄文時代の考古学 5　なりわい―食料生産の技術―』同成社

江戸遺跡研究会『編』2001「図説江戸考古学研究辞典」柏書房

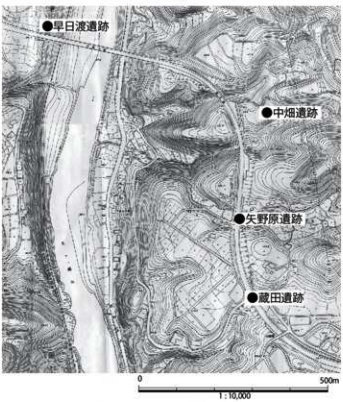
第Ⅳ章　中畑遺跡の調査

第１節　発掘調査の概要

調査地の周辺には、一般国道 218 号椎畑バイパス建設に伴って発掘調査された早日渡遺跡、矢野原遺跡、蔵田遺跡などがあり、それらの遺跡は旧石器時代、縄文時代早期の遺跡として知られている。調査地の現状は、尾根状の斜面地には栗が栽培されており、それに続く下部の平坦部は数年前まで水田であったが、現在は草が生い茂る更地になっている。2009（平成 21）と翌 2010（平成 22）年の確認調査において、水田の基盤層の下に灰白色土層が露出することから大規模な削平を行ったと考えられたが、埋没谷が存在し、谷底付近に縄文土器が多数含まれる堆積が確認された。その埋没谷の広がりが予想される Tr １・３・４・６・７付近を本調査の対象とし、これら確認調査坑を包括するようにして、Ａ区（1000㎡）を設定した。一方、北側の栗林での確認調査では、本来の土層が比較的良好に残存しており、Tr ９・10 から多数の石器・土器が出土した。これにより、尾根上の平坦部を含めた斜面地をＢ１区（1200㎡）、さらに農道を挟んだ三角地をＢ２区（300㎡）として設定し、調査することにした。

発掘調査は、平成 2011（平成 23）年５月 25 日より、Ａ区から開始した。近現代の造成土を谷筋に沿って最も深いところで約 1.25 m、浅いところで約 0.25 m、重機によって掘り下げた。また、委託により調査の基準となる座標および 10 m間隔のグリッドを設定した。地区名については、東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付して図 18 のように組み合わせて示した。以後は、人力によって遺物包含層の掘削を進めていった。旧水田基盤のⅤ層から遺物が少量出土するようになったが、これは水田を開いた際の攪乱によるものだと考えられる。Ⅸ層に一部アカホヤ火山灰のブロックが見られたものの平面的な堆積はなかった。遺物は、Ⅷ層（褐色土）から縄文時代晩期の土器を中心に出土した。特に、谷の底部にあたるところでは、谷底にライン状に遺物が出土し、上部からの流れ込みが想定された。そして、地山であるＸ層直上を最後の掘削面とし、８月９日に空中写真撮影を行ってＡ区の調査を終了した。

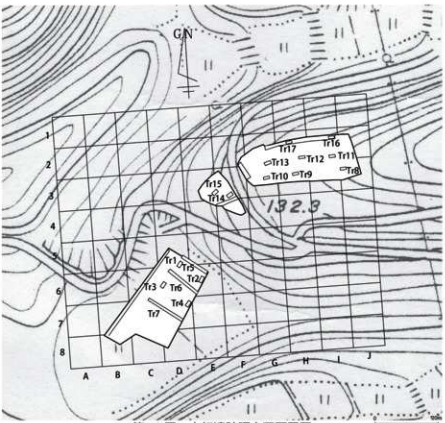
次に、８月 10 日より重機によってＢ１区の表土掘削を開始した。Ｂ１区は尾根上の丘陵の南東斜面にあたり、表土が 10㎝～ 20㎝と浅く、その下のⅡ層（褐色土）が遺物包含層になっていた。表土の除去が終わり、精査を始めたところ、Ⅱ層上面で集石遺構２基と配石炉１基を



第 17 図　周辺の遺跡位置図

検出した。

Ⅱ層からは、縄文時代晩期の遺物が出土したが、後期旧石器時代と思われるナイフ型石器や石刃、古代の土師器片なども混在して出土している。また、尾根の上部にあたる平坦部でⅡ層下面で方形の竪穴建物跡が1軒検出され、遺物等から古墳時代の住居跡と認定した。平面的な調査はⅡ層まで行い、地山と思われるⅢ層（灰褐色土）の下から阿蘇溶結凝灰岩が露出することを確認し、B１区の調査終了とした。10月12日より、B１区の調査と平行して、B２区の調査も開始した。B２区においては、ほぼ中央に直径15㎝程の排水パイプが表土から50㎝ほどのところに埋設してあり、その両側２ｍ位の部分はかなり攪乱されていた。しかし、その攪乱された層を重機で取り除くと、その下は、ほとんど影響を受けておらず、B１区のⅡ層に相当する暗褐色土のⅢａ層、アカホヤ火山灰の２次堆積層であるⅢｂ層を確認し、Ⅲａ層を中心に縄文時代晩期の遺物が出土した。また、B２区においても北西壁から阿蘇溶結凝灰岩が露出し始めたため、Ⅲｂ層を掘削して調査終了とした。そして、適宜に実測図化作業、写真撮影による記録作業を行い、11月８日には、B１区、B２区の空中写真撮影を実施し、11月14日に現地調査に係わる記録作業を終了し、すべての現地調査を完了した。



第18図　中畑遺跡調査区配置図

第２節　整理作業の概要

現地調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センター本館に持ち帰り、記録物の整理作業と出土品の一部洗浄作業を行った。本格的な整理作業については、2012（平成24）年５月１日より開始し、出土品の洗浄、注記、接合作業が終了した後、実測作業に入った。出土品については、219点を図化し、写真撮影を行った。そして、報告書刊行に係わる製図及び執筆編集作業、印刷・製本作業を行った。なお、2012（平成24）年８月19日には、遺跡発掘速報会「発掘調査最前線2012」において一般向けに成果報告会を行った。

第３節　基本層序

調査対象地のＡ区は、元来谷であったが、現地開き取りによると江戸時代に谷を埋めて水田を開いたという。その後、現代において、上部の斜面地を大規模に削平して谷を埋め、平坦面を造って水田にしたようである。そして、Ｂ１・Ｂ２区においては、近年、栗林として利用されていたが、それまでは原野としてあまり手が加えられていなかったようである。地層堆積状況の観察と記録は、Ａ区においては、谷の最深部である西壁で行い、Ⅰ～Ⅹ層に区分し、Ｂ１・Ｂ２区においては、比較的良好にアカホヤ火山灰の２次堆積が見られたＢ２区の北壁を基本層序としてⅠ層からⅣ層に区分した。

以下、各区毎に基本層序を述べる。

Ａ区

Ⅰ層は表土で現代の水田耕作土である。平均堆積厚は、約 20㎝である。水田に由来するマンガン成分の茶褐色の斑点が見られる。

Ⅱ層は黄褐色土の水田基盤層で、層厚は 6㎝～ 25㎝である。下面には、マンガン成分が沈殿し非常に硬くしまった黒褐色の床土がある。

Ⅲ層は谷を埋めた客土である。Ａ区上部の法面に明らかに切られた跡が見られるが、田を作る際にそこを削平し盛土したと思われる。最深部で 1.3 ｍある。

Ⅳ層は旧水田耕作土である。平均堆積厚は、約 15㎝である。Ⅰと同じ様相である。

Ⅴ層はⅡ層と同じく黄褐色土の旧水田基盤層で、やはり下面にはマンガン成分が沈殿し非常に硬くしまった黒褐色の床土がある。

Ⅵ層は厚さ 6㎝～ 25㎝の暗褐色土でやや粘性があり硬くしまっている。1㎜程のマンガン成分の斑点及びパミスを含んでいる。

Ⅶ層はⅥ層とほぼ同じ暗褐色土であるが、粘性が弱く、２～ 5㎜の炭化物を含んでいる。層厚は 5㎝～ 28㎝である。

Ⅷ層は褐色土で粘性のあるⅧａ層と粘性のないⅧｂ層に分層している。上部の斜面地からの流れ込みと考えられるが、縄文時代晩期の遺物を含んでいる。層厚はⅧａ層が 10 ～ 44㎝、Ⅷｂ層が 10 ～ 40㎝である。

Ⅸ層は黄褐色土でアカホヤ火山灰の２次堆積であるが、ごく一部にブロック状に見られる。

Ⅹ層は地山で１㎜以下の小石の粒を含むＸａ層と、1 ～ 5 ㎜の小石の粒を含むＸｂ層に分層している。

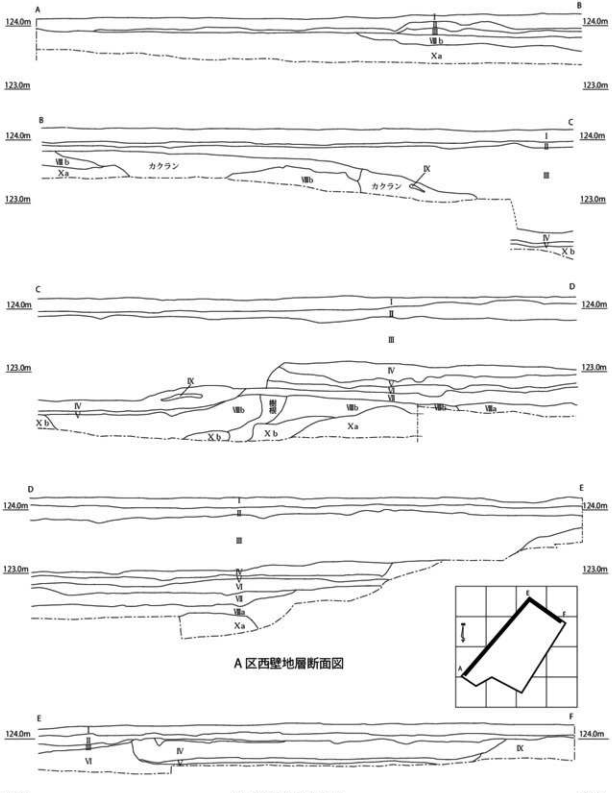
Ｂ区

Ⅰ層は現代の造成土で、平坦面を造るために盛られた客土で最大で 70㎝ほどある。

Ⅱ層は旧表土で、Ｂ１区ではⅠ層にあたる。暗褐色砂質土でしまり、粘性は弱い。５㎜ほどの炭化物を含んでいる。

Ⅲ層は暗褐色砂質土でややしまり、粘性は弱い。アカホヤ火山灰の２次堆積が所々に含まれるⅢａ層と全体的にアカホヤ火山灰の２次堆積が見られるⅢｂ層に分層している。

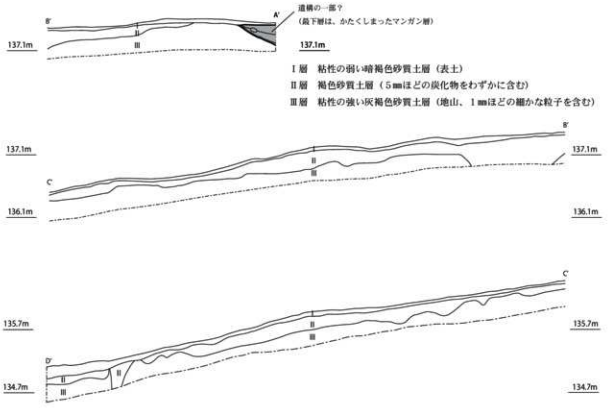
Ⅳ層は灰褐色の粘質土で、Ｂ１区ではⅢ層にあたる。Ⅳ層の下は阿蘇溶結凝灰岩が露出する。



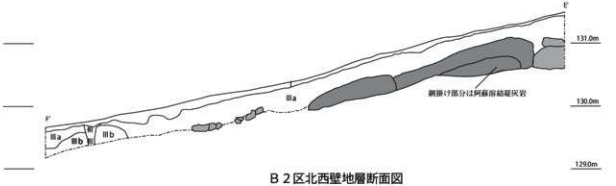
Ⅰ層　現代の水田耕作層（茶褐色の斑点状の土が混ざる、ややしまる）
Ⅱ層　現代の水田基盤層（下部に非常にかたくしまるマンガン層を含む）
Ⅲ層　谷埋土（部分的に暗褐色土を含む）
Ⅳ層　旧水田耕作層（Ⅰ層と同じ様相）
Ⅴ層　旧水田基盤層（Ⅱ層と同じ様相）
Ⅵ層　暗褐色土層（マンガン斑及びパミスを含む）
Ⅶ層　暗褐色土層（鉄化物及びパミスを含む）
Ⅶa層　粘性のある褐色土層（遺物包含層）
Ⅶb層　粘性の弱い褐色土層（遺物包含層）
Ⅸ層　黄褐色土層（アカホヤ火山灰２次堆積）
Ⅹa層　地山（にぶい黄褐色でかたくしまり、１mm以下の小石を含む）
Ⅹb層　地山（にぶい黄褐色でかたくしまり、５mm以下の小石を含む）

0　2m
1:60

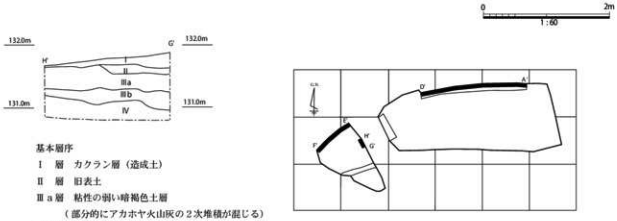
第19図　A区土層断面図



Ｂ１区北壁地層断面図



Ｂ２区北西壁地層断面図



基本層序

Ⅰ　層　カクラン層（造成土）

Ⅱ　層　旧表土

Ⅲａ層　粘性の弱い暗褐色土層

（部分的にアカホヤ火山灰の２次堆積が混じる）

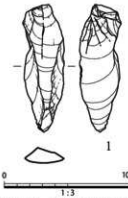
Ⅲｂ層　粘性の弱い橙色砂質土層

（アカホヤ火山灰の２次堆積層）

第 20 図　Ｂ区土層断面図

第４節　旧石器時代の遺物

Ｂ１区の遺物包含層である基本層Ⅱ層から石刃が１点出土した。Ⅱ層中は縄文時代晩期に属する土器が多く出土している層である。その中から旧石器時代と思われる流紋岩の剥片や掻器が数点出土している。しかし、上部からの流れ込みと考えられるため層位的に旧石器時代の遺物と判断することは困難である。ここでは形態的に旧石器時代の遺物であると判断された石刃とSC1より出土したナイフ型石器を旧石器時代の遺物として報告する。尚、ナイフ型石器は遺構内出土遺物として第５節の中で掲載している。



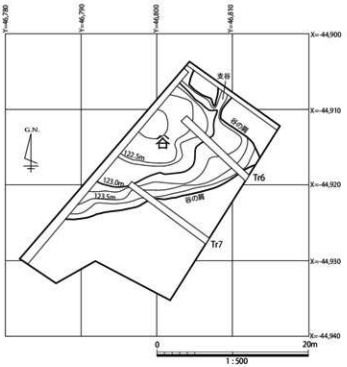
第 21 図　旧石器時代の石刃

第５節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構の分布（第 22、23 図）

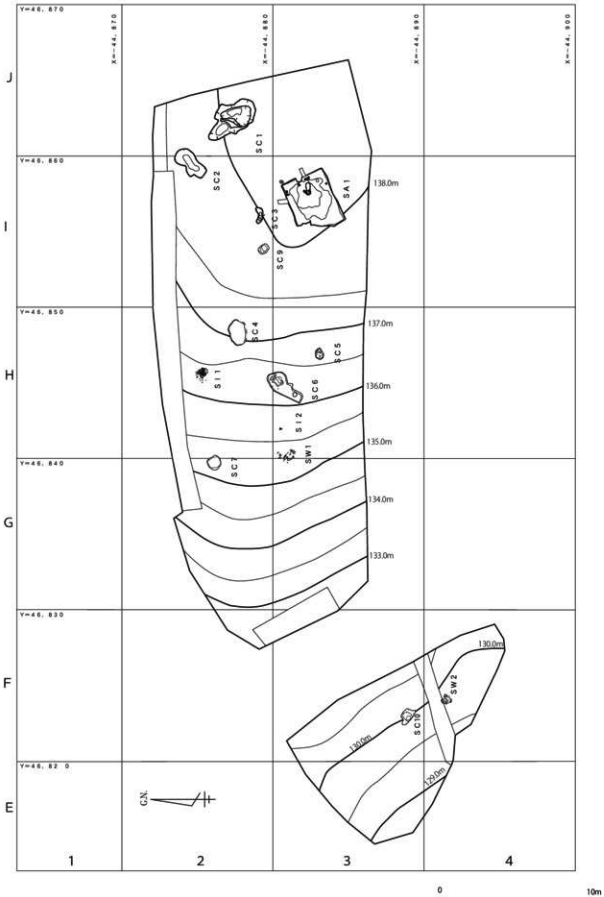
Ａ区において、遺物包含層である基本層Ⅶ層を除去し、Ｘ層（地山）上面で埋没谷を検出した。残念ながら遺構と明確に認定できるものは検出できなかった。旧水田層Ⅳ層において、直径約 25㎝のピット列を検出したが、当時の水田の柵列の跡ではないかと考えた。

Ｂ１区では縄文時代晩期の遺物を多く含む基本層Ⅱ層中で土坑８基を検出した。ここでは縄文時代晩期に属する遺物が数多く出土していることから縄文時代の遺構として報告する。土坑は調査区西側の平坦部で４基、傾斜部で４基検出した。その中で、平坦部で検出したSC1、SC2、SC3は他の土坑とは様相が違い、出土した遺物も多かった。また、調査区内部では多数の小穴を検出したが、この範囲の中では掘立柱建物など居住施設の復元には至らなかった。



第 22 図　Ａ区検出遺構

Ｂ２区は狭い農道を挟んでＢ１区から続く傾斜地であるが、Ｂ１区から一段落ちるような地形であったと考えられ、旧表土であるⅡ層の上層に最大で 80㎝の造成土が盛られていた。その造成土とⅡ層を除去した後、縄文時代晩期の遺物を含む基本層Ⅲａ層中で配石遺構１基と土坑１基を検出した。



第 23 図　B区の遺構分布図

2　検出遺構と出土遺物

（1）谷（第22図）

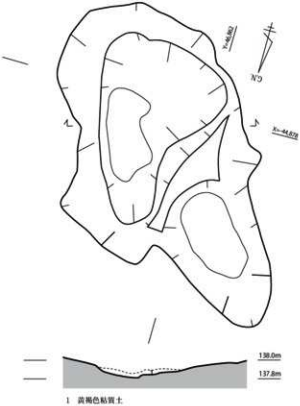
自然地形ではあるが、A区で検出した谷を遺構として報告する。谷の主軸は座標北より約30°西に振っている。谷底は北西に向かって深くなり、最も深いところが西壁で見ると、地表面から地山まで約２ｍの深さである。一方、谷の肩のラインが一番狭くなる東壁で約0.5ｍと最も浅くなる。谷の幅は両肩が検出された最も広い部分で約25ｍ、北西に向かって幅を増し、逆に南東に向かって狭くなっている。谷の最下部には、約20cmの厚さで縄文時代晩期の遺物を含む褐色土のⅧａ層が堆積していた。また、粘性があるⅧｂ層も地形に沿って堆積しており、上部の傾斜地から流れ込んでいると思われる。谷の最深部の主軸の東側で遺物がライン状に出土し、このラインに沿う小さな支谷も検出した。Ⅷ層が谷を埋め、その上層の暗褐色土であるⅥ層、Ⅶ層がやはり上部の傾斜地から流れ込んで谷を埋めたところで谷の内部の３分の１程度が埋まり平坦面ができ、そこを利用して近世において水田を開いたと思われる。また、谷内部には段が見られるが、棚田のように使っていたのではないかと考えられる。

（2）土坑

SC1、SC2、SC3は、Ｂ１区上部西側にあたる平坦部より検出した土坑である。平坦部のⅡ層掘削中に硬く酸化したマンガン質黒色土が所々で見られた。そのマンガン質土が円形を成す部分があり、その中から遺物が出土する状況が見られた。その時点で遺構の可能性を考慮して掘削を進めた。遺物を取り上げて完掘したところ、マンガン質土が遺構の外形を形成し、その内部は黄褐色粘質土が張り付いている状況が見られた。おそらく、水の影響を受ける状況にあり土中のマンガン成分が沈殿し、硬化したものと考えられる。これら遺構の成立過程や用途も不明ではあるが、ここでは、遺構中から晩期の縄文土器が多く出土していることから、縄文時代の土坑として報告する。SC1、SC2、SC3いずれも同じような検出状況であり、以下、それぞれの土坑の検出状況、遺物の出土状況について報告する。

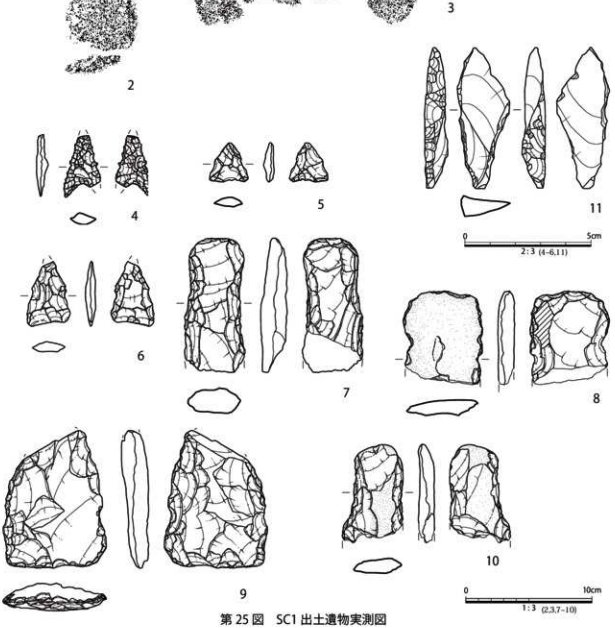
SC1（第24、25図：２～11）

調査区上部西側の平坦部で検出された土坑である。黒色の硬化したマンガン質土が土坑の外形を形成している。現状の規模は、長軸1.9ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は基本層Ⅱ層の褐色土の単層であった。Ⅱ層除去後の内部は、黄褐色粘質土が張り付いて堆積していた。土坑内には、やや落ち込んだ２つの窪みがあり、そこから集中して遺物が出土した。遺物は晩期の土器片がまとまって出土した他、打製石斧、石鏃、敲石、チャートや姫島産黒曜石、流紋岩などの剥片類が出土した。ここでは縄文土器２点、石鏃３点、打製石斧４点、ナイフ型石器１点を図化した。2、3は縄文時代晩期に属すると思われる縄文土器である。2は粗製の深鉢の底部である。平底で筒状の裾を



第24図　SC1実測図

呈するものである。3は粗製の浅鉢の胴部で風化が激しいため調整は不明である。4、5、6は打製石鏃である。4はチャート製で凹基尖脚の石鏃で、側面に鋸歯状の調整が見られる。5は安山岩製で平面形が正三角形を呈し、僅かな抉りが見られる。6は安山岩製で中央付近の側縁にわずかに角をもつ五角形に近い平面形を呈し、基部は僅かに抉れている。7、8、9は砂岩製の打製石斧である。7、8は体部上半の両側縁に抉りを有している。9は体部平面形の両側縁がほぼ直線で刃部に向かって広がる台形の平面形を有する。10は緑色片岩製の打製石斧で刃部が欠損している。上半は細く若干抉りが見られ、刃部に向かって広がるものと推定される。11はホルンフェルス製の旧石器時代のナイフ型石器で、両側縁にプランティング加工が施されている。



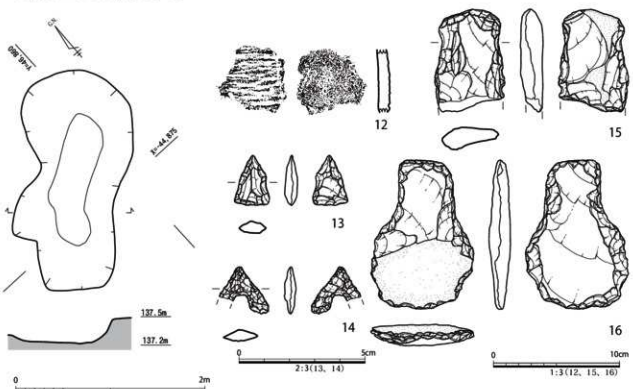
第25図　SC1出土遺物実測図

SC2（第 26 図：12 ～ 16）

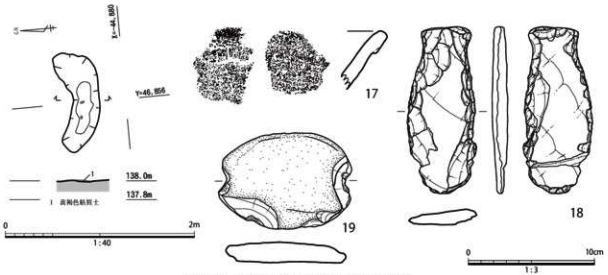
調査区上部西側の平坦部で検出された土坑である。調査中、この遺構内で 3 ヶ所ほど集中して遺物が出土する場所が見られ、別々の遺構の可能性を視野に入れて調査したが、検出後の黒色のマンガン質土の形状を鑑みて 1 つの土坑として認定した。埋土は基本土層Ⅱ層の褐色土であり、中央最深部の底面には SC1 と同様に黄褐色粘質土が約 3cmほど張り付いて堆積していた。長軸 2.3 m、短軸 1.0 m、最深部 0.25 mを測る。遺物は、縄文時代晩期に属する土器片、石鏃、石斧等がある。土器は、風化がはげしいものがほとんどで 1 点のみ図化した。石器は、石鏃、打製石斧それぞれ 2 点図化した。12 は深鉢の胴部である。外面に貝殻条痕を施す。13 は安山岩製で平面形が二等辺三角形を呈す平基の石鏃で、14 はチャート製で出土した石鏃の中で 1 点のみになるが、形態的に鑑みて縄文時代早期のいわゆる鍬形鏃である。15、16 は砂岩製の打製石斧である。15 は基部に僅かな抉りを有する。16 は体部上半と下半の幅が異なり、抉りでなく肩を有し下半が円形を呈する。

SC3（第 27 図：17 ～ 19）

調査区上部平坦部ほぼ中央で検出した土坑である。調査中、遺物が集中して出土し、黒いマンガン質土が土坑の外形を成したことから土坑として認定した。埋土のⅡ層を掘削すると、土坑内全体に黄褐色粘質土が張り付いていた。人工的に粘土を貼り付けたとも考えられるが、土坑の形状や検出状況から水たまりのような窪地だったのではないだろうか。長軸 1.0 m、短軸 0.3 m、深さは周りの高さと 10cm落ちる程度である。縄文土器、打製石斧、石錘などが出土している。17 は粗製深鉢形土器の口縁部である。突帯が口縁端部から 1 cm程下に付き、細い線状の刻み目を有する。18 は砂岩製の打製石斧で基部に僅かな抉りを有し刃部は円形である。19 は千枚岩製の打ち欠き石錘である。長軸が 10cmを超え、出土した石錘の中では最大である。



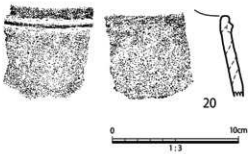
第 26 図　SC2 実測図及び出土遺物実測図



第 27 図　SC3 実測図及び出土遺物実測図

SC4 ～ SC10（第 28、29 図、第 3 表）

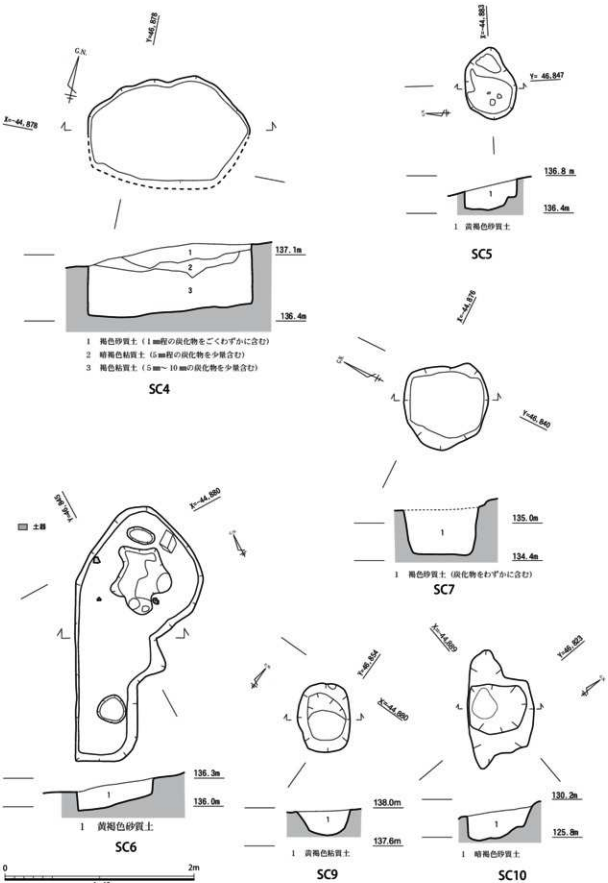
SC4 から SC9 は B 1 区で、SC10 は B 2 区で検出された土坑である。SC4 ～ SC9 は、遺物包含層である基本土層Ⅱ層掘削中に検出した。土坑から遺物が出土したのは、SC4、SC6、SC7 のみで、特筆すべきことがないので、ここでまとめて報告する。また、SC8 が抜けているが、調査時には土坑として記録していたが、樹根と判断したため欠番とした。B 1 区の SC4 ～ SC9 の各土坑において、埋土の違いや出土遺物の有無によって時期差を想定するのは考えにくい。ほとんどの遺物は、床面より浮いた状態で出土しており、いわゆる流れ込みと思われる。



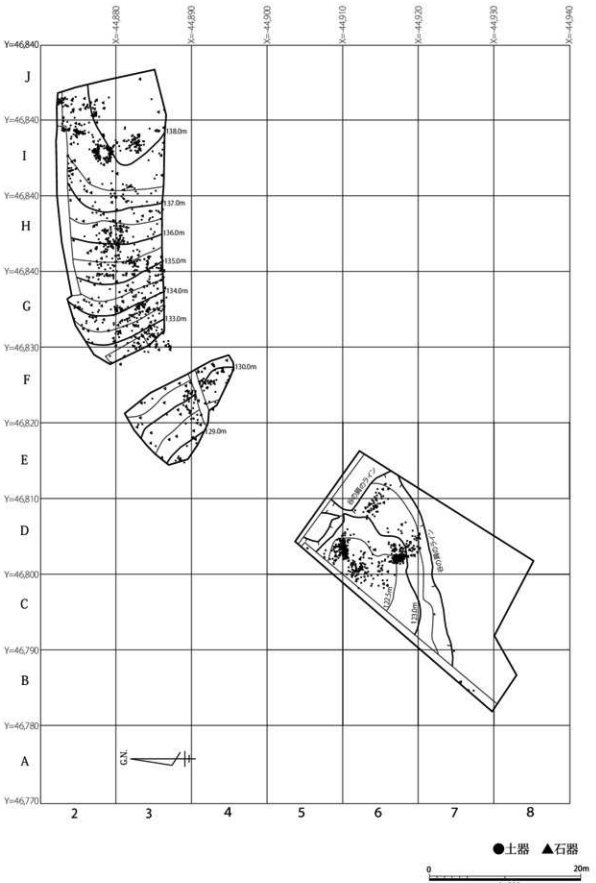
第 28 図　SC9 出土の縄文土器

SC4 は、確認調査坑によって、南側が半分ほど破壊されている。他の土坑と比べて深さが最も深くなっており、埋土の様相も違っている。埋土はⅢ層に分層することができ、上下の褐色土の間に暗褐色土が堆積しており、また、どの層にも 5 ㎜以下の炭化物が混じる。遺物は縄文晩期に属する土器片が多数出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。SC5、SC6、SC9 の埋土は、黄褐色砂質土であり、SC6 と SC9 からは僅かながら縄文土器が出土している。その中で SC9 から出土した突帯文土器の口縁部 1 点を図化した。20 は縄文時代晩期と思われる粗製深鉢形土器である。胴部から内傾気味に立ち上がり、波状を呈する口縁部直下に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデで断面三角形状の突帯を作りだしている。粘土帯は非常に薄い。

SC10 は B 2 区のほぼ中央から検出された土坑である。B 2 区の遺物包含層であるⅢa 層で検出された。埋土は暗褐色砂質土で , 平面プランは不定形で中央に窪みがあった。



第 29 図　縄文時代土坑実測図（SC4 ～ SC7、SC9、SC10）



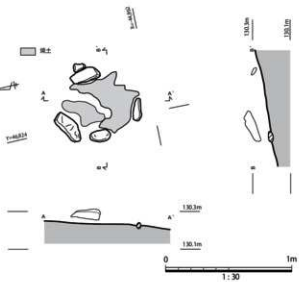
第 30 図　縄文時代出土遺物分布図

第３表　中畑遺跡土坑計測表

番号	検出地区・層	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面プラン	備考
SC4	Ｂ１区・Ⅱ層	1.71	1.05	0.68	楕円形	暗褐色埋土、縄文土器
SC5	Ｂ１区・Ⅱ層	0.75	0.55	0.26	不整円形	黄褐色埋土
SC6	Ｂ１区・Ⅱ層	2.6	0.85	0.21	不定形	黄褐色埋土、縄文土器
SC7	Ｂ１区・Ⅱ層	0.89	0.9	0.5	円形	褐色埋土
SC9	Ｂ１区・Ⅱ層	0.72	0.55	0.25	円形	黄褐色埋土、縄文土器
SC10	Ｂ２区・Ⅲ層	1.2	0.7	0.3	不定形	暗褐色埋土

SW2（第 31 図）

Ｂ２区のⅢａ層で配石遺構を検出した。Ｂ２区のⅢａ層は、縄文時代の晩期の遺物包含層であり、縄文時代の遺構として認定した。幅 15 ㎝～ 25㎝程度の千枚岩と阿蘇溶結凝灰岩の板石状の４つの礫をほぼ対角状に配する。長軸0.7 m、短軸 0.6 mを測る。４つの礫の内、東側の溶結凝灰岩は外側に開くように立っているが、その他の礫は直立ないし、やや内傾して立っている。また、配石の内部は被熱を受けて焼土が広がっていたが、炭化物はみられなかった。配石遺構は、一般的に炉などに関連した遺構として想定されているが、本遺跡の配石遺構も炉として機能していたと思われる。配石遺構内からは遺物は出土しなかった。



第 31 図　Ｂ２区配石遺構実測図

３　遺構に伴わない遺物

縄文時代の遺物は主としてＡ区では基本土層Ⅷ層の谷内部から、Ｂ１区では基本土層Ⅱ層から、Ｂ２区では基本土層Ⅲａ層からそれぞれ出土している。遺物の出土状況は、Ａ区は谷内部の D6 グリッドがほとんどで、Ｂ１区は調査区上部の遺構付近 I2、I3、J2 グリッドが密で、その下に続く傾斜部では散在している。Ｂ２区では F3 グリッドの SC10 の周辺、F4 グリッドの SW2 周辺に集中する傾向が見られる。Ｂ１区ではⅡ層掘削中に土坑８基を検出しているが、おそらくＢ１区の遺物包含層であるⅡ層は、上位のⅡａ層、下位のⅡｂ層に分層することができ、Ⅱｂ層上面が遺構構築面と思われる。また、遺物は、調査区の上部からⅡａ層、Ⅱｂ層に含まれながら流れ込んだものと思われ、他の時代の遺物も混在している。Ⅲ層上面やⅡ層中に拳大以上の大きな礫を含んでいないことや堆積状況などから、激しい土石流や地滑りというよりも、降雨等の浸食によって土壌とともに緩やかに流下してきたものと考えられる。接合状況は良好でなく、口縁部から胴部、底部まで接合したものはなかった。縄文土器のほとんどは晩期の粗製土器であり、わずかに精製土器がある。早期については楕円押型文と撚糸文もしくは縄文と思われる土器片が３点出土しただけなので、遺跡周辺での生活がほとんどなかったか、同時期に相当する土層が、早い時代に浸食消失していたと考えられる。石器については、形態的に鑑みて旧石器時代のも

のと認められるもの以外は、縄文時代の遺物としたが、一部他の時代のものを混在して記載している可能性もある。

出土遺物

以下、遺構に伴わない遺物についてA区、B１、B２区まとめて報告する。

（１）土器

早期土器

押型文土器（第32図：21）

21はB２区の基本層Ⅲｂ層で出土した縄文時代早期に属すると考えられる楕円押型文土器の胴部片である。外面に縦位の楕円押型文を施し、内面は風化が激しく調整は不明である。

撚糸文・縄文土器（図32：22、23）

22、23は、胴部片で２点とも内面はナデ、外面は縄文もしくは撚糸文が施されている。

晩期土器

縄文時代晩期に属すると考えられる土器について、粗製土器をⅠ類、精製土器をⅡ類として分類した。また、Ⅰ類の口縁部については、突帯文の形態によって①～④まで細分類した。

Ⅰ類　粗製土器

口縁部

①肥厚させた無文の口縁帯を有する突帯文土器

②口縁部に刻み目のない突帯を１条に貼り付ける突帯文土器

口縁部に刻み目のない突帯を１条貼り付ける粗製の突帯文土器である。突帯の付く位置による違いがみられ，ここでは以下のように再分類した。

a　口唇部直下に突帯が付くタイプ

b　口唇端部からやや下方に突帯を１条に貼り付けるタイプ

③口縁部に刻み目のある突帯を１条に貼り付ける刻目突帯文土器

④突帯のない口縁部

出土した全口縁部片をタイプ別に分類し、それぞれの割合を重量で比較したところ無刻目突帯文を貼り付けるⅠ②類が約６割を占めており、次いで肥厚口縁帯を有するタイプが約２割であった。Ⅰ④の無文の突帯のないタイプの数は、他のタイプの粗製土器と比べ器壁が薄くなる傾向がみられた。

Ⅰ①類（第32図：24～31）

24～31は肥厚させた無文の口縁帯を有する粗製の深鉢の口縁部である。口縁部端部に外面に厚みのある粘土帯を貼り付けて上下をナデで２㎝ほどの口縁帯を形成している。24、25、26は、口唇部を平坦に調整することで断面台形状に仕上げている。25は口縁帯部下に補修孔がみられる。27～31は口唇部を先細に仕上げることで、断面三角形を呈している。このタイプのほとんどが口縁帯がわずかに外反しながら外傾しているのに対して、28は口縁部がわずかに外反しながら内傾している。30は外面と内面を工具によって横方向のナデ調整が施されている。

Ⅰ②ａ類（第32、33図：32～40）

突帯文が付く口縁部の中で、特に口唇部直下に突帯が付くものを一括した。口縁部外面端部から

0.5 ～ 1.5㎝程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデで断面三角形の小さい突帯を作り出している。32 ～ 40 は外面もしくは内面に貝殻条痕の調整が施されている。32、33、34 は口縁部に粘土帯を貼り付け上下をナデで断面三角形の小さい突帯を作り出している。37 は口縁部が外反している。38 は口縁部が外反し、突帯下位に孔列文が施されている。39 は外面の突帯下位に V の字を呈す線刻が施されている。40 は器形から粗製の浅鉢である。

Ⅰ②b 類（第 33 図：41 ～ 54）

41 ～ 54 は口縁端部外面からやや下方に突帯が独立して付く粗製の深鉢である。突帯は、口縁端部より 2.5 ～ 3.5㎝の範囲内の下位に位置している。41 ～ 44 は口唇部が工具等で平坦に仕上げてある。41 は突帯上位に貫通しない孔列文が施されている。45 ～ 54 は口唇部を丸くもしくは先細りに仕上げてある。50 は外面に横方向の貝殻条痕の調整がみられ、突帯上位には補修孔が施されている。このタイプは口縁部が外反もしくは直口し外に開く形態をしているものが多い傾向がみられる。

Ⅰ③類（第 33 図：55）

口縁部に刻み目のある突帯を有するいわゆる刻目突帯文土器である。55 は口縁端部直下に断面カマボコ状を呈する突帯が付き、指頭と思われる刻み目が施されている。

Ⅰ④類（第 33、34 図：56 ～ 61）

突帯がなく無文の口縁部を一括した。56、57、59、60 は深鉢、58、61 は浅鉢である。56 は口縁部が外反し、口唇部を平坦に仕上げている。57、59 は口縁部が胴部から直口するもので、器壁が薄くなっており、口唇部は丸く仕上げている。58 は口縁部がわずかに内湾し胴部が丸みをもつと思われる。口唇部は先細りに仕上げ、外面にはススが付着している。61 は粗製の浅鉢である。胴部は内湾し、口縁部が直口する。口唇部は平坦な仕上げで、内外面には工具による横方向の調整が施されている。

胴部（第 34 図：62 ～ 68）

粗製の深鉢、浅鉢の胴部のうち器面調整が顕著なもので比較的大きい胴部片を図化した。器面調整は貝殻条痕あるいは条痕によるナデがほとんどである。62、63、66 は胴部中位から下半部に位置すると思われ、胴部が直線的または内湾気味に立ち上がっている。66 は胴部が張り、内外面ともに貝殻条痕による調整が顕著である。また、胴部最大径部分からわずかに窄んで上部につながっている。64 は器形は不明だが、南九州縄文時代晩期においてX字状突帯を有する資料と報告（黒川 2007）があり、その系統のものと捉えておきたい。67 は粗製の浅鉢の胴部でくの字状に屈曲する。

底部（第 34、35 図：69 ～ 75）

69 ～ 75 は粗製の深鉢の底部である。69、70 は平底で、71 ～ 74 は上底になっている。69、71、74 は筒状の裾を呈するもので、外傾する胴部が直接立ち上がる。70、72、73、75 は裾が張り出すものである。中でも 72 は張り出しの屈曲部に突帯文のようなものが一巡巡っており、類例をあまりみないものである。

Ⅱ類　精製土器

浅鉢（第35図：76～90）

浅鉢の口縁部を一括した。黒川式の範疇に入るものと考えている。76、77は頸部がくの字に屈曲し、口縁部がやや外反しながら外に開く。口唇部は先細りになっている。内外面ともに横方向の研磨調整が施される。78～81は扁球状の胴部、肩部をもち、短い頸部に玉縁状の口縁部が付くと考えられる口縁部の一群である。78は口縁部の内外面ともに沈線や段がなく玉縁状にならない。79、80、81は口縁部外面には沈線を引かず、内面にだけ引き、口縁端部を玉縁状に仕上げている。82～85はやや長くのびる頸部をもち、口縁部は玉縁状に肥厚させる一群である。口縁部外面に沈線を引くものと引かないものがある。82は口縁部外面に沈線を引き、口縁部内面は肥厚させて段を作り、玉縁状をなす。83は口縁部外面にあいまいな浅い沈線を引き、口縁部内面は浅い段をもつ。84は口縁部外面に段や沈線を引かず、鰭状突起を有する。85は口縁部外面に沈線を引き、内面に段を作り、玉縁状をなす。86は復元口径が25㎝を測る。長い口縁部をもち、口縁端部外面にはごく浅い段を、内面には段を作り、玉縁状をなす。87は浅鉢の胴部でくの字状に屈曲する。89は口縁部が頸部から内傾し外面に段を有し、玉縁状をなしている。90は、胴部片であるが、器形は不明である。

（2）　石器

石器は剥片を含め総出土数は356点で、剥片やチップ等を除いた石器は18種120点を数え、多種多様な製品が出土している。そのうち打製石斧が37点で最も多く、次に石鏃が35点を占める。石材は、砂岩、チャート、安山岩、流紋岩、ホルンフェルス、千枚岩、頁岩等が使われており、比較的身近にある石材を使用している。黒曜石は姫島産黒曜石、腰岳産黒曜石があり、交易があったことを示している。ここでは製品を中心に120点を掲載した。

石鏃（第36図：91～120）

石鏃はＢ１区、Ｂ２区の遺物包含層から欠損品や未製品なものを入れると35点出土した。そのうち形態的にみて縄文時代早期と考えられるSC2出土の鍬形鏃1点を除く34点を縄文時代後晩期の石鏃とし、さらに土坑出土の4点を除く30点を第35図に掲載した。全体的な傾向として、凹基が少なく、平基もしくはわずかに抉りをもつ微凹基の割合が多いと言える。使用石材は安山岩製17点、チャート製16点とほぼ同じ割合である。その他に姫島産黒曜石製1点、腰岳産黒曜石製1点である。安山岩については無斑晶質のガラス質安山岩であり、県内にその産地がないため、姫島産もしくは北部九州産の可能性が高い。ここでは形態によって、次のように分類を試みた。

Ⅰ類　平面形がほぼ二等辺三角形になるグループ

Ⅱ類　平面形がほぼ正三角形になるグループ

Ⅲ類　側辺に角をもつ平面形がほぼ五角形になるグループ

さらに基部の形態により、①**平基**、②**凹基**、③**微凹基**とし、さらに凹基はａ**尖脚**、ｂ**円脚**、ｃ**方脚**として細分した。

分類による傾向としては、Ⅰ類、Ⅲ類の割合が多く、平基と凹基の割合はほぼ同じであった。平基はそのほとんどが安山岩製であり、基部に抉りを入れないのは、石材の特質によるものかもしれない。

Ⅰ①類（第 36 図：91 ～ 98）

91 ～ 98 は平面形がほぼ二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。91、92、93 はチャート製で、94 ～ 98 は安山岩である。96、97、98 は側縁に鋸歯状の加工が施されている。

Ⅰ②類（第 36 図：99 ～ 103）

99 ～ 103 は平面形がほぼ二等辺三角形を呈する凹基の石器の一群である。99、100 はチャート製で脚端部が尖脚になるⅠ②a 類である。101、102 はチャート製で円脚をもつⅠ②b 類である。103 は姫島産黒曜石製で脚端部を平らに加工する方脚を有するⅠ②c 類である。

Ⅰ③類（第 36 図：104 ～ 109）

104 ～ 109 は平面形がほぼ二等辺三角形を呈し、僅かな抉りをもつ微凹基のⅠ③類のグループである。104、105 がチャート製で、106 ～ 108 が安山岩製、109 が腰岳産黒曜石である。109 は全面に剥離調整を施しているが、右側縁が若干膨らんでいて平面形が整っておらず未製品かもしれない。

Ⅱ③類（第 36 図：110）

Ⅱ類の平面形がほぼ正三角形を呈す石鏃の出土は SC1 出土の 5 と 110 の 2 点である。110 はチャート製で基部にわずかに抉りを有している。

Ⅲ①類（第 36 図：111 ～ 120）

111 ～ 120 は中央付近の側縁に角をもつほぼ五角形を呈する石鏃の一群である。明らかに凹基と言えるものはなく、平基、微凹基が占めている。118、119 はその中でも側縁がわずかに抉れ、鳥賊型とでも呼べる特徴的な形態をしている。類例として延岡市野門遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2006）に縄文時代の出土遺物としての報告がある。

異形石器（第 36、37 図：121 ～ 127）

異形石器の一群を一括して掲載した。121 ～ 123 は半月形刃器である。半月形刃器と呼ぶのは西都原考古博物館研究紀要（藤木 2012）の報告によるものである。121 が安山岩製、122、123 が姫島産黒曜石製である。半月形刃器と呼称を与えていないが、酷似するものが鹿児島県内 5 遺跡で 10 点出土しており、次のような共通する 4 つの特徴を挙げている。① 3 ㎝以下の小型のものである。②両面とも押圧剥離を行い形を整えている。③横長において垂直方向に中心線を引いた場合、線対称になる形をしている。④上縁が弧形をしている（東 1991）。また、縄文時代晩期の土器に伴って出土しており、当遺跡の半月形刃器も同じ系統のものであろう。121、122 は直線的な辺の中央がやや浅く内側に湾曲し、123 は二辺とも外湾する平面形を呈している。宮崎県内では有馬コレクション以外に県内の旧石器～弥生時代までの公開された資料の中にも類例がなく、その資料価値は高いものと思われる（藤木 2012）。124 は安山岩製で、断面は円形に近いもので、3 つの突出部をもつ。125 は基部に丸い抉りがあり、脚端部と上部先端が丸く加工されている。126 は石鏃とよく形が似ているが、上部にも剥離調整を行って形を整えている。127 は黒曜石製で剥片の表面が研磨されており、明瞭な線状痕が認められる。

石匙（第 37 図：128 ～ 129）

128、129 は石匙である。128 が横長でチャート製、129 が縦長で安山岩製である。128 は両側からの抉りによってつまみ状の小突起を作りだし、全面に剥離調整を施して加工している。

石錐（第 37 図：130 ～ 133）

130 ～ 133 は石錐である。130 はチャート製で 131 ～ 133 は安山岩製である。いずれもつまみ部をもち、軸部は細長い。130 の軸部の断面形は菱形に近い。131、133 の軸部は欠損している。

二次加工剥片、剥片、原石（第 37 図：134 ～ 140）

134 は腰岳産黒曜石製と思われる二次加工剥片で、不定形の剥片の周縁に、細かな二次加工を施している。135 、136 は水晶製で、136 はやや黒みを帯びた大崩山産のいわゆるけむり水晶である。137 は腰岳産黒曜石製と思われる剥片である。138 は千枚岩製で二つの穿孔があり、一つは片側穿孔で、もう一つは両側穿孔である。139 は腰岳産と思われる黒曜石である。

石鑿、磨製石製品（第 37 図：141、142）

141 は石鑿で 1 点出土した。上部は欠損しているが、刃部は平面形に加工しており、その大きさ、形状から石鑿とした。142 は頁岩製の磨製石製品である。長楕円形の平面形を有し、周辺を剥離と研磨によって整形している。明確な刃部は形成されない。

掻器（第 38 図：143、144）

143、144 は流紋岩製の掻器である。主に正面の側縁に剥離調整を行い、刃部を形成している。

打製石斧（第 38、39、40 図）

打製石斧は基部または刃部欠損品を含めて 37 点出土した。使用石材は大半が砂岩で占められ、次にホルンフェルス製が少数ある。緑色片岩や千枚岩も使用しており、身近にある石材利用となろう。ここでは、次のように基部形態により大きく 3 つに分類し、さらに体部、刃部によって細分化した。尚、分類の観点については「野首第 2 遺跡宮崎県埋蔵文化財センター 2008」を参考にした。

Ⅰ類　無抉群　体部平面形の両側縁が基本的にほぼ直線ないし若干張り出すラインで構成されるグループ。

Ⅱ類　有抉群　体部中程ないし上半の側縁に着柄に関連すると思しき抉りを施すグループ。

Ⅲ類　有柄群　体部上半と下半の幅が異なり、抉りでなく肩ないし段状の境界を有するグループ。

Ⅰ類　無抉群

Ⅰ①類　短冊形（第 38 図：145 ～ 149）

無抉群のなかで、長方形ないし隅円長方形の平面形を有し、基端部がほぼ直線で構成されるものとし、145 ～ 149 がこれにあたるとした。145、147 は砂岩製、146 は頁岩、148、149 はホルンフェルス製である。

Ⅰ②類　細形（第 38 図：150 ～ 154）

無抉群のなかで、細身の体形で長楕円形や紡錘形の平面を有するものとし、150 ～ 154 がこれに属するとした。このなかでは 152 だけが千枚岩製で他は砂岩製である。152 は刃部が円形で、基部の先端がすぼり気味となる紡錘形である。

Ⅰ③類　撥形（第 38 図：155 ～ 158）

同じく無抉群のなかで、刃部に向かって両側縁が広がる長台形の平面形を有するもので、両側縁

がやや内反りになるものを含むものとし、155 ～ 158 がこれにあたる。155 は刃部が欠損しているが、刃部に向かって両側縁が広がっている。158 は、両側縁が内反りになっており、まさに三味線の撥のような形をしている。

Ⅱ類　有抉群

①刃部形態が平刃（第 39 図：159 ～ 164）

159 ～ 164 は、体部中程ないし上半の側縁に抉りを有するグループのなかで、刃部形態が平刃のものを分類した。162 は千枚岩製で、出土した打製石斧のなかでは大ぶりである。163 はホルンフェルス製、164 は頁岩製である。

②刃部形態が尖刃（第 39 図：165）

165 は基部に抉りをもち、刃部にかけて両側縁が広がり、片側だけ尖るように加工している。

③刃部形態が円刃（第 39 図：166 ～ 167、169）

166 は基部に抉りを有し、大部はやや内反りし、刃部は表裏両面から剥離調整を施して円形に加工している。

④刃部が欠損（第 39、40 図：168、170 ～ 171）

基部に抉りを有しているが、刃部が欠損しているものを一括した。すべて砂岩製である。

Ⅲ　有柄群（第 40 図：172 ～ 174）

体部上半と下半の幅が異なり、抉りでなく肩ないし段状の境界を有するもので、172 ～ 174 がこれにあたるものとした。172 は砂岩製で、柄部が短く、下半部が円形を呈するラケット形と呼べる形をしている。173、174 は砂岩製で短い柄部を有し、そこから両側縁が広がって刃部を形成している。

磨製石斧（第 40、41 図：175 ～ 183）

打製石斧はほとんどが砂岩製なのに対して、磨製石斧は全 8 点の出土のなかで、6 点がホルンフェルス製である。175 は頁岩製の磨製石斧で全体が丁寧に研磨されており側縁と平坦面の境に稜が立っている。刃部は欠損している。176、179 は剥離による整形後、礫面全体に細かい敲打による調整が施されている。178 はホルンフェルス製で石棒の可能性もあるが、下部に向かってやや薄くなり、刃部を形成することが想定されたため磨製石斧とした。180、181 はホルンフェルス製の刃部で、蛤刃状に研磨されている。183 は研磨された痕跡は認められないものの平面形や断面形の形状や剥離による整形の意図がみられ、未成品とした。

横刃形石器（第 41 図：184 ～ 187）

総計 4 点を認定した。横刃形石器としての器種認定として、長軸の端部に打製石斧のような刃部形成が認められず、横断面を観察した場合に、どちらか一方に傾斜して刃部を認定しうる二等辺三角形を呈する形態的特徴を重視するという野首第 2 遺跡 (2008) の認定基準を採用した。184 は直線刃で背縁は敲打によって調整されている。186 は外湾する刃をもち、細かい剥離調整がみられる。

十字形石器、円盤状石器（第 41 図：188、189）

188 は十字形石器で B 1 区の重機による表土掘削直後の精査中、調査区北側のトレンチ内Ⅱ層上面で出土した。扁平で層状構造が顕著な緑色千枚岩を素材としている。4 つの抉入部がある十字形を呈し、長軸 10.3㎝、短軸 8.6㎝、厚さ 1.8㎝を測る。十字形石器は、県内では 6 遺跡で確認され

ているが、野首第２遺跡では十字形石器・X 字形石製品の５点の出土例がある。用途は不明である。189 は千枚岩製の円盤状石器である。円形扁平礫を用いて、周縁のみ剥離調整して加工している。

石錘（第 41 図：190 ～ 200）

190 ～ 198 は打欠石錘で９点確認された。素材の礫の長軸両端部に剥離によって打ち欠いて紐掛け部を作り出している。196 は頁岩製で、一方の剥離面が器体の奥まで伸びている。195、197 は剪断泥質岩で、191、198 は千枚岩製である。199 は頁岩製、200 はホルンフェルス製の切目石錘である。長軸両端部に切り目を入れている。

敲石（第 42 図：201 ～ 205）

201 ～ 203 は砂岩製の棒状礫を素材としている。201、202 は長軸端部に敲打痕がみられ、203 は礫の長軸に沿う側縁に連続した敲打、剥離痕がみられる。204、205 はチャート製で 204 は棒状の礫を使用し、多方向から敲打することで稜が立ち、尖る形をしている。205 は球形に近い礫を使用し、一端部に敲打痕が残る。

石核、礫器（第 42 図：206 ～ 210）

206 は姫島産黒曜石、207 は流紋岩、208 はホルンフェルス、209 は砂岩の石核である。210 は礫器で厚みのある砂岩を素材とし、打ち欠きによる加工が施されている。側縁部に敲打痕が残る。

【参考文献・引用文献】

宮崎県埋蔵文化財センター 2008「野首第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 172 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「尾花 A 遺跡Ⅰ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 185 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2010「野首第２遺跡（二・三次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 188 集』

黒川忠広　2007「鹿児島県下の三叉文施文土器について」『 南九州縄文通信 No18』南九州縄文研究会

新東晃一　2011「南九州の異形石器」『南九州縄文通信 No21』南九州縄文研究会

下山覚　1985「黒川式土器」細分の為の基礎論」『鹿大考古第３号』鹿児島大学法学部考古学研究室

水ノ江和同　1997「北部九州の縄紋後・晩期土器－三万田式から刻目突帯文土器の直前まで－」『縄文時代第８号』 縄文時代文化研究会

堂込秀人　1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿大考古 31』鹿児島県考古学会

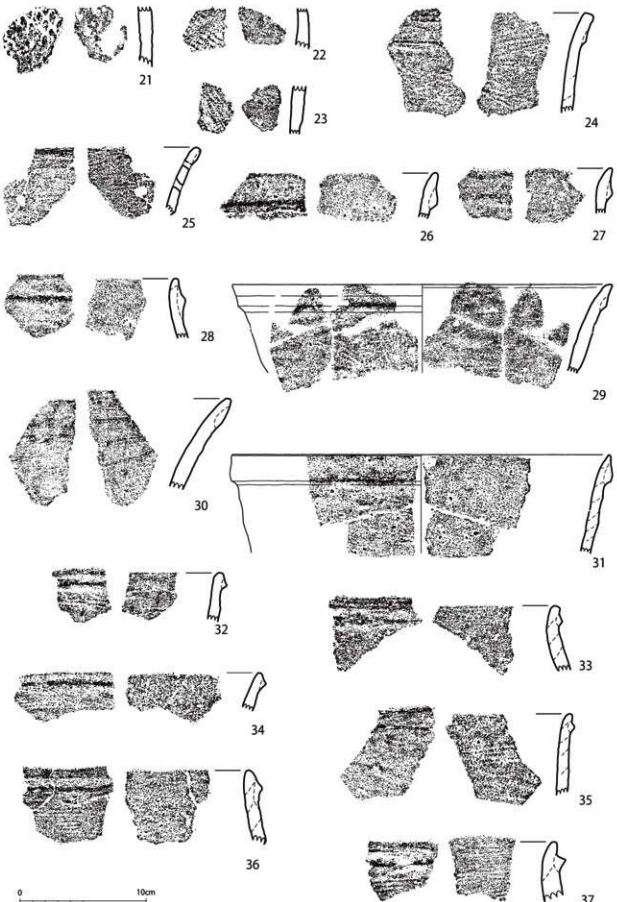
上村俊雄　1992 「南九州の十字形石器」『南九州地域における原始・古代文化に関する総合的研究』鹿児島大学法文学部

久保田健太郎　2012「異形石器研究の一視点」 季刊考古学 119 号雄山閣

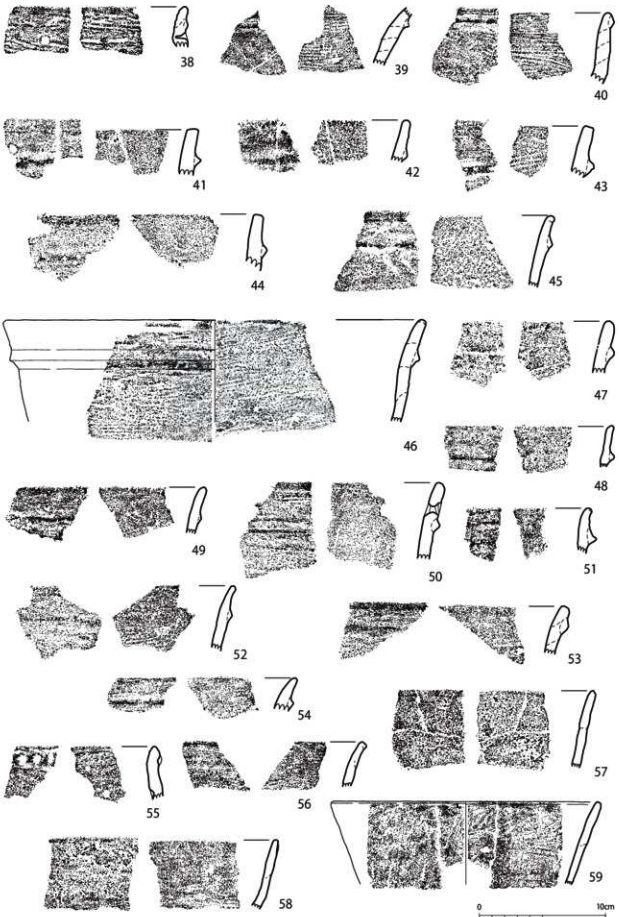
日高優子　2012「宮崎県の精神文化関連遺物」『縄文時代における九州の精神文化』九州縄文会、南九州縄文研究会

東　和幸　1991「川辺町南田代遺跡の石器について」『鹿大考古学会報第 11、12 合併号』

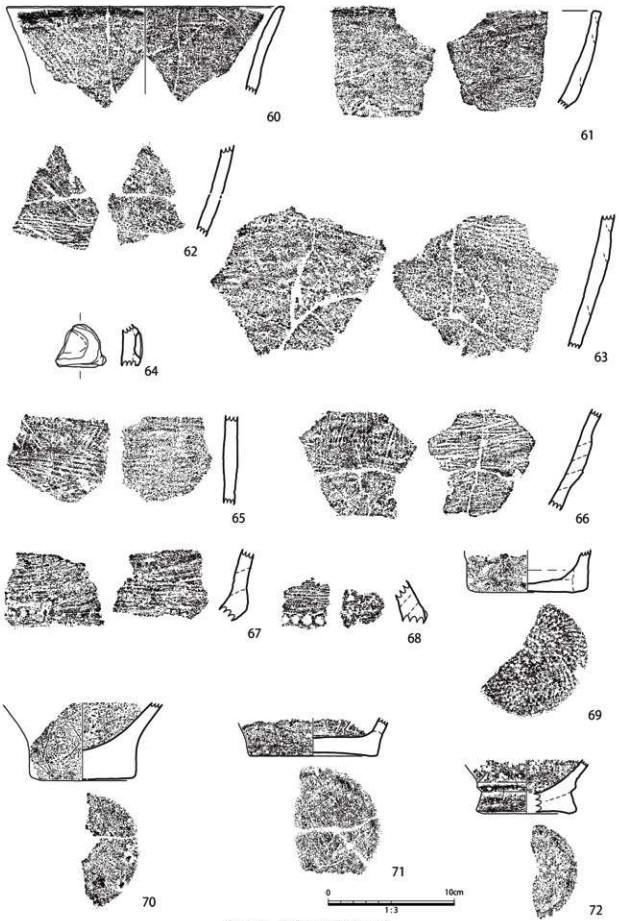
藤木　聡　2012「有馬七蔵・森山彦一・藤森栄一と幻の有馬コレクション」『宮崎県西都原考古博物館研究紀要第８号』



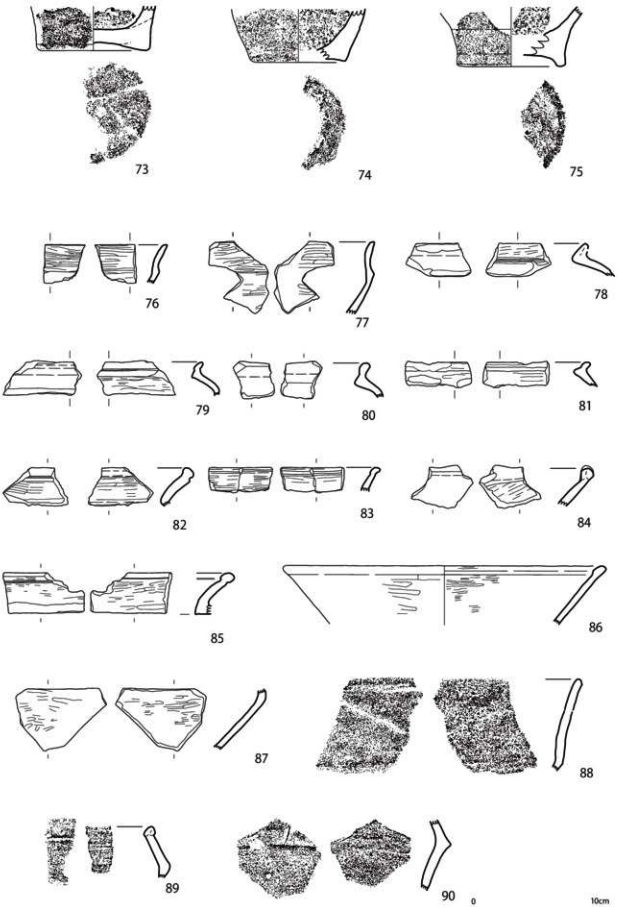
第 32 図　縄文土器実測図（1）



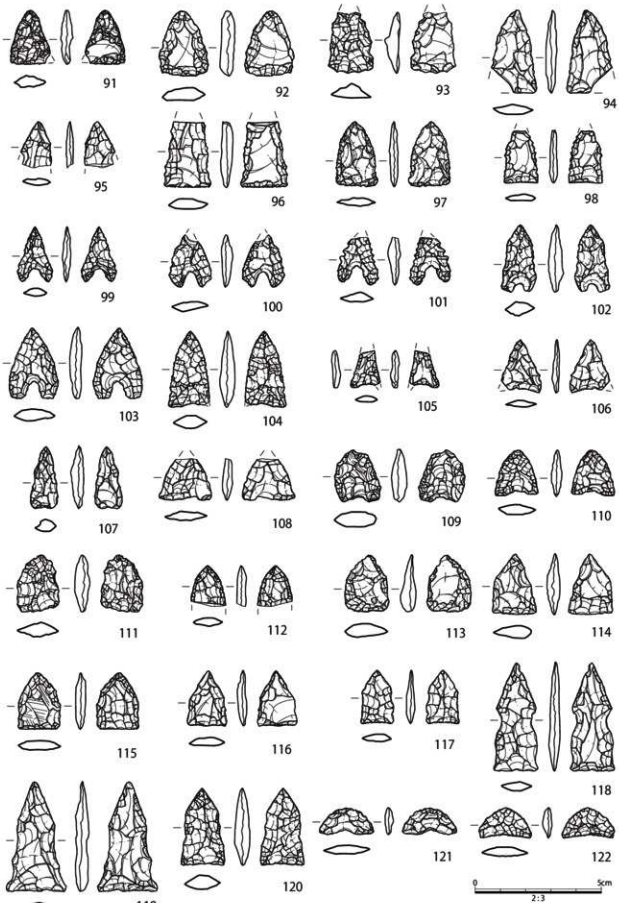
第 33 図　縄文土器実測図（2）



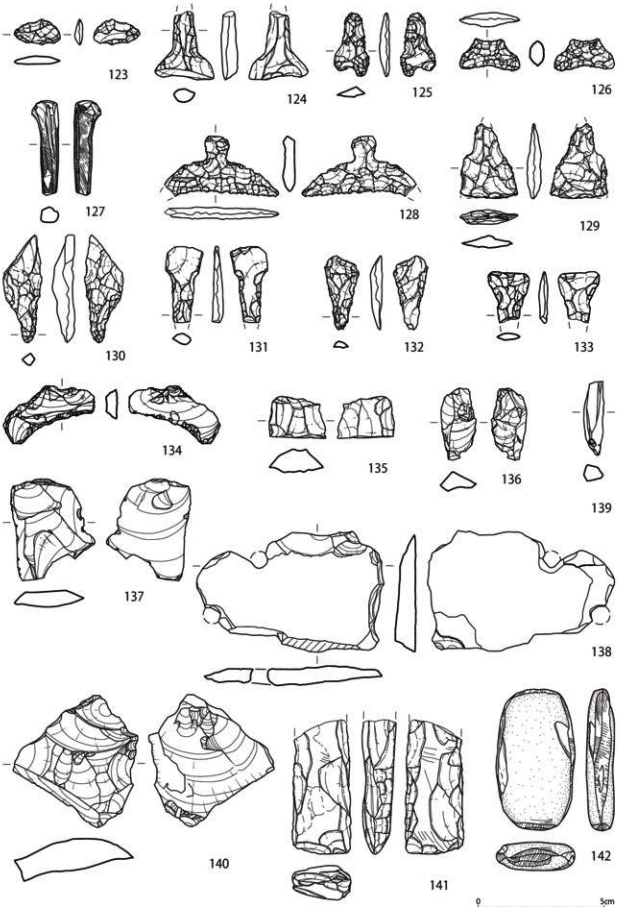
第 34 図　縄文土器実測図（3）



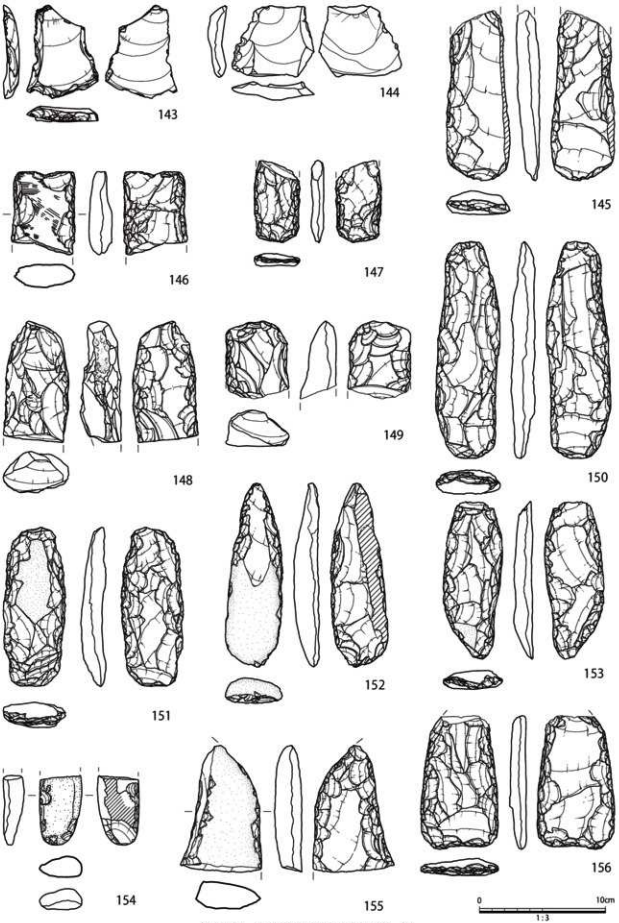
第 35 図　縄文土器実測図（4）



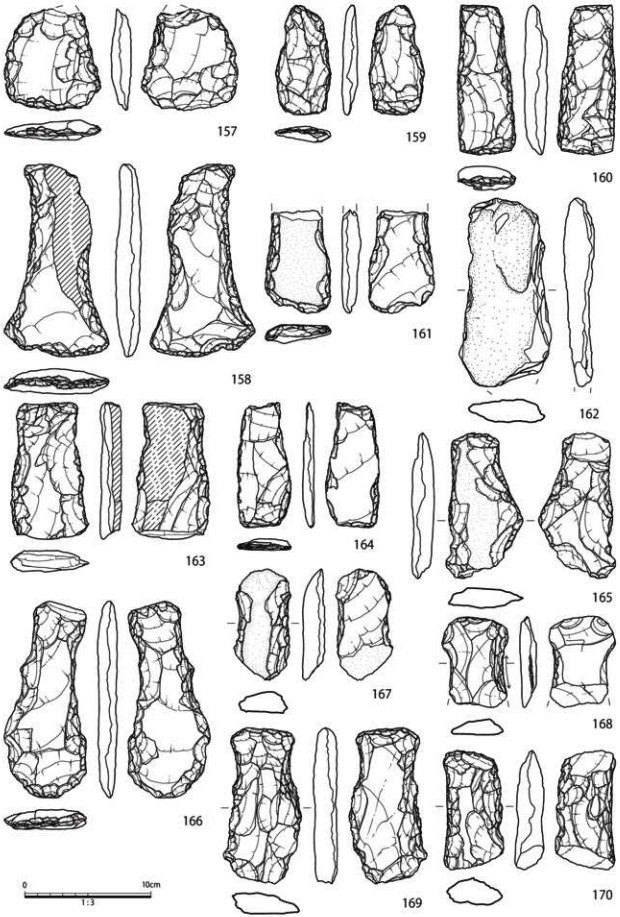
第 36 図　縄文時代晩期石器実測図（1）



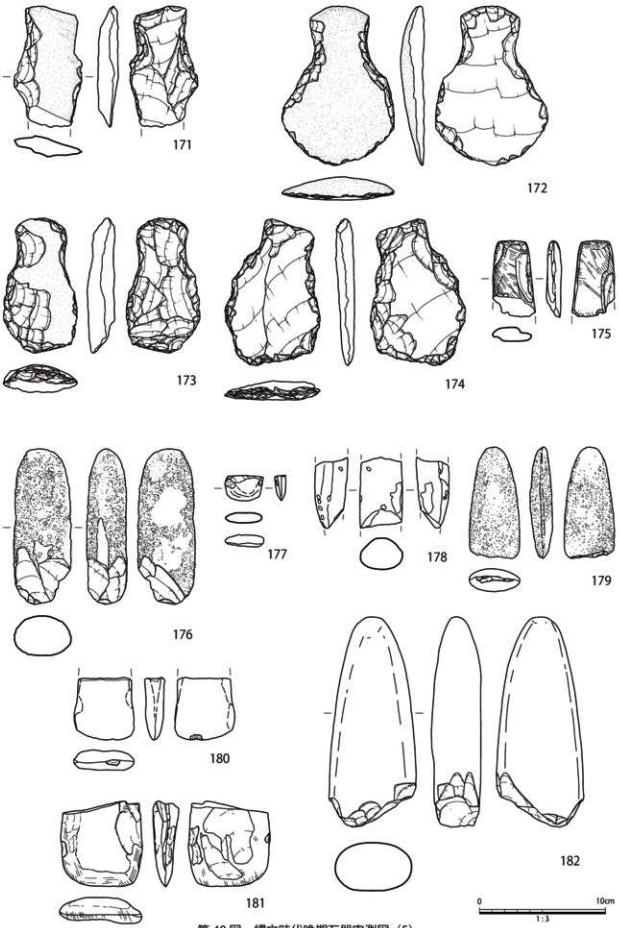
第 37 図　縄文時代晩期石器実測図（2）



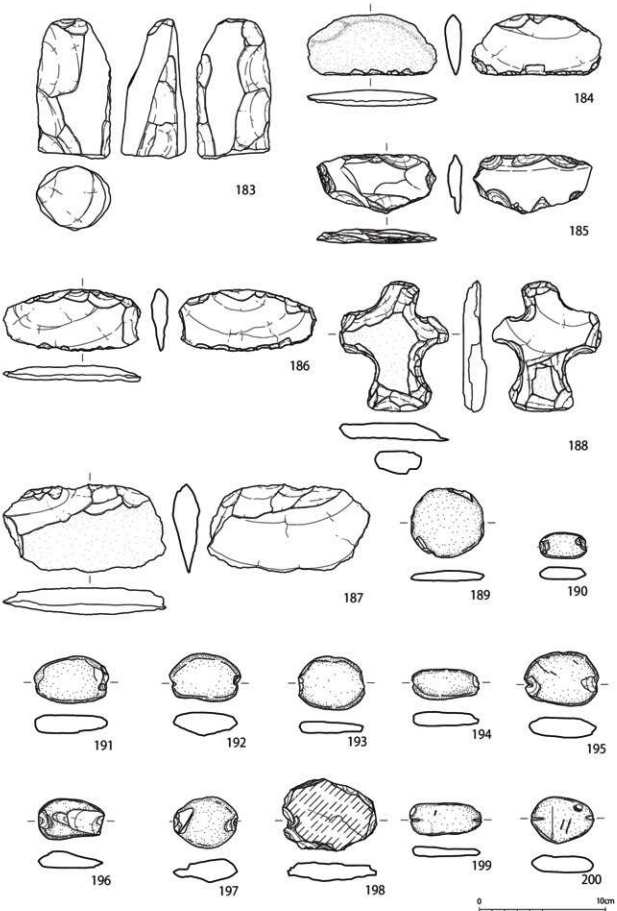
第 38 図　縄文時代晩期石器実測図（3）



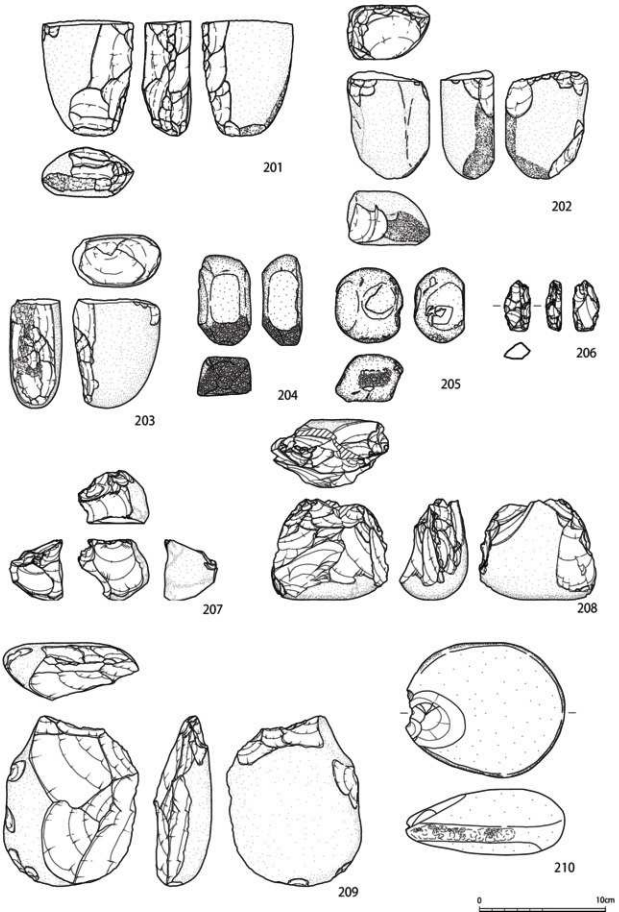
第 39 図　縄文時代晩期石器実測図（4）



第 40 図　縄文時代晩期石器実測図（5）



第 41 図　縄文時代晩期石器実測図（6）



第 42 図　縄文時代晩期石器実測図（7）

第６節　古墳時代の遺構と遺物

１　遺構の分布

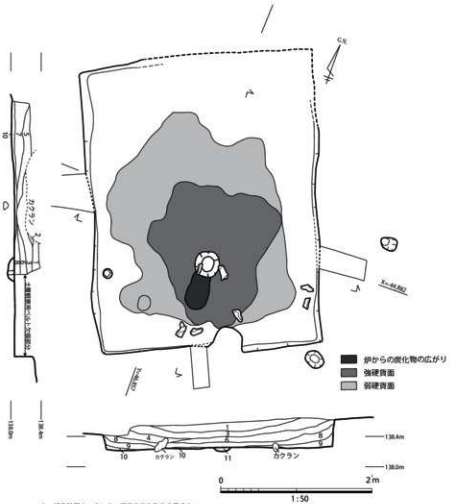
Ｂ１区西側上部の平坦部で方形の竪穴建物跡１軒検出した。Ｂ１区の遺物包含層である基本土層Ⅱ層掘削中、住居の南側にあたる部分にしまりのない埋土があり、遺構の可能性を考えたが、竪穴建物になるのではないかという認識がなく、住居全体の平面プランを検出することはできなかった。そのため、遺構内を掘削しており、土層観察用ベルトの南側の一部と竪穴建物北西壁、北隅が欠損している。その後、調査を進める中で、北西壁を除く各壁と方形のプランが確認され、炭化物と焼土を伴う炉を検出したことから竪穴建物跡として認定した。

２　検出遺構と出土遺物

（１）竪穴建物跡（第 43、44 図）

住居の平面形は方形で、主軸方向は座標北から西へ約 30°振っている。規模は長軸で 3.74 m、短軸で 2.90 m を測り、壁高は東壁で最も高く 39.2㎝、南壁で 20㎝を有している。検出状況がよくないため、当時の構築面はさらに高い位置であったと考えられる。住居床面は、Ｂ１区基本土層Ⅲの黄褐色粘質土が硬化している面が炉を中心に広がっており、中央はさらに硬化した部分が見られる。住居の埋土は、上層には褐色、黄褐色を基調とする砂質土、下層には黄褐色の粘質土がみられ、レンズ状の自然堆積を示す。住居が廃絶後に掘られたと思われる攪乱部分があり、炭化物を含んでいた。住居内からは、炉が検出された。炉は住居南東壁中央から約 1.0 m 内側に確認され、平面形はほぼ円形で直径約 30㎝を測る。炉の断面は浅い皿状で、深さは６㎝ほどである。炉から南側に焼土が広がる箇所があり、炭化物を含んでいた。柱穴の検出に努めたが明確な柱穴は確認できなかった。遺物は全部で 100 点あまり出土した。内訳としては、縄文土器の小片が多かったが、土師器が 18 点、須恵器片２点、石器は剥片を中心に数点出土している。遺物のほとんどが埋土中であり、住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。床直上における遺物については、磨石１点と炉の横で砥石が出土し、さらに、その近くで須恵器が出土した。ここでは床直上から出土した遺物を図化した。211 は花崗斑岩製の磨石である。表面、裏面ともに使用にともなう平滑面がみられる。212 は頁岩製の砥石である。上面と左側面に平滑で研ぎ面として利用したことを示している。213 は古墳時代終末期に属する須恵器の杯身で、TK209 型式（田辺 1981）の範疇と考えられる。

第 43 図　SA1 竪穴建物跡出土遺物



1　褐色砂質土　2～8mm程度の炭化物を少量含む。
2　オリーブ褐色砂質土　1～2mm程度の炭化物を少量含む。
3　褐色砂質土　Ⅱ層が崩いブロック状に含まれる。
4　にぶい黄色砂質土　1cm程度の粘土ブロックを多く含む。2～3mmの砂粒を少量含む。黄褐色のマンガン質沈殿が見られる。
5　にぶい黄褐色砂質土　粘性が弱い
6　にぶい黄褐色砂質土　Ⅲ層に比べ灰色やや強く、ブロック状のⅡ層がやや多く含まれる。
7　にぶい黄褐色粘質土　粘性がやや強く、ブロック状のⅡ層を多く含む。炭化物をごく少量含む。
8　にぶい黄褐色粘質土　粘性が強く白色の微粒子を少量含む。
9　暗灰黄色粘質土　粘性がやや強くブロック状のⅡ層を多く含む。
10　にぶい黄褐色粘質土　粘性が強く炭化物粒をごく少量含む。
11　黒褐色粘質土　粘性がやや強く5mm～2cm程度の炭化物、焼土を多く含む。白色粘土ブロックを少量含む。

第44図　SA1 竪穴建物跡実測図

第7節　その他の時代の遺構と遺物

1　遺構の分布

時代不明の遺構としてＢ１区の傾斜地ほぼ中央で集石遺構２基と配石遺構１基を検出した。集石遺構も配石遺構もⅠ層の表土掘削中に確認したものであり、Ⅱ層上面検出である。Ⅱ層は縄文時代晩期の遺物を多く含む遺物包含層で平均で約25cm堆積している。前節で述べた古墳時代の竪穴建物跡との上下関係、層位的なことなどから判断し、時期不明の遺構として扱うことにした。

2　検出遺構と遺物

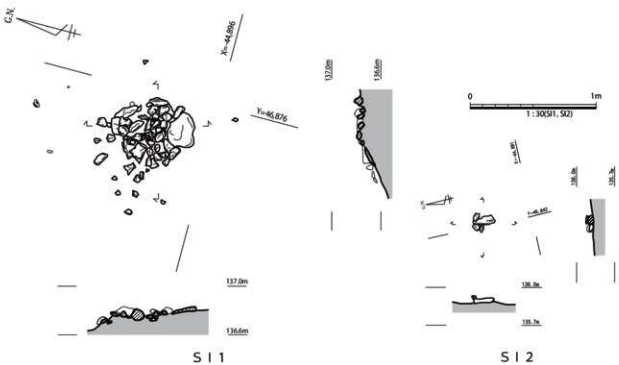
SI1（第45、47図：214）

SI1はＢ１区調査区ほぼ中央北側のH2Grで検出された。明確な掘り込みは確認できなかったが、

内部礫を外した下には平らな面をもつ扁平で大型な阿蘇溶結凝灰岩や千枚岩が配石されていた。内部礫にもそれらの石材が多く確認され、身近な石材を使用している。214 はホルンフェルス製の磨製石斧の未製品で、内部礫の上面から出土しており、混在した可能性が高い。

SI2（第 44 図）

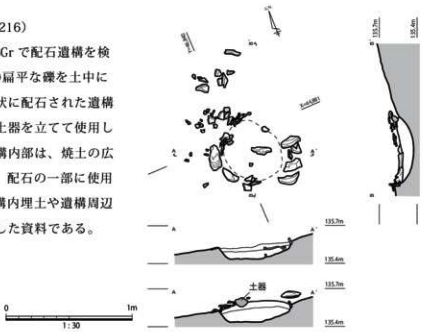
SI2 は B 1 区調査区の H3Gr で検出された。意図的に礫を組んだ形跡は認められるが、構成礫が少なく、重機による表土掘削時に一部破壊されている可能性もある。



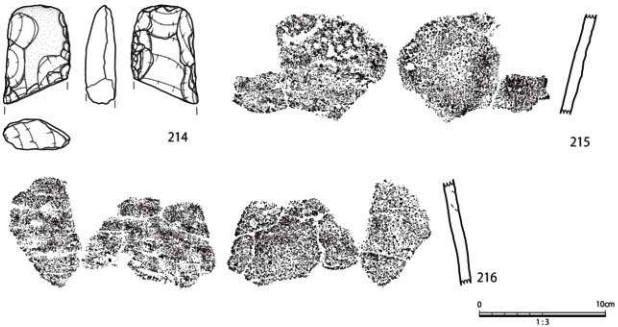
第 45 図　集石遺構実測図

SW1（第 45，46 図：215、216）

B 1 調査区のほぼ中央 H3Gr で配石遺構を検出した。15cm～ 20cmほどの扁平な礫を土中に埋めて立つようにし、円形状に配石された遺構である。その配石の一部に土器を立てて使用しており、特徴的である。遺構内部は、焼土の広がりが確認された。215 は、配石の一部に使用された土器片で、216 は遺構内埋土や遺構周辺から出土した土器片が接合した資料である。



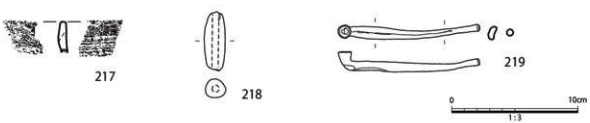
第 46 図　配石遺構実測図



第 47 図　集石遺構、配石遺構出土遺物

3　遺構に伴わないその他の遺物

時期不明のその他の遺物として、3 点を図化した。217 は弥生時代後期から古墳時代前期と思われる二重口縁壺の口縁部である。口縁部に櫛書文様が施されている。218 はＡ区西側トレンチより出土した土錘である。219 は同じくＡ区西側トレンチより出土した煙管である。2 点ともＡ区の谷の内部からの出土ではなく、南西側に離れたトレンチの壁からの出土であり、谷底部から出土した遺物とは時期差があると思われる。



第 48 図　時期不明のその他の遺物

第 8 節 まとめ

中畑遺跡は五ケ瀬川流域の阿蘇溶結凝灰岩台地上の傾斜地と尾根から派生する谷を含む遺跡である。そのため、傾斜地では降水等による浸食や流失、上部から流れ込みの影響を受けやすく、また、谷部では上部からの流失した土砂等が底部に堆積するなど、土層と遺構・遺物の関係が捉えにくい状況があった。今回の調査により、出土した遺物はそのほとんどが上部からの流れ込みの可能性が高い。しかし、古墳時代終末期と思われる竪穴建物跡を検出し、調査区内でも人間活動があったことを示している。ここでは、中畑遺跡の検出遺構・出土遺物について時代ごとに概括してまとめとしたい。

旧石器時代

本遺跡に旧石器時代の指標となる火山灰は存在せず、石器製品としての遺物はわずか２点にとどまり、姶良 Tn 火山灰降下前後の状況は確認できなかった。しかし、周辺の旧石器時代の遺跡として、直線距離で約 300 m、尾根一つ挟んだところに位置する矢野原遺跡がある。矢野原遺跡では AT 層の上下から二つの文化層が確認され、特に AT 下位の文化層から数点のスクレイパー類と石核、剥片類が出土し、人間の生活の痕跡が明らかになっている。今回、中畑遺跡では、形態的に鑑みて旧石器時代の石器と認定した遺物は石刃とナイフ形石器の２点のみであったが、それらと同質で白色に表面が風化した流紋岩の剥片、石核等がＢ１、Ｂ２区合わせて約 60 点出土している。それらのすべてが旧石器時代のものとは言えないまでも、矢野原遺跡との位置関係、旧石器時代の遺物、流紋岩の出土状況などから、本遺跡の位置する丘陵地一帯も当時の人々の活動範囲内にあったと考えておきたい。

縄文時代

本遺跡の遺物の中心は縄文時代晩期である。遺構については、Ⅱ層掘削中に検出した土坑８基、Ｂ２区の配石遺構１基を認定した。第Ⅳ章第５節で述べたように、Ｂ１区の遺物包含層であるⅡ層は上位のⅡａ層、下位のⅡｂ層に分層することができ、Ⅱｂ層上面が遺構構築面と思われる。遺物については、Ⅱｂ層が流れ込んだ時に堆積したもの、遺構が構築されたときのもの、Ⅱ層上部Ⅱａ層が流れ込んだときに堆積したものなどが混在していると考えられる。縄文土器は晩期の粗製の深鉢と精製の浅鉢を主体としている。粗製深鉢は突帯文土器がほとんどでいわゆる松添式の範疇に入る時期が想定される。肥厚する口縁帯（Ⅰ①類）、口縁端部直下に位置する突帯文（Ⅰ②ａ類）、口縁端部からやや下方に位置する突帯文（Ⅰ②ｂ類）と大きく３タイプに分類を試みた結果、最も多かったのはⅠ②ｂ類だった。Ⅰ②ａ類とⅠ①はほぼ同じ割合となった。松添式土器の組列について口縁部外面を肥厚する一群の土器は、口縁部外面に刻みのない突帯文を添付する一群より先行する可能性が高い(下山 2000)という指摘あるが、本遺跡において、それぞれのタイプの前後関係を想定することは無理がある。黒川式土器と思われる浅鉢も口縁部の形態の違いから一定の時期差が認められる。さらに、Ｘ字状の突帯をもつ胴部片、刻目突帯文の出土は、松添式期から刻目突帯文を有する弥生時代早期相当までの縄文時代晩期のある一時期に遺跡周辺で人間活動が営まれていたことを示している。

次に石器において考察を加える。当遺跡で出土した石器類は、356 点で、剥片、チップ類を除くと、18 種約 120 点を数え、多様性に富む石器が出土している。最も多く出土した石器類は、剥片であるが、剥片を除く石器を器種別に分類すると、土木農耕具としての打製石斧（37 点）・磨製石斧（９点）、狩猟具・武器としての打製石鏃（35 点）、漁労具としての打欠石錘（９点）・切目石錘（２点）、食材や道具等の加工具としての磨石・敲石（10 点）、石錐（４点）、横刃形石器（４点）石匙（２点）などであった。この中で、打製石斧と打製石鏃の出土数の割合が多いのが特徴として見い出せる。打製石斧については、Ⅰ類の無抉群（15 点）、Ⅱ類の有抉群（18 点）、Ⅲ類の有柄群（４点）となり、Ⅰ、Ⅱ類はほぼ同じ割合で、Ⅲ類が少数になる傾向がみられた。打製石斧全 37 点のうち 23 点が砂岩製なのに対して、磨製石斧は全８点中、６点がホルンフェルス製であり、用途に応じて使用する石材を使い分けている傾向がみられた。打製石鏃については、平基、凹基の割合はほとんど同じであったが、平基には主に安山岩を用いるという傾向が得られた。そして、特筆することとして、異形石器等の精神文化に関連すると思われる遺物の出土が挙げられる。十字形石器（１点）、半月形刃器（３点）、円盤状石器（１点）、異形

石器（3 点）が出土している。近隣の類例として、縄文時代晩期前半期中葉から後葉に比定される高千穂町のセベット遺跡では石棒類、異形石器、十字形石器が出土している。本遺跡の十字形石器は千枚岩を使用しているが、セベット遺跡のそれは、結晶頁岩・粘板岩を使用しており、板状に剥離しやすいという使用石材の共通点がある。半月形刃器については県内においては類例がほとんどなく、今後注目される遺物である。精神文化に関わる遺物については、ここでは当遺跡の特徴を示すものと捉えておきたい。本遺跡では直接的な人間生活の痕跡を見いだすことはできなかったが、このような縄文土器、石器類の出土状況から縄文時代晩期を中心に遺跡周辺で、土器を製作し、目的に応じた石器を用いて、狩猟、漁労、採集等の多様な食生活を送っていた集落があったと推測される。また、県内にはないガラス質安山岩、姫島・腰岳産の黒曜石の使用は、遠方にある各石材産地と何らかの交流があった可能性を示している。

古墳時代

古墳時代では竪穴建物跡を 1 軒検出し、床直上から須恵器、砥石等が出土している。須恵器は、蓋坏の坏身で TK209 型式（田辺 1981）の範疇ととらえた。土師器も出土しているが、小片がほとんどでしかも風化が激しく図化できるものはなかった。土師器の総出土数 198 点をグリッド毎に分類したところ、B1 区の尾根稜線から北側のグリッドからはほとんど出土しておらず、南側の I3、H3、G3 グリッドとそれに続く B2 区の F4 グリッドで 121 点出土し、全体の 6 割を超えている。また、A 区の谷内部でも 32 点出土している。このことから、古墳時代の遺物も原位置をとどめていない可能性が高く、しかも、稜線を境にして、主に南側で遺物の流れ込みがあったことが推測される。当遺跡と同じように五ヶ瀬川左岸に位置する遺跡で、竪穴建物跡を検出した例として、古墳時代前期頃とみられる南久保山小堀町遺跡がある。ここでは、傾斜地を削ってフラットな床面を作り、ベッド状遺構をもつ竪穴建物跡が検出されている。当遺跡においては、ベッド状遺構は検出されなかったが、丘陵の傾斜地のわずかに傾斜が緩む場所に竪穴建物を構築しており、居住スペースを傾斜地に求めた周辺遺跡と同様の様相を示すことになった。

今回の調査では、傾斜地に立地する遺跡の様相を示し、良好な包含層を有するものではなかった。しかし、それぞれの遺物は明らかに人間活動の所産であり、遺跡周辺で何らかの生活が営まれていたことを物語っている。今後、当該地域の歴史的解明の一助になる資料を提供することができたのではないかと考える。

【参考文献・引用文献】

宮崎県 1989「宮崎県史」 資料編　考古 1

高千穂町教育委員会 1984「セベット遺跡」『高千穂町文化財報告書第 3 集』

宮崎市教育委員会 1999「松添貝塚Ⅱ」『宮崎市文化財調査報告書第 37 集』

八木澤一郎　1994 「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信 No8』南九州縄文研究会

下山覚　2000「いわゆる松添式土器」の評価をめぐって－南九州の資料を用いて－『九州旧石器』第 4 号　九州旧石器文化研究所

田辺昭三　1981「須恵器大成」 角川書店

第４表　中畑遺跡遺物観察表（土器）

遺物番号	種別	器種	部位	法量（cm）※（推定値） 層位	口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴
2	縄文土器	深鉢	底部	－		(8.7)		不明（風化）	不明（風化）	黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR/5/8	3mm以下の黒色光沢粒をわずか、5mm以下の灰色粒を多く含む。
3	縄文土器	浅鉢	胴部	－				不明（風化）	不明（風化）	褐 10YR4/4	黒褐 10YR2/3	2mm以下の黒色光沢粒をわずか、4mm以下の黒色、灰色粒を少し含む。
12	縄文土器	深鉢	胴部	－				貝殻条痕	不明（風化）	暗赤褐 5YR3/6	黒褐 5YR/2/1	2mm以下の黒色粒を少し、3mm以下の灰白粒を多く含む。
17	縄文土器	深鉢	口縁部	－				不明（風化）	不明（風化）	にぶい橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR4/3	6mm以下の橙、灰白、褐灰を少量、2mm以下の黒褐光沢粒を多く含む。
20	縄文土器	深鉢	口縁部	－				不明（風化）	不明（風化）	暗褐 7.5YR3/3	暗褐 7.5YR3/3	3mm以下の黒色光沢粒、3mm以下の灰白、褐色粒を少量含む。
21	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅳ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm以下の灰白色粒を少量含む。
22	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ				撚糸文か縄文	不明（風化）	褐 7.5YR4/4	明褐 7.5YR5/6	7mm以下の橙粒を少量、2mm以下のにぶい橙、黒褐光沢粒を多く含む。
23	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ				撚糸文か縄文	横工具痕	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/4	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに、6mm以下の褐色粒を少量含む。
24	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				斜ナデ	工具横ナデ	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	5mm以下の褐灰色粒、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
25	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				横ナデ	横ナデ	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3	2mm以下の黒色光沢粒、灰白色粒を少し含む。
26	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/6	5mm以下の灰色、灰白色粒を多く含む。
27	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	褐 10YR4/6	黒褐 10YR3/2	5mm以下の灰白色粒を多く含む。
28	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	黄褐 10YR5/8	黄褐 10YR5/6	4mm以下の灰白色、灰色粒を少し含む。
29	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ	(24.5)			斜ナデ	横ナデ	明褐 7.5YR5/6	褐 7.5YR4/4	5mm以下の褐灰色粒、3mm以下の黒色粒、2mm以下の黒色光沢粒を少し含む。
30	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				工具横ナデ	工具横ナデ	明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
31	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ	(29.8)			横ナデ	不明（風化）	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	6mm以下の灰色粒、5mm以下の灰褐色粒を多く含む。
32	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				貝殻条痕？	工具横ナデ？	にぶい黄褐 10YR4/6	にぶい黄褐 10YR4/3	2mm以下の黒色光沢粒、3mm以下の灰色粒をわずかに含む。
33	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	明赤褐 5YR5/6	黒褐 5YR3/1	5mm以下の灰白色粒、1mm以下の半透明粒をわずかに含む。
34	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	明黄褐 10YR6/6	橙 10YR7/6	3mm以下の灰白色粒を多く含む。
35	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	暗褐 10YR3/3	灰黄褐 10YR4/2	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに、4mm以下灰白色粒を少量含む。
36	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				横貝殻条痕？	不明（風化）	褐 7.5YR4/6	褐 7.5YR4/6	2mm以下の黒色光沢粒を少量、4mm以下の灰色、灰白色粒を多く含む。
37	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				横貝殻条痕	横貝殻条痕	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	2mm以下の赤褐色粒をわずかに、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
38	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				貝殻条痕	貝殻条痕	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/6	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに、3mm以下の灰白色粒を少量含む。
39	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				ナデ	横貝殻条痕	にぶい黄褐 10YR5/3	褐灰 10YR4/1	5mm以下の灰白色粒、3mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
40	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	横貝殻条痕	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	8mm以下の灰白色粒をわずかに、1mm以下の透明粒をごくわずかに含む。
41	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	黒褐 10YR3/2	黒褐 10YR3/1	1mm以下の黒色光沢粒をわずかに、4mm以下の灰白色粒を少量含む。
42	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR7/4	4mm以下の灰白色粒を少量、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
43	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	4mm以下の灰白色、2mm以下の黒褐光沢粒を含む。
44	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい赤褐 5YR4/4	黒褐 5YR3/1	5mm以下の灰色粒をわずかに、2mm以下の赤褐色粒、3mm以下の灰白色粒を少量含む。
45	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅲ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	5mm以下の白色粒を少量、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
46	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅲ	(29.1)			横方貝殻条痕	横貝殻条痕	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	5mm以下の灰白色粒を少量、3mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
47	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅲ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	6mm以下の灰白色粒をわずかに、2mm以下の黒色光沢粒をごくわずかに含む。

遺物番号	種別	器種	部位	層位	法量（cm）※（推定値）			調整		色調		胎土の特徴
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
48	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	褐 10YR4/6	褐 10YR4/6	4mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
49	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				工具横ナデ	工具横ナデ	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/4	3mm以下の灰白色粒、1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
50	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄橙 10YR5/4	明黄褐 10YR6/6	2mm以下の半透明粒、灰色粒、黒色光沢粒を少量、3mm以下の白色粒をわずかに含む。
51	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				ナデ	ナデ	褐灰 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	3mm以下の褐灰色粒を少量、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
52	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm以下の白色粒、浅黄橙色粒、2mm以下の黒色粒をごくわずかに含む。
53	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	明褐 7.5YR5/6	褐 7.5YR4/4	3mm以下の灰白、浅黄橙、黒褐光沢粒を多く含む。
54	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅲ				工具横ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	2mm以下の黒色光沢粒、3mm以下の灰白色粒をわずかに含む。
55	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	褐 7.5YR4/4	明褐 7.5YR5/6	3mm以下のにぶい橙粒を少し、2mm以下の黒褐光沢粒を多く含む。
56	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	褐 10YR4/4	褐 10YR4/4	3mm以下の黒色光沢粒を少量、1mm以下の灰色粒をわずかに含む。
57	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	灰赤 2.5YR4/2	にぶい赤褐 2.5YR4/4	5mm以下の灰白色粒を少量、3mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
58	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	横ナデ	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/4	3mm以下の灰白色粒、褐色粒、2mm以下の灰色粒、黒色光沢粒をわずかに含む。
59	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅲ	(20.7)			不明（風化）	不明（風化）	明赤褐 5YR4/6	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm以下の灰白色粒、黒色光沢粒、2mm以下の半透明粒をごくわずかに含む。
60	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ	(21.6)			斜工具痕ナデ	横工具痕ナデ	にぶい黄褐 10YR5/4	褐 10YR4/4	2mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の灰白色粒をわずかに含む。
61	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅲ				横工具痕	横工具痕ナデ	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/6	2mm以下の黒色光沢粒を少量、5mm以下の灰色粒を多く含む。
62	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ				横・斜工具痕	不明（風化）	にぶい赤褐 2/5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm以下の白粒、2mm以下の灰白色粒、黒色光沢粒、透明粒をわずかに含む。
63	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ				横工具痕	不明（風化）	褐 10YR4/6	にぶい黄褐 10YR5/4	3mm以下の黒色光沢粒を少量、8mm以下の灰色、灰白色粒を多く含む。
64	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	褐 7.5YR4/6	暗褐 10YR3/3	2mm以下の黒色光沢粒、灰色粒、灰白色粒をわずかに含む。
65	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ				斜・横条痕	横条痕？	黄褐 10YR5/6	明黄褐 10YR6/6	2mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の灰色粒を少し含む。
66	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ				斜工具殻条痕	横工具殻条痕	褐 7.5YR4/6	灰褐 7.5YR5/2	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに、5mm以下の橙色、灰白色粒を多く含む。
67	縄文土器	浅鉢	底部付近	Ⅱ				斜・横工具痕	斜・横工具痕	暗褐 10YR3/3	暗褐 10YR3/4	3mm以下の黒色光沢粒を少量、6mm以下の灰白色粒を多く含む。
68	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ				横工具痕	不明（風化）	褐 10YR4/4	にぶい黄褐 10YR5/4	1mm以下の黒色光沢粒、5mm以下の灰白色粒をわずかに含む。
69	縄文土器	深鉢	底部	Ⅱ		(7.4)		不明（風化）	不明（風化）	褐 7.5YR4/4	橙 7.5YR6/6	3mm以下の灰白色粒を少量、2mm以下の灰白色粒、黒褐光沢粒を多く含む。
70	縄文土器	深鉢	底部	Ⅶ		(8.2)		不明（風化）	不明（風化）	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	9mm以下の褐灰色粒、5mm以下の白色粒、3mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
71	縄文土器	深鉢	底部	Ⅱ Ⅲ		(10.0)		不明（風化）	工具ナデ	明褐 7.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
72	縄文土器	深鉢	底部	―		(6.8)		不明（風化）	不明（風化）	にぶい赤褐 5YR4/4	灰褐 7.5YR4/2	6mm以下の灰色粒、灰褐色粒をわずかに、1mm以下の半透明粒をごくわずかに含む。
73	縄文土器	深鉢	底部	Ⅱ		(8.4)		不明（風化）	横ナデ	褐 7.5YR4/4	にぶい黄褐 10YR6/4	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに、5mm以下の灰色粒を多く含む。
74	縄文土器	深鉢	底部	Ⅶ		(7.5)		不明（風化）	不明（風化）	褐 7.5YR4/4	灰黄褐 10YR5/2	3mm以下の白粒、2mm以下の灰白色粒、黒色光沢粒をわずかに含む。
75	縄文土器	深鉢	底部	―		(8.6)		不明（風化）	不明（風化）	赤褐 5YR4/6	にぶい橙 5YR6/3	3mm以下の灰色、灰白色粒を少量含む。
76	縄文土器	浅鉢	口縁～頸部	Ⅲ				ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR4/4	微細な淡黄色粒をごくわずかに含む。
77	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅱ				横ミガキ	横ミガキ	褐 7.5YR4/4	にぶい褐 7/5YR5/4	3mm以下のにぶい褐粒、2mm以下の橙、灰白色粒を少量含む。
78	縄文土器	浅鉢	口縁～頸部	Ⅱ				ナデ	横工具ナデ	にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい褐 2.5YR5/4	1mm以下の灰白色粒、微細な透明粒を僅かに含む。
79	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	―				横ナデ	横工具ナデ	赤褐 2.5YR4/6	にぶい赤褐 5YR4/3	微細な光沢粒をごくわずかに含む。

遺物番号	種別	器種	部位	層位	法量（cm）※（推定値）			調整		色調		胎土の特徴
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
80	縄文土器	浅鉢	口縁～頸部	Ⅶ				ナデ	横工具ナデ	にぶい赤褐 10YR6/3	にぶい褐 10YR6/4	1mm以下の灰白色粒、微細な透明粒を僅かに含む。
81	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅱ				横ナデ	横工具痕	明黄褐 10YR6/6	黄褐 10YR5/6	1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。
82	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅲ				横ミガキ	横ミガキ	橙 7.5YR7/6	褐灰 10YR4/1	3mm以下の黒褐光沢粒をわずかに、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む。
83	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅲ				横工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	1mm以下の黒色光沢粒をごくわずかに含む。
84	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	横・斜ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む。
85	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅲ				横ミガキ	横ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/6	1mm以下の黒色粒をわずかに含む。
86	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅲ				横ミガキ	横ミガキ	褐 7.5YR4/6	褐 7.5YR4/6	3mm以下の灰白色粒をわずかに含む。
87	縄文土器	浅鉢	胴部	Ⅱ				横ミガキ	横ミガキ	赤褐 5YR4/8	赤褐 5YR4/8	2mm以下の灰色粒わずかに含む。
88	縄文土器	深鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	不明（風化）	にぶい黄橙 10YR4/3	にぶい黄橙 10YR5/4	5mm以下のにぶい黄褐、褐灰粒を少量、3mm以下のにぶい黄橙粒を多く含む。
89	縄文土器	鉢	口縁部	Ⅱ				不明（風化）	横ナデ	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	4mm以下の褐灰色粒を多く含む。
90	縄文土器	不明	胴部	Ⅶ				不明（風化）	不明（風化）	褐 10YR4/6	にぶい黄褐 10YR5/4	3mm以下の灰白色粒を少量、黒色光沢粒をわずかに含む。
213	須恵器	蓋杯	器高	Ⅱ		(8.4)		回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	3mm以下の黒色粒をわずかに含む。
215	縄文土器	深鉢	胴部	―				不明（風化）	不明（風化）	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	6mm以下の灰白色粒を少量、3mm以下の黒色光沢粒をごくわずかに含む。
216	縄文土器	深鉢	胴部	―				横工具痕	横工具痕？	明褐 7.5YR5/8	明褐 7.5YR5/8	3mm以下の黒色光沢粒をわずかに、4mm以下の灰白色粒を多く含む。
217	弥生古墳	壺	口縁部	Ⅱ				斜工具痕	不明（風化）	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	3mm以下の灰色粒、暗褐色粒を少量含む。
218	不明	土錘	完形	Ⅶ		1.65	4.7			灰白 10YR8/2	―	1mm以下の灰色粒をわずかに含む。
219	不明	煙管		―								

第５表　中畑遺跡出土石器計測表

遺物番号	器　種	石　材	出土地点遺構・Gr	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
1	石刃	流紋岩	G3	Ⅱ	5.05	1.65	0.60	4.9	旧石器
4	石鏃	チャート	SC1	－	2.45	1.45	0.45	1.0	Ⅰ②a
5	石鏃	安山岩	SC1	－	1.45	1.50	0.40	0.5	Ⅱ③
6	石鏃	安山岩	SC1	－	2.55	1.70	0.40	1.3	Ⅲ③
7	打製石斧	砂岩	SC1	－	16.55	4.85	2.10	123.9	Ⅱ①
8	打製石斧	砂岩	SC1	－	7.70	6.30	1.35	78.6	Ⅱ①
9	打製石斧	砂岩	SC1	－	19.00	8.20	2.20	180.7	Ⅰ③
10	打製石斧	緑色片岩	SC1	－	7.80	4.82	1.30	52.4	Ⅱ④
11	ナイフ形石器	流紋岩	SC1	－	5.50	2.05	0.80	8.5	旧石器
13	石鏃	安山岩	SC2	－	2.00	1.40	0.50	1.1	Ⅰ①
14	石鏃	チャート	SC2	－	1.90	1.95	0.45	0.7	Ⅳ
15	打製石斧	砂岩	SC2	－	8.14	5.55	1.80	106.2	Ⅱ④
16	打製石斧	砂岩	SC2	Ⅱ	11.80	8.20	1.70	155.9	Ⅲ
18	打製石斧	砂岩	SC3	Ⅱ	13.12	5.50	1.25	103.2	Ⅱ③
19	石錘	干枕貝	SC3	Ⅱ	7.60	11.00	1.60	206.5	
91	石鏃	チャート	E3	Ⅲ	2.15	1.55	0.50	1.3	Ⅰ①
92	石鏃	チャート	A-西 Tr	－	2.55	1.95	0.55	3.3	Ⅰ①
93	石鏃	チャート	H3	Ⅱ	2.40	1.80	0.60	1.8	Ⅰ①
94	石鏃	安山岩	J2	Ⅱ	3.25	1.80	0.40	1.8	Ⅰ①
95	石鏃	安山岩	17Tr	Ⅱ	1.80	1.20	0.30	0.5	Ⅰ①
96	石鏃	安山岩	H3	Ⅱ	2.55	1.85	0.40	2.3	Ⅰ①
97	石鏃	安山岩	G3	Ⅱ	2.56	1.65	0.37	1.4	Ⅰ①
98	石鏃	安山岩	I2	Ⅱ	2.05	1.35	0.30	0.8	Ⅰ①
99	石鏃	チャート	F4	Ⅱ	2.15	1.40	0.30	0.8	Ⅰ②
100	石鏃	チャート	G3	Ⅱ	2.05	1.70	0.45	1.0	Ⅰ②
101	石鏃	チャート	I2	Ⅱ	1.90	1.60	0.50	0.8	Ⅰ②
102	石鏃	チャート	16Tr	－	2.65	1.35	0.60	1.6	Ⅰ②
103	石鏃	姫島産黒曜石	F4	Ⅲ	2.80	1.90	0.50	1.8	Ⅰ②
104	石鏃	チャート	D6	Ⅷ	3.00	1.65	0.60	2.4	Ⅰ②
105	石鏃	チャート	D5	Ⅷ	1.45	1.20	0.30	0.3	Ⅰ②
106	石鏃	安山岩	G3	Ⅱ	2.10	1.60	0.30	0.5	Ⅰ②
107	石鏃	安山岩	F3	Ⅲ	2.45	1.10	0.50	0.9	Ⅰ②
108	石鏃	安山岩	G2	Ⅱ	1.65	2.10	0.40	1.1	Ⅰ②
109	石鏃	腰岳産黒曜石	D6	Ⅳ	2.10	1.85	0.60	2.2	Ⅰ②
110	石鏃	チャート	F4	Ⅲ	1.80	1.70	0.40	1.0	Ⅱ③
111	石鏃	チャート	D6	Ⅷ	2.25	1.65	0.60	2.0	Ⅲ①
112	石鏃	チャート	I3	Ⅱ	1.60	1.40	0.35	0.8	Ⅲ①
113	石鏃	チャート	G2	Ⅱ	2.25	2.25	0.60	2.2	Ⅲ①
114	石鏃	安山岩	G3	Ⅱ	2.40	1.75	0.55	1.5	Ⅲ①
115	石鏃	安山岩	G2	Ⅱ	2.25	1.65	0.40	1.5	Ⅲ①
116	石鏃	安山岩	G2	Ⅱ	2.15	1.55	0.40	0.8	Ⅲ①
117	石鏃	安山岩	H2	Ⅱ	2.10	1.30	0.35	0.7	Ⅲ①
118	石鏃	安山岩	G3	Ⅱ	4.30	1.75	0.40	2.3	Ⅲ①
119	石鏃	安山岩	I2	Ⅱ	3.35	2.40	0.50	3.6	Ⅲ①
120	石鏃	チャート	G2	Ⅱ	3.05	1.75	0.60	2.8	Ⅲ①
121	異形石器	安山岩	J3	Ⅱ	1.00	2.15	0.35	0.6	半月形刃器
122	異形石器	姫島産黒曜石	H2	Ⅱ	1.20	2.10	0.35	0.7	半月形刃器
123	異形石器	姫島産黒曜石	I2	Ⅱ	1.00	1.80	0.30	0.4	半月形刃器
124	異形石器	安山岩	H2	Ⅱ	2.50	2.15	0.60	2.1	
125	異形石器	腰岳産黒曜石	G2	Ⅱ	2.50	1.38	0.40	0.9	
126	異形石器	チャート	G3	Ⅱ	1.25	2.40	0.55	1.4	
127	異形石器	黒曜石	G2	Ⅱ	3.75	1.05	0.60	2.5	
128	石匙	チャート	D6	Ⅷ	2.40	4.50	0.50	3.3	
129	石匙	安山岩	G3	Ⅱ	2.96	2.28	0.57	2.8	
130	石錐	チャート	G3	Ⅱ	4.25	1.50	0.90	4.7	
131	石錐	安山岩	F4	Ⅲ	3.00	1.50	0.40	1.5	
132	石錐	安山岩	－	Ⅲ	2.95	1.35	0.45	1.5	
133	石錐	安山岩	H2	Ⅱ	2.00	0.65	0.35	0.8	
134	二次加工剥片	腰岳産黒曜石	G3	Ⅱ	2.30	3.60	0.45	2.6	
135	剥片	水晶	F3	Ⅱ	1.75	2.25	0.95	4.0	
136	剥片	水晶	C6	Ⅷ	2.85	1.40	0.75	2.9	
137	剥片	腰岳産黒曜石	I3	Ⅱ	4.00	3.35	0.65	5.8	
138	剥片	粘板岩	G2	Ⅱ	4.70	7.60	0.80	35.3	
139	原石	黒曜石	H3	Ⅱ	2.90	0.80	0.65	1.6	
140	剥片	チャート	－	Ⅷ	5.20	4.90	1.70	31.3	
141	石鹸	ホルンフェルス	14Tr	Ⅱ	5.30	2.30	1.30	23.0	
142	磨製石製品	貝岩	I3	Ⅱ	5.60	3.10	1.10	30.4	
143	擦痕	流紋岩	I3	Ⅱ	7.40	5.65	1.25	25.2	
144	擦痕	流紋岩	I2	Ⅱ	5.56	6.55	1.45	44.4	
145	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	13.50	5.00	1.90	154.6	Ⅰ①

遺物番号	器種	石材	出土地点遺構・Gr	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
146	打製石斧	頁岩	I3	Ⅱ	6.60	5.10	1.80	77.5	Ⅰ①
147	打製石斧	砂岩	F4	Ⅲ	6.50	3.64	0.90	31.4	Ⅰ①
148	打製石斧	ホルンフェルス	G3	Ⅱ	9.60	5.20	3.25	192.5	Ⅰ①
149	打製石斧	ホルンフェルス	G3	Ⅱ	6.18	5.00	28.50	91.4	Ⅰ①
150	打製石斧	砂岩	F4	Ⅲ	17.20	5.10	1.90	203.2	Ⅰ②
151	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	12.60	4.98	2.00	131.5	Ⅰ②
152	打製石斧	千枚岩	D6	Ⅷ	14.60	4.54	2.00	137.2	Ⅰ②
153	打製石斧	砂岩	F4	Ⅲ	12.46	4.70	1.50	97.4	Ⅰ②
154	打製石斧	砂岩	D6	Ⅷ	5.45	3.30	1.60	42.0	Ⅰ②
155	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	10.50	6.45	2.15	153.9	Ⅰ③
156	打製石斧	砂岩	D6	Ⅷ	10.40	6.15	1.35	108.7	Ⅰ③
157	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	8.05	7.66	1.60	103.5	Ⅰ③
158	打製石斧	砂岩	16Tr	Ⅱ	15.28	8.40	2.40	223.0	Ⅰ③
159	打製石斧	砂岩	H3	Ⅱ	8.70	4.40	1.25	46.0	Ⅱ①
160	打製石斧	砂岩	G2	Ⅱ	11.82	4.60	1.90	121.7	Ⅱ①
161	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	8.18	5.20	1.50	75.8	Ⅱ①
162	打製石斧	千枚岩	F4	Ⅲ	14.90	6.80	1.80	273.8	Ⅱ①
163	打製石斧	ホルンフェルス	J2	Ⅱ	10.85	6.20	1.70	139.0	Ⅱ①
164	打製石斧	頁岩	J2	Ⅱ	9.92	4.25	0.90	47.5	Ⅱ①
165	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	11.55	6.10	1.60	120.6	Ⅱ②
166	打製石斧	砂岩	H2	Ⅱ	15.58	6.50	1.55	167.5	Ⅱ③
167	打製石斧	砂岩	H3	Ⅱ	8.80	4.65	1.80	70.0	Ⅱ③
168	打製石斧	砂岩	16Tr	Ⅱ	7.20	5.25	1.20	57.8	Ⅱ④
169	打製石斧	砂岩	E3	Ⅲ	12.36	6.20	1.90	168.4	Ⅱ③
170	打製石斧	砂岩	E4	Ⅲ	9.44	4.75	2.30	115.2	Ⅱ④
171	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	9.60	5.40	1.65	80.1	Ⅱ④
172	打製石斧	砂岩	I2	Ⅱ	12.60	8.90	18.50	177.4	Ⅲ
173	打製石斧	砂岩	I3	Ⅱ	10.70	5.85	2.20	144.3	Ⅲ
174	打製石斧	砂岩	16Tr	Ⅱ	11.60	7.55	1.50	134.8	Ⅲ
175	磨製石斧	頁岩	G3	Ⅲ	6.05	3.40	1.10	31.8	
176	磨製石斧	砂岩	F3	Ⅲ	12.35	4.60	3.10	281.6	
177	磨製石斧	砂岩	H2	Ⅱ	2.00	3.00	0.80	7.0	
178	磨製石斧	ホルンフェルス	D6	Ⅷ	5.60	3.35	2.45	69.7	
179	磨製石斧	ホルンフェルス	I2	Ⅱ	8.80	4.00	1.80	86.5	
180	磨製石斧	ホルンフェルス	F3	Ⅲ	4.90	4.75	1.60	55.5	
181	磨製石斧	ホルンフェルス	G3	Ⅱ	6.50	6.75	2.05	110.5	
182	磨製石斧	ホルンフェルス	D6	Ⅴ	16.60	6.90	3.90	675.0	
183	磨製石斧	ホルンフェルス	H3	Ⅱ	11.10	5.85	5.10	430.5	
184	横刃形石器	砂岩	F3	Ⅲ	4.85	10.25	1.25	69.6	
185	横刃形石器	砂岩	11Tr	Ⅱ	4.65	9.40	1.10	54.6	
186	横刃形石器	砂岩	F4	Ⅲ	4.85	10.90	1.25	71.7	
187	横刃形石器	砂岩	F4	Ⅲ	7.00	12.90	2.15	178.4	
188	十字形石器	千枚岩	I2	Ⅱ	10.30	8.65	1.85	137.5	
189	円盤状石器	千枚岩	H3	Ⅱ	5.45	5.70	0.80	33.7	
190	石錘	砂岩	F4	Ⅲ	3.00	5.50	1.40	35.9	
191	石錘	千枚岩	I3	Ⅱ	3.70	5.80	1.40	49.0	
192	石錘	砂岩	I2	Ⅱ	3.85	5.60	1.80	55.5	
193	石錘	頁岩	F3	Ⅱ	4.25	5.25	0.90	32.3	
194	石錘	頁岩	－	Ⅱ	2.40	5.35	1.10	22.9	
195	石錘	剪立泥質岩	I2	Ⅱ	4.30	5.85	1.55	51.8	
196	石錘	頁岩	E3	Ⅲ	3.25	5.25	1.30	31.2	
197	石錘	剪立泥質岩	I2	Ⅱ	4.50	5.00	1.80	42.3	
198	石錘	千枚岩	G3	Ⅱ	5.70	7.40	1.50	73.3	
199	石錘	頁岩	H2	Ⅱ	2.55	5.15	8.00	18.3	
200	石錘	ホルンフェルス	H2	Ⅱ	3.70	4.95	1.35	34.8	
201	敲石	砂岩	I2	Ⅱ	9.15	7.25	3.90	378.8	
202	敲石	砂岩	H3	Ⅱ	8.55	6.55	4.20	388.7	
203	敲石	砂岩	E6	Ⅵ	8.65	6.95	4.15	393.6	
204	敲石	チャート	－	Ⅴ	7.10	4.15	3.10	159.7	
205	敲石	チャート	G3	Ⅱ	5.90	4.90	3.70	159.7	
206	石核	姫島産黒曜石	H2	Ⅱ	4.00	2.08	1.25	9.1	
207	石核	流紋岩	F4	Ⅲ	4.85	5.60	4.20	105.0	
208	石核	ホルンフェルス	G3	Ⅱ	8.00	9.30	5.80	449.6	
209	石核	砂岩	D6	Ⅷ	13.50	10.70	4.60	716.9	
210	礫器	砂岩	I2	Ⅱ	10.65	12.55	5.20	840.2	
211	磨石	花崗斑岩	I3	Ⅱ	11.00	12.75	4.70	1002.6	
212	砥石	頁岩	SA1	－	13.20	4.10	3.10	222.1	
214	打製石斧	ホルンフェルス	SI1	－	7.80	5.30	2.60	118.9	

写　真　図　版

図版一（坂ノ下遺跡）

坂ノ下遺跡　散礫・集石遺溝分布状況

図版二（坂ノ下遺跡）

散礫検出状況

SI1・SI3 検出状況（南東から）

SI2 検出状況（北から）

SI3 検出状況（南から）

SI5 検出状況（南から）

SI10 検出状況（南から）

SI12 検出状況（南から）

SI13 検出状況（南から）

SI15・SI19 検出状況（西から）

SI12・SI15・SI19 完掘（西から）

SI16 検出状況（南から）

SI17 検出状況（南から）

SI4 検出状況（南から）

SI4 完掘（南から）

SI6 検出状況（北から）

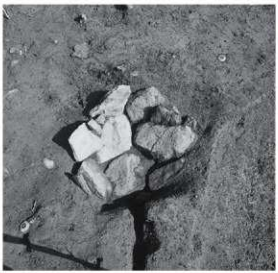
SI6 配石（東から）

図版四（坂ノ下遺跡）

SI7 検出状況（南から）

SI7 配石（南から）

SI8 検出状況（南から）



SI8 配石（南から）

SI8 完掘（南から）

SI9 検出状況（東から）

SI9 配石（南東から）

SI11 検出状況（東から）

SI11 配石（南から）

SI14 検出状況（南東から）

SI14 配石（南から）

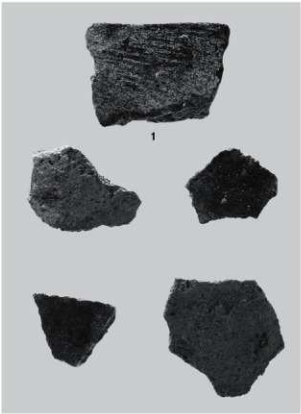
SI18 検出状況（南から）

SI18 配石（南から）

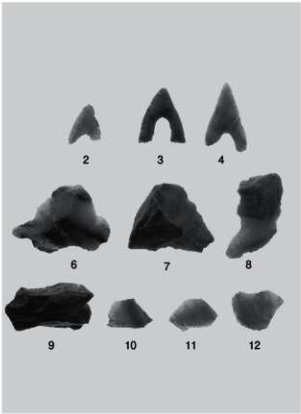
SI18 完掘（南から）

調査区完掘状況

図版六（坂ノ下遺跡）

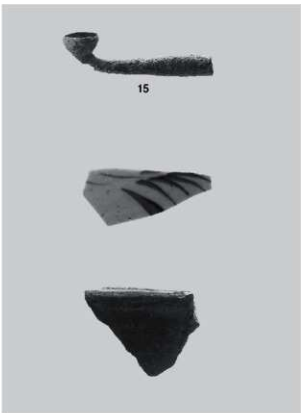


縄文時代早期土器



縄文時代早期石器（石鏃・剥片）

縄文時代早期石器（磨石・剥片）

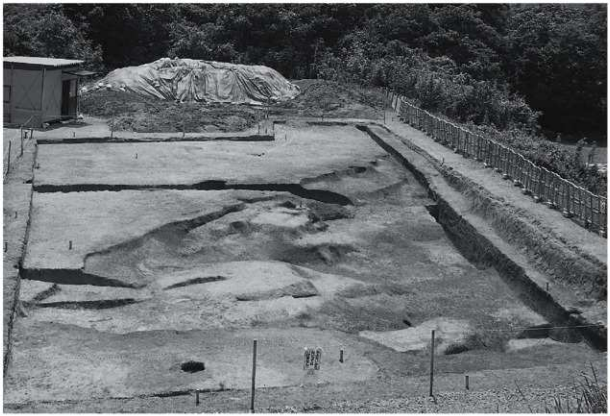


その他の時代の遺物

中畑遺跡全景（真上から）

中畑遺跡全景 B 区（南から）

図版八（中畑遺跡）



A 区谷完掘状況（北東から）

A 区谷内部遺物出土状況（東から）

SC1 遺物出土状況

SC2 遺物出土状況

SC3 検出状況

SC4 半裁状況

SC5 完掘状況

SC6 完掘状況

SC7 完掘状況

SC9 半裁状況

SC10 検出状況

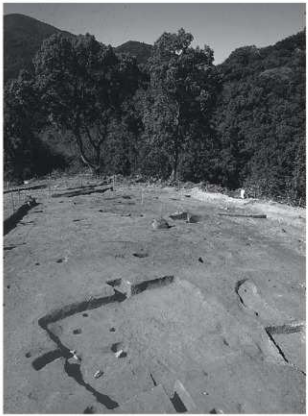
SW2 検出状況

B２区北西壁阿蘇溶結凝灰岩露出状況

SA1 床面検出状況（西から）

SA1 土層堆積状況１（南から）

SA1 土層堆積状況２（東から）



SA1 立地状況（西から）

SA1 遺物出土状況１（北から）

SA1 遺物出土状況２（東から）

SI1 検出状況

SI1 配石状況

SW1 検出状況

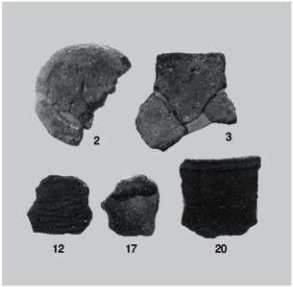
SW1 完掘状況

SI2 検出状況

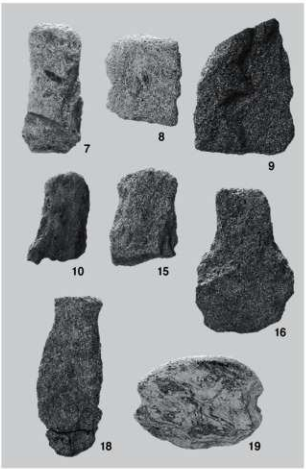
十字形石器出土状況

図版十二（中畑遺跡）

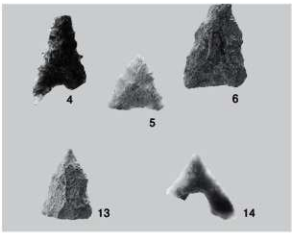
旧石器時代の遺物



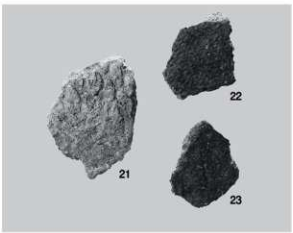
SC1・2・3・9 出土縄文土器



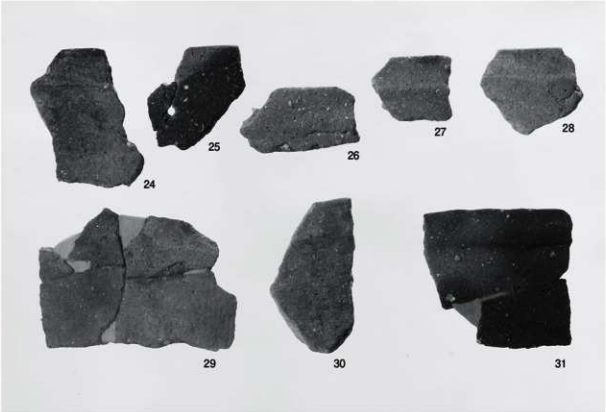
SC1・2・3 出土石器



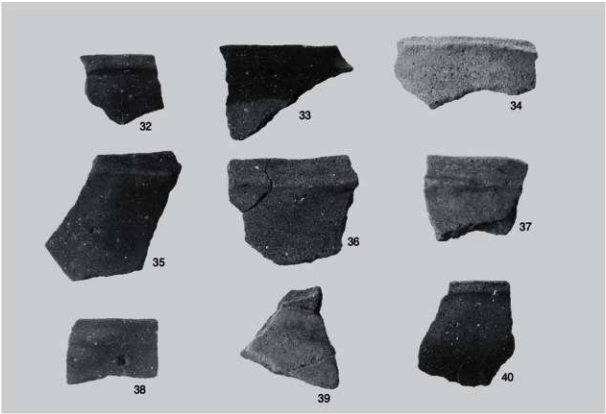
SC1・2 出土石器



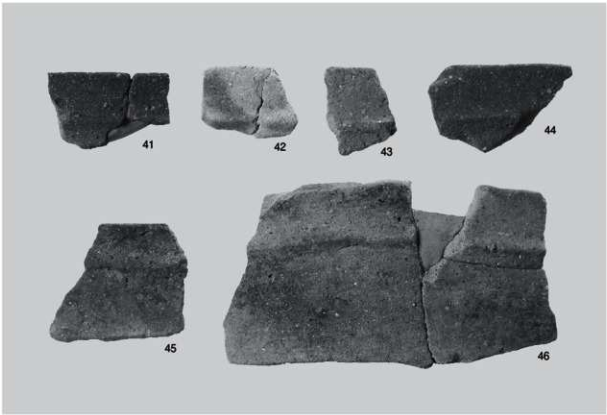
縄文時代早期土器



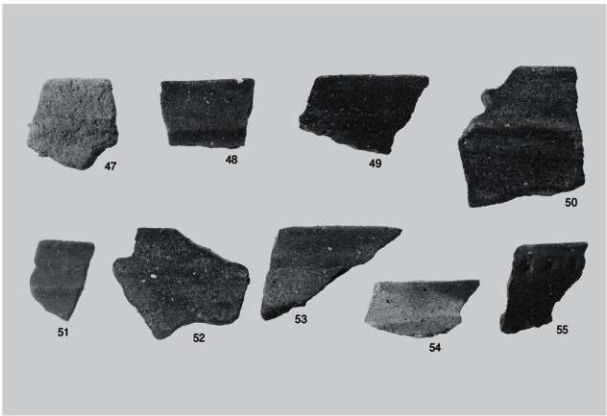
縄文時代晩期土器１　口縁部Ⅰ①類



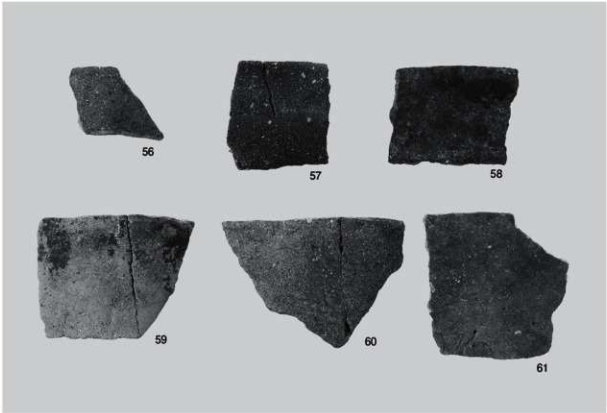
縄文時代晩期土器２　口縁部Ⅰ②ａ類



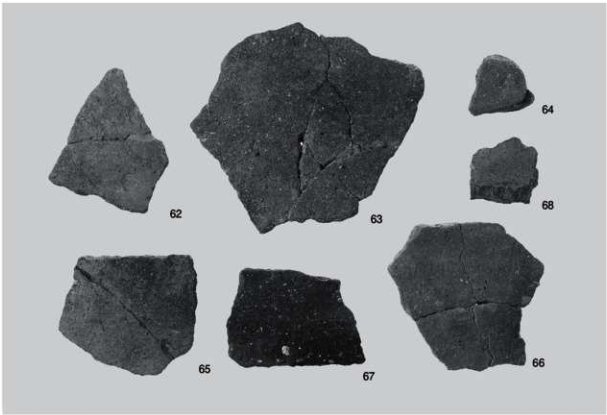
縄文時代晩期土器３　口縁部Ⅰ②ｂ類



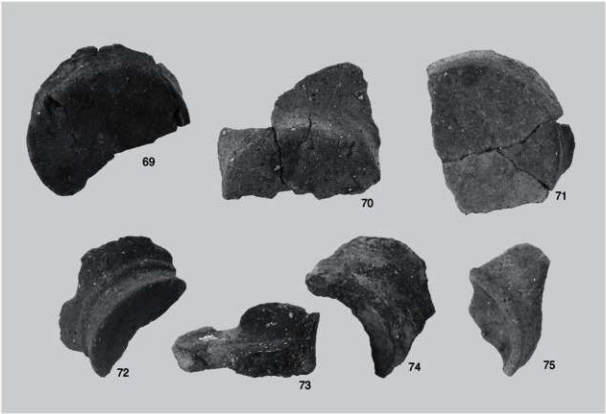
縄文時代晩期土器４　口縁部Ⅰ②ｂ類、Ⅰ③類



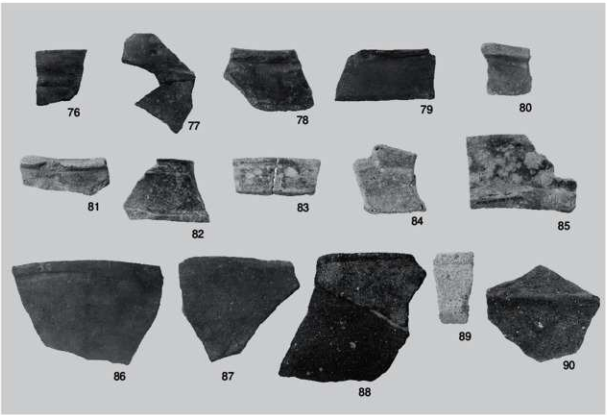
縄文時代晩期土器５　Ⅰ④類



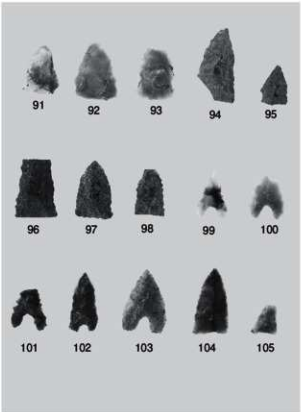
縄文時代晩期土器６　胴部



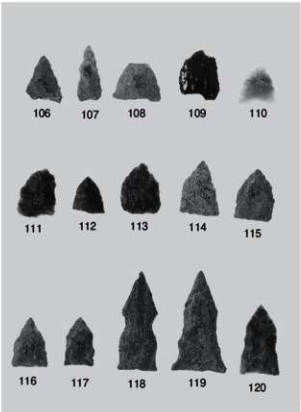
縄文時代晩期土器７　底部



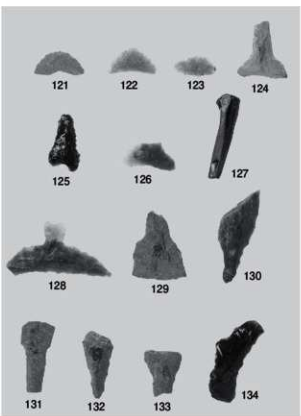
縄文時代晩期土器８　精製土器



打製石鏃１



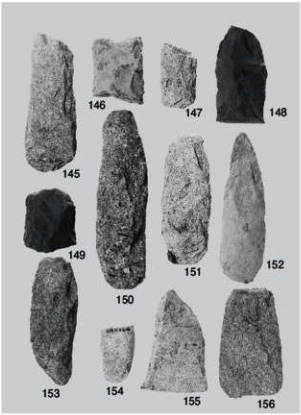
打製石鏃２



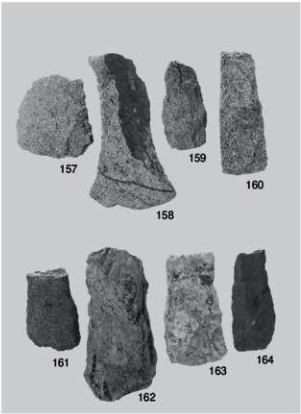
半月形刃器・異形石器・石匙・石錐
二次加工剥片

剥片・石鑿・磨製石製品・掻器

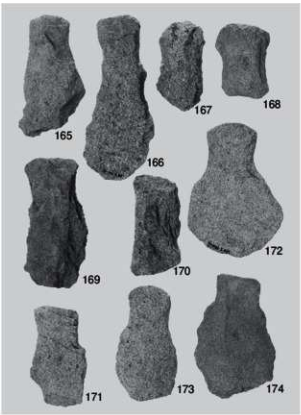
図版十八（中畑遺跡）



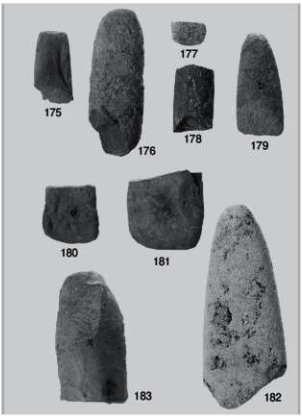
打製石斧１



打製石斧２

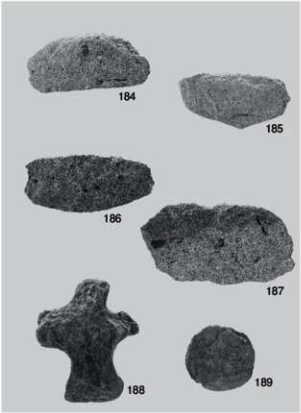


打製石斧３

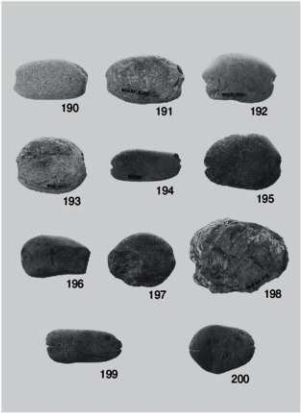


磨製石斧

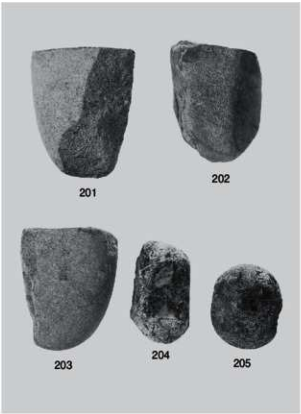
図版十九（中畑遺跡）



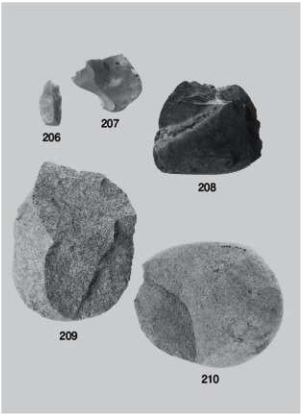
横刃形石器・十字形石器・円盤状石器



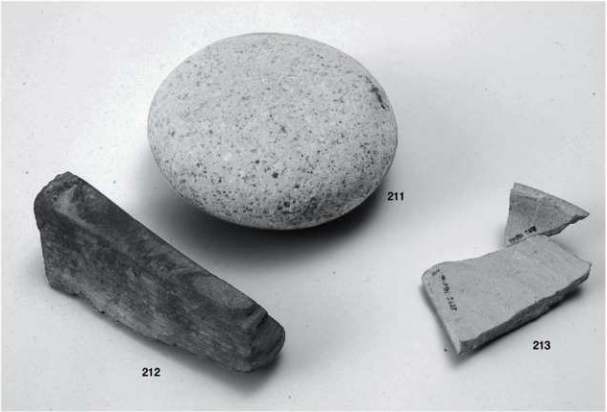
打欠石錘・切目石錘



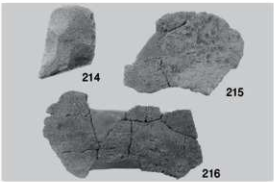
敲石



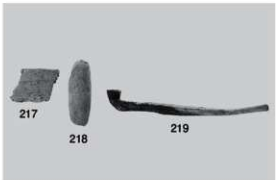
石核・礫器



SA1 出土遺物　磨石・砥石・須恵器



SI1・SW1 出土遺物



その他の遺物

参考資料　流紋岩

参考資料　土師器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さかのしたいせき・なかはたいせき
書 名	坂ノ下遺跡・中畑遺跡
副 書 名	一般国道 218 号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 225 集
編 著 者 名	津曲　健　吉永登志孝
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 880 － 0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地　TEL　0985 － 36 － 1171
発 行 年 月 日	2013 年 2 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さかのしたいせき 坂ノ下遺跡	延岡市北方町蔵田辰 166 － 3	45203		32 度 35 分 16 秒 付近	131 度 30 分 33 秒 付近	20111226 ～ 20120302	300㎡	一般国道 218 号北方延岡道路建設事業
なかはたいせき 中畑遺跡	延岡市北方町蔵田辰 399 他			32 度 35 分 13 秒 付近	131 度 30 分 37 秒 付近	20110525 ～ 20111114	2500㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂ノ下遺跡	集落	縄文時代早期	集石遺構 19 基	貝殻条痕文土器 磨石 石鏃など	4.5㎡に 1 基ときわめて高密度に集石遺構が検出された。
要 約	坂ノ下遺跡は、標高 98 m～ 102m の丘陵部の先端部に位置している。実調査面積 86㎡である。鬼界アカホヤ火山灰層直下に散礫を確認し、下層に 19 基の集石遺構を検出した。また、数は少ないものの縄文時代早期のものと思われる貝殻条痕文土器や石鏃なども出土した。集石遺構の特徴を考慮することによって、縄文時代早期の人々の暮らしの一端を明らかにすることができた。				
中畑遺跡	集落	縄文時代晩期 古墳時代終末期	配石遺構 1 基 土坑 8 基 竪穴住居跡 1 軒	縄文土器 石鏃、石斧、石錘等 須恵器、土師器	十字形石器、異形石器、円盤状石器等、精神文化にかかわる石器が出土した。
要 約	中畑遺跡は、阿蘇 4 火砕流堆積物のつくる段丘上の標高約 130 m の丘陵尾根上に位置している。縄文時代では、生活文化を明確に示す遺構は検出されなかったものの、晩期を中心に突帯文土器や石鏃、石斧、石錘、敲石、異形石器などの多種多様な石器類が出土した。また、古墳時代終末期と思われる竪穴住居跡が 1 軒検出され、丘陵の傾斜地に竪穴住居を構築する周辺遺跡と同様の様相を示す結果となった。				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 225 集

坂ノ下遺跡・中畑遺跡

一般国道 218 号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（9）

2013 年　2 月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL　0985(36)1171　　FAX　0985(72)0660
印　刷　K・P クリエイションズ株式会社
〒 880-0803　宮崎市旭 1 丁目 6 － 25
TEL　0985(24)4155　　FAX　0985(24)1512

Nobeoka City

SAKANOSHITA Site
NAKAHATA Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.225

2013

Miyazaki Prefectural Archaeological Center